

濟定檢省部文

近 軌 學 理 心

篠 小 原 川 助 正 市 行 郎
藤 熊 治 著 共



版 藏 館 文 寶

5
01

41180

教科書文庫

4
130
51-1923
01304 49500

72
129

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



日九十月二年二十正大
濟定檢省部文

教科書文庫
4
130
51-1923
0130449500

中央図書館

系統的教育科教科書

近 軌 學 理 心

篠 原 助 市
小 川 正 行
佐 藤 熊 治 郎
共 著



東 東
版 藏 館 文 寶

広島大学図書

0130449500



緒言

一、本書は曩に師範學校に於ける教育科教科書として編纂したるものにして、明治四十三年初版發行以來、幸に全國各府縣に、師範學校又は教員檢定試験用として採用せられ、既にいづれも數版を重ねたり、其の間學說の進歩に伴ひ、時々一部分の訂正を行ひ來りたるが、今や戰後教育思潮の一大變遷に伴はざるべからざるを以て、特に今回全部に亘りて大改造を加へ、新組織のものとしたり。

一、本書の編纂に當り、著者等は他の教育分科の各教科書相互の連絡に注意し、相補益して生徒の理解を容易ならしめ、又なるべく材料を精選して、重要なものは稍之を詳述して、他は之を略叙し、或は已むを得ず全く之を省略する等實際教授上の便宜を考

広島大学図書

0130449500



慮したり。

一、材料の選擇及び説明につきては、特に兒童教育上重要な關係を有するものに注意し、且これを精敍せり。従つて神經生理の如く、特別に生理學に於て學習すべき部分、感覺、單一感情の如く、實驗的研究の成果は豊富なれども、教育上さまで重視するに足らざる部分はなるべく之を略説せり。又各章節に於て兒童心理の大要を加へて、兒童心理學及び實驗教育學研究の結果を參酌し、別に社會心理の梗概をも加へたり。

一、教育上の應用につきては、各章節に於て便宜にこれを附説すると共に、情的現象及び意的現象にありては、別に各篇の終に總括的敘述を試みたり。

一、心理學中、思考の條下に論理學の大意を加ふるは、多く行はるゝ方法なれども、此の二學は全く其の性質を異にせるものなれば、

斯かる方法は、心理學及び論理學の科學的性質を誤解せしむるの虞なしとせず。されば兩者を併せ授くる場合に於ては、一應心理學を教授し終れるの後、別に編せる輓近論理學につきて、其の梗概を説明せられんことを望む。

大正十一年八月

著者識

近 輓

心理學目次

縮論

第一章 心理學の任務……………一

第二章 心理學研究の方法……………四

第三章 心理學の種類……………七

本論

第一篇 心的現象汎論

第一章 心的現象の生理的基礎……………一

第一節 神經系統の機能……………一

第二節 神經原……………三

第三節 末梢と中樞……………五

第四節 抑制作用……………九

目次

第二章 心的現象發現の條件……………二〇

第一節 意識の特徴……………二〇

第二節 注意……………二四

第三節 記憶……………三三

第二篇 知的現象……………三九

第一章 感覺……………三九

第一節 感覺の意義及び分類……………三九

第二節 皮膚の感覺……………四〇

第三節 味覺及び嗅覺……………四三

第四節 聽覺……………四四

第五節 視覺……………四七

第六節 運動感覺……………五二

第七節 有機感覺……………五三

第八節 感覺の實驗……………五四

第九節 兒童の感覺……………五六

第十節 感覺と教育……………五八

第二章 知覺……………六〇

第一節 感覺と知覺……………六〇

第二節 空間の知覺……………六二

甲 觸空間……………六三

乙 視空間……………六五

第三節 時間の知覺……………六八

第四節 變化及び運動の知覺……………七〇

第五節 錯覺……………七〇

第六節 兒童の知覺……………七三

第七節 知覺と教育……………七六

第三章 心像……………七八

第一節 知覺と心像……………七八

第二節	心像の型式	八〇
第三節	聯想(一) 再現	八二
第四節	聯想(二) 再認	八七
第五節	聯想の實驗	八九
第六節	夢及び幻覺	九〇
第七節	想像	九二
第八節	兒童の想像と教育	九五
第四章	思考作用	九六
第一節	思考と統覺	九六
第二節	概念	一〇〇
第三節	言語	一〇四
第四節	斷定	一〇八
第五節	推理	一一〇
第六節	兒童の思考	一一三

第七節	思考作用と教授	一一四
第三篇	情的現象	一一七
第一章	單一感情	一一七
第二章	複合感情	一二二
第三章	情緒	一二六
第一節	情緒と其の種類	一二六
第二節	氣色及び激情	一三二
第四章	情操	一三三
第五章	感情の教育	一三九
第四篇	意的現象	一四三
第一章	運動及び意志	一四三
第二章	反射運動及び本能	一四五
第三章	人類の本能	一四八

第一節 本能の種類……………一四九

第二節 本能の變化と教育……………一五七

第四章 衝動及び欲望……………一六〇

第五章 執意……………一六二

第六章 順應及び習慣……………一六七

第一節 順應の學習……………一六七

第二節 習慣……………一七一

第七章 意志の教育……………一七五

第五篇 動作及び特殊機能……………一八一

第一章 動作成立の條件……………一八一

第二章 動作發現の形式……………一八二

第一節 動作發動の形式……………一八二

第二節 動作表現の形式……………一八三

餘論

第三章 動作を變化せしむる條件……………一八七

第一節 練習……………一八七

第二節 疲勞……………一九二

第三節 作業の徑路……………一九八

第四節 作業に及ぼす藥品の影響……………一九九

第一章 兒童心身の發達……………二〇一

第一節 發達期の區分……………二〇一

第二節 幼兒期……………二〇二

第三節 兒童期……………二〇四

第四節 少年期……………二〇六

第五節 青年期……………二〇八

第二章 人格及び個性……………二〇九

第一節 自我意識と人格……………二〇九

第二節	個性	二二四
第三章	社會心理	二二〇
第一節	社會的結合	二二〇
第二節	暗示模倣及び同情	二三三
第三節	自己主張	二三六
第四節	社會組織	二三九
第五節	社會の進歩と個人	二四一

輓近
心理學目次終

輓近
心理學

縮論

第一章 心理學の任務

心理學の對象

宇宙間の現象は多種多様なりと雖も、之を大別して心的現象及び物的現象の二種となす。物的現象とは、火の燃え、水の流れ、日月の運行するが如く、凡て外界に於ける事物の生起變化にして、之を研究する科學を自然科學といふ。然るに心的現象は之に反し、人の直接に經驗する所にして、喜怒哀

心理學の研究
事項

樂の情を始めとし、記憶、想像、欲望の如き内界の出來事を總稱す、心理學は是等の心的現象を以て研究の對象となし、心的現象の全般に亙りて、一々其の性質を明かにし、其の間に存する法則を求むる科學にして、研究の範圍大凡左の如し。

- 一、心的現象を單純なる要素に分析し、其の如何なる要素より成るかを明らかにすること。
- 二、心的要素の相結合する状態、及び諸種の心的現象相互の關係を明らかにし、其の生起發達の法則を決定すること。

三、心的現象と身體特に神經系統との關係、及び家庭、社會等、周圍の状態の精神に及ぼす影響を決定すること。

上に心理學を以て心的現象を研究する科學となせるが、此の外、心理學の定義につきて種々の説をなすものあり、心理學を「精神の科學」となす見

解は最も古く行はれたれども、こは精神なる語の多義にして、時には心の本體即ち心靈と同一の意に用ひらるゝことあるが爲に、動もすれば誤解を起し易し。又心的現象の特質を以て、人の直接に經驗する所にありと見之を「直接經驗の學」となすものあり。心的現象は凡て行動に表現すとの見地より、之を「人間行動の學」となすものあり。殊に最後の定義は、近時次第に勢力を得、爲に行動派なる一派の心理學を成すに至れり。

心理學は斯く心の現象を研究する科學なるを以て、倫理學、社會學、論理學、歴史等を始めとし、苟も精神に關係ある一切の科學にして、心理學の補助を受けざるはなし。されば諸種の精神科學の發達は、斯學の發達を待ちて始めて、可能なりといふも、敢へて過言にあらず。中にも教育學は心理學と最も密接なる關係を有し、兒童の性質を知悉し、其の發達を助長する方法を定むる上に於て、凡て心理學の所説を基礎とせざるべからず。教育者の先づ心理學を研究せざる可

基礎學としての
心理學

からざる所以實に此に存す。

第二章 心理學研究の方法

科學の研究

凡そ科學の研究は、先づ研究せんとする事實を觀察、實驗し、次に、是等の觀察及び實驗によりて得たる結果に基づきて、種々の推究をなし、事物相互の間に存する法則を發見し、最後に、此の法則の確否を證明することを要す。即ち科學の研究は觀察及び實驗に始まり證明に終るものとす。而して心理學に於ける觀察及び實驗は、物理學等に於けるものとは異なり、研究の對象が研究者には直接經驗する能はざる他人の精神状態なるが故に、自ら特殊の方法を必要とす。

一、内省と觀察 觀察せらるゝ人の精神と觀察する人の精神とは異ならざるべからず。前者はたゞ自己の心に現る

内省と觀察

る状態をありのままに觀察して、之を研究者に報告すべく、後者は斯くして報告せられたる言語によつて、其の人の精神状態を類推せざるべからず。類推とは自己の經驗に基きて他人の經驗を知らんとする方法にして、類推の手段となる者、例へば言語、表情の如き者は、兩者の經驗を共通に表はし得といふことを假定す。此の假定なくしては、心理學的研究は行ふことを得ず。此の際類推の基礎となる經驗を内省と云ひ、其の手段となる經驗を觀察と云ふ。觀察は言語によるを便とするも、又表情、動作等によりて之を補はざるべからず。かゝる種々なる表出によつて觀察する時は、下等なる動物の行動より高尚なる人間の文化的事業に至るまで、其の表現の基礎となれる精神状態を察知するを得べく、更に精神病者、犯罪者並に兒童の精神状態の如く、内省による類

推の困難なる者も、其の真相を判断することを得るに至るべし。

實驗と検査

二、實驗と検査

觀察も單に自然のままにて之を行ふ時は、同一事實が反復して現はるゝも、其が如何にして現はるかを確認すること能はず。従つて常に必ず斯くあるべしと認めらるゝためには、其の現象の生起する條件を明かにせざるべからず。一現象が生ずるに必要缺くべからざる條件を見出すために、觀察の方法を計畫的に變化して行ふ者を實驗と云ふ。例へば、文字を讀むに同時に認め得る數には、一定の制限あることを觀察し得るも、其が如何に注意の範圍によつて規定せられ、更に注意の範圍か如何程までに擴大し得るかを知るには、實驗的に文字の數配置等の條件を變化して觀察せざるべからざるが如し、又個人の精神が具體

的に現はるゝ場合には、決して種々なる性質が分離せる者にあらずして、常に渾一的なる心の働として認めらる。斯かる具體的の心の働を一定の仕事を遂行する上より見て評價するときは、此の評價は、精神の能力として、仕事の効果を測定する標準となる。斯かる能力の程度を各個人について測定することを精神検査と云ふ。
Mental test

第三章 心理學の種類

通常心理學を大別して二種となす。一般心理學及び特殊心理學是なり。一般心理學とは成人の一般に有する心的現象を研究するものにして、單に心理學といふときは、之を指すを常とす。特殊心理學は研究の對象方法、應用等の諸點に於て特殊の方面を限り研究するものにして、種類甚だ多し。

兒童心理學
青年心理學

變態心理學

社會心理學
民族心理學

動物心理學

左に其の中重要なものを列舉せん。

一、**兒童心理學**及び**青年心理學** 前者は幼兒及び兒童の心的現象を研究するものにして、後者は特に青年の精神状態を研究するものなり。

二、**變態心理學** 異常なる心的現象を以て研究の對象となすものにして、精神病學、犯罪心理學、催眠心理學等は之に屬す。

三、**社會心理學** 社會的生活に於て現るゝ特殊の心的現象、例へば、愛國心、輿論、流行等の如きものにつきて研究するものなり。又民族としての特有の精神的產物、特に神話、言語、習俗等につきて研究するものを、特に**民族心理學**といふ。

四、**動物心理學** 動物の精神につきて研究するものなり。

比較心理學

實驗心理學
生理的心理學
應用心理學
精神技術學
教育的心理學

又下等動物より人類に至る迄の心的現象を比較的に研究し、精神發達の有様を明らかにするときは、之を**比較心理學**といふ。動物心理學と比較心理學とは同一の意義に用ひらるゝこと多し。

其の他、研究の方法よりしては**實驗心理學**あり。感覺機關及び神經系統の生理状態よりして心的現象を研究す。實驗心理學と頗る密接の關係を有する**生理的心理學**あり。又實驗的に得られたる法則を實際生活に應用する者を一般に**應用心理學**或は**精神技術學**と云ひ、其中特に教育上の應用に注意する場合は之を**教育的心理學**と云ふ。本書は固より一般心理學の大要を述ぶるを以て、其の眼目となせども、又**兒童心理學**、**實驗心理學**及び諸種の特殊心理學中、教育者の参考となるべきものを舉げ、且特に其の教育上に於ける應

用的方面を重要視せり。

本論

第一篇 心的現象汎論

第一章 心的現象の生理的基礎

第一節 神経系統の機能

能
神経系統の機

廣く、之を動物全般につきて觀察するに、高等動物は固より、アミイバの如き下等なる單細胞動物にても、尙能く、外來の刺激に對して、一定の反應をなすことを得、即ち刺激に對して、或運動を引き起すことは動物の根本性能にして、其次第に高等に進むに従ひ、以上の反應を完全に且容易ならしめんが爲に、Nervous System 神経系統と稱する特別の機關を生じ、終に刺激を受容する神経、運動を解發する神経、及び是等兩者を連絡し、之を支配する諸種の中樞を分化するに至る。されば神

神經活動の一單位

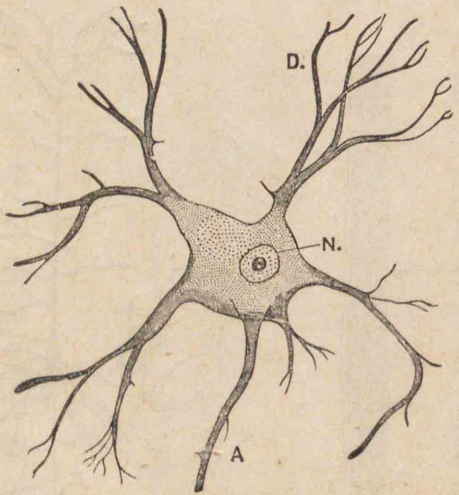
經系統は本來刺激と運動とを連結する機關として發生せるものにして、其の機能は外界より受容せる刺激を適當なる反應運動に變化せしむるにありて存す。刺激と運動との連絡は、或は下等動物に於けるが如く、直接的なることあり、或は高等動物及び人類に於けるが如く、其の間に種々の精神作用の加はり、間接的なることあれども、要するに神經の活動は感覺に始まりて運動に終るものにして、此の感覺より運動に至る間を神經活動の一單位となし、之を**感覺運動**と名づく。

神經系統の活動状態は之を電話に比較することを得べし。始めて電話を架設せしときは、通話線未だ甚だ複雑ならざれども、市街の發達し、交通の頻繁となるに従ひて、線路次第に錯綜するに至る如く、神經系統亦動物の行動が複雑となるに従ひて益々完成す。電話に於て一定の加入者が通

脊髓前根に於ける神經細胞

ND A 軸索突起 樹枝狀突起 核

神經原

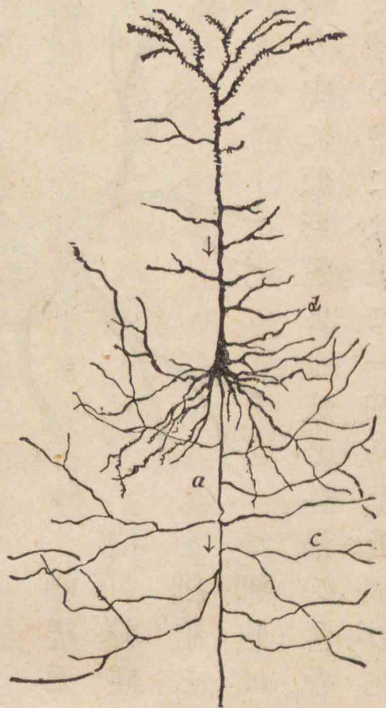


話する對者の略ぼ一定せるは、恰も或神經AのB神經に對する關係が他のC神經に對する關係よりも一層緊密なるに等しく、又電話本局及び支局の任務は大脳及び其の他の中樞の作用に似たり。而して電話の目的が應對にあるは、猶神經系統の機能が刺激と運動との連絡にあるが如し。

第二節 神經原

神經系統を構成する所の單位を**神經原**と稱す。神經原は之を細胞と纖維との二部に分かす。細胞は外圍に柔軟なる膜を被り、中に原形質より成る粘液を含む粘液の中には核を有し、核の中には更に一個乃至數個の仁あり。細胞は其の表面より二種の突起を出す。其の一を**軸索突起**といひ、他を**樹枝**

大脳皮質に於ける稜錐狀細胞
↓ c d a
軸索突起
樹枝狀突起
側突起
刺激傳達の方向



神經纖維の擴大圖
軸索
髓鞘
シユワ
ン氏鞘
ランゲ
氏輪
絞窄輪
N PMA



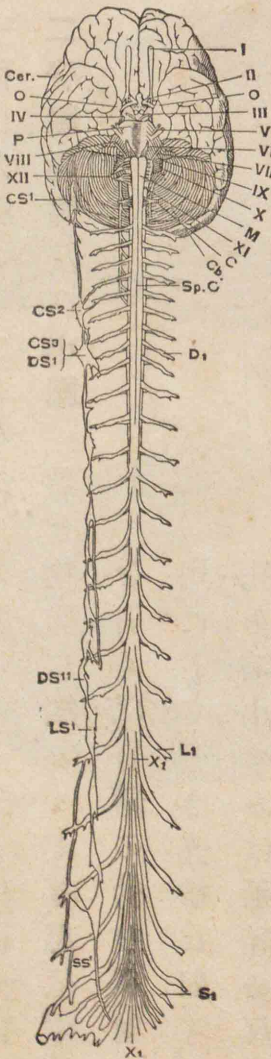
ける軸索突起は、他の神經原の樹枝狀突起と交互に相接觸して、連絡を保ち、興奮を一定の方向に傳達す。即ち軸索突起に興奮を細胞より遠き方向に傳へ、樹枝狀突起は之を細胞に向つて傳達するの用をなす。

發達せるものは、中心部に半透明の軸索あり。之を圍繞するに髓鞘を以てし、髓鞘は更にシユワン氏鞘に蔽はる。一の神經原に於

神經系統
大脳 嗅覺中樞 延髓 小腦 脊髓 脊髄
I 頸神經 Ⅱ 頸神經 Ⅲ 頸神經 Ⅳ 頸神經 Ⅴ 頸神經 Ⅵ 頸神經 Ⅶ 頸神經 Ⅷ 頸神經 Ⅷ 頸神經 Ⅸ 頸神經 Ⅹ 頸神經 Ⅺ 頸神經 Ⅻ 頸神經
C 第一頸椎神經 Ⅰ 第一頸椎神經 Ⅱ 第一頸椎神經 Ⅲ 第一頸椎神經 Ⅳ 第一頸椎神經 Ⅴ 第一頸椎神經 Ⅵ 第一頸椎神經 Ⅶ 第一頸椎神經 Ⅷ 第一頸椎神經 Ⅷ 第一頸椎神經 Ⅸ 第一頸椎神經 Ⅹ 第一頸椎神經 Ⅺ 第一頸椎神經 Ⅻ 第一頸椎神經
D 第一腰椎神經 Ⅰ 第一腰椎神經 Ⅱ 第一腰椎神經 Ⅲ 第一腰椎神經 Ⅳ 第一腰椎神經 Ⅴ 第一腰椎神經 Ⅵ 第一腰椎神經 Ⅶ 第一腰椎神經 Ⅷ 第一腰椎神經 Ⅷ 第一腰椎神經 Ⅸ 第一腰椎神經 Ⅹ 第一腰椎神經 Ⅺ 第一腰椎神經 Ⅻ 第一腰椎神經
S 第一腰骨神經 Ⅰ 第一腰骨神經 Ⅱ 第一腰骨神經 Ⅲ 第一腰骨神經 Ⅳ 第一腰骨神經 Ⅴ 第一腰骨神經 Ⅵ 第一腰骨神經 Ⅶ 第一腰骨神經 Ⅷ 第一腰骨神經 Ⅷ 第一腰骨神經 Ⅸ 第一腰骨神經 Ⅹ 第一腰骨神經 Ⅺ 第一腰骨神經 Ⅻ 第一腰骨神經
X 尾間骨神經 Ⅰ 尾間骨神經 Ⅱ 尾間骨神經 Ⅲ 尾間骨神經 Ⅳ 尾間骨神經 Ⅴ 尾間骨神經 Ⅵ 尾間骨神經 Ⅶ 尾間骨神經 Ⅷ 尾間骨神經 Ⅷ 尾間骨神經 Ⅸ 尾間骨神經 Ⅹ 尾間骨神經 Ⅺ 尾間骨神經 Ⅻ 尾間骨神經
CS 交感神經 Ⅰ 交感神經 Ⅱ 交感神經 Ⅲ 交感神經 Ⅳ 交感神經 Ⅴ 交感神經 Ⅵ 交感神經 Ⅶ 交感神經 Ⅷ 交感神經 Ⅷ 交感神經 Ⅸ 交感神經 Ⅹ 交感神經 Ⅺ 交感神經 Ⅻ 交感神經

第三節 末梢と中樞

神經系統は、無數の神經原の相結合して成れるものにして、其の機能は前に述べたる如く、感覺神經によりて傳へら



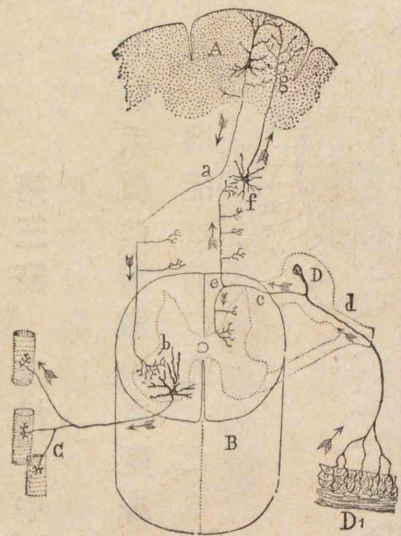
れたる外來の刺激を、中樞によりて調節し、運動神經によりて、適當なる反應運動を起さしむるにあり。刺激と運動との連絡は頗る多様なれども、大凡之を

一、感覺神經と運動神經とが、脊髓にて直接に連絡するも

刺激と運動との連絡圖式

C b a A g f e c D D₁

末梢機關
脊髄神經節
脊髄後根
上行下行分岐點
神經細胞
大脳皮質
錐狀細胞
同上軸索突起
脊髄前根
末梢運動機



の、

一、二者が延髓・小脳等、大脳皮質以外の腦中樞にて連絡するもの、

二、二者が大脳皮質にて間接に連絡するもの、

三、二者が大脳皮質にて間接に連絡するもの、

の三種に大別することを得。

二、脊髓延髓及び小脳 熱き物體に觸るゝとき、思はず手を引くは、脊髓の營む反射作用にして、強き光線に對し、瞳孔を縮小するは、延髓の反射作用なり。此の如く脊髓及び延髓は自ら中樞となりて、諸種の反射作用を營む外に、外來の刺激を一層高等なる中

上圖、大脳右半球側面
下圖、大脳左半球内面

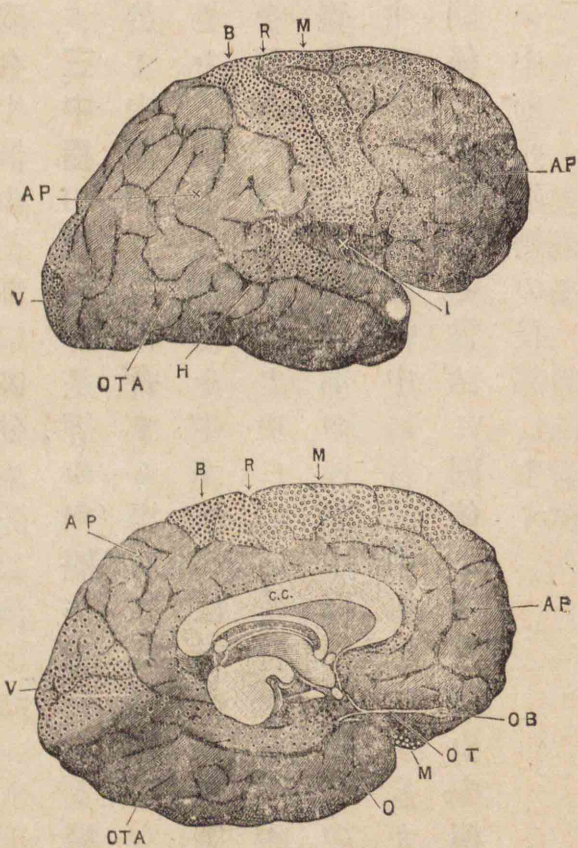
●○點點無點

運動中樞
感覺中樞
聯合中樞
ローランド

溝運動中樞
觸覺中樞
視覺中樞
聽覺中樞
嗅球
嗅腺

後頭顱聯合中樞
顱頂聯合中樞
前頭聯合中樞
樞葉聯合中樞
肝脈體

CC I AF AP OTA OT OBO HVBM R



樞に傳へ、及び高等中樞の興奮を運動神經に傳達するの媒介をなす。然るに小脳は稍之に異なり、専ら身體運動の調節

を司どるを以て其の機能となす。

二、大脳皮質 大脳の表面、縦横に蜿蜒せる皺襞を大脳皮質といひ、最も高等なる中樞なり。凡て意識作用は、感覺・知覺

中樞の聯合

を始め、思考、感情、意志等に至る迄、必ず大脳皮質に於ける或種の變化を伴ふものにして、之を感覺中樞、運動中樞及び、感覺中樞を相互に、又は感覺中樞と運動中樞とを連結する聯合中樞の三部に區分す。

三、中樞の聯合 是等の中樞が聯合する場合、其の徑路に於て中樞相互の結合する場所には、特殊なる機能を成立せしむる新しき中樞を生ず。例へば言語は文字を見、或は發音を聽きて之を理解し、更に之を發音する機能なるが故に、視覺及び聽覺と喉頭部の運動中樞との結合の徑路に當る左半球の下前頭廻轉中に言語中樞を生ずるが如し。又斯かる關係より同じく言語に關係ある書寫の中樞は、大脳左半球の中前頭廻轉の後部に生ず。

中樞の抑制作用

第四節 抑制作用

神経系統の機能たる刺激と運動の連絡は、或は反射運動に於けるが如く、生まれながらにして一定し、或は習慣的運動に於けるが如く、生後の經驗によりて固定し、大凡一定不變なり。されど若し此の一定せる反應が、生物現在の目的に合せざる如き事ある時は、連絡は一時抑制せられ、他の適當なる處置に出づる事あり。之を抑制作用といふ。概して、高等なる中樞は比較的下等の中樞に對して抑制作用を及ぼし得る者にして、就中大脳皮質は最も此の作用に富む。故に抑制作用は大脳の發達と密接なる關係あり。腦中樞の未だ發達せざる小兒にありては、其の行動器械的衝動的にして抑制作用に乏しけれども、注意、思考、意志等の進むと共に次第

に不合理の行動を制御し、能く、目的に合せる生活を營むに至ることを得、抑制とは即ち行動を支配し統御するの謂にして、抑制作用の足らざるは、是れ反面に於て腦中樞の未だ充分に發達せざることを證するものなり。

第二章 心的現象發現の條件

第一節 意識の特徵

意識と無意識

意識

CONSCIOUSNESS

覺醒せる人の心の状態を總稱して意識といひ、熟睡若しくは失神せる場合の如く、全く覺えなき状態を無意識といふ。眠に入る場合につきて見よ、意識に無數の段階ありて、次第に明瞭の度を減ずること、猶日光の次第に薄らぎて暗黒に移るが如きを知らるべし。意識より無意識に至る過渡の状態を半意識と稱す、例へば將に眠に入らんとする

意識の統一變化及び連續

ときの精神状態の如し。

試みに或美しき花を觀察する場合に於ける自己の意識状態を内省せよ。花の色、香及び其の形より、其の附着せる枝幹、其の咲ける花園の有様に至るまで、同時に意識に現はれ、其の内容は種々雑多なれども、しかも決して個々に分離することなく、今觀察しつゝある花を中心として、互に相關係し、一定の統一を保持す。斯く意識内容の互に連絡統一する状態を意識の統一性といふ。次ぎに吾人の注意は、或は一の花より他の花に移りて、其の異同を比較し、或は嘗て見たる花に向ひて之を想起する等、注意の移動に従つて、意識は次第に變化し、前後の意識は密接に相關係しながら、しかも寸時も固定することなし。是れ意識と物的現象とを分かち根本性の一にして、之を意識の連續性といふ。意識を以て河水

の流れに比し、之を意識流と稱するは最も能く以上の諸性質を表明せるものなり。故に吾人は如何なる瞬間の意識を捕捉するも其は單なる意識の一部分を表はす者にあらず、捕捉せられたる瞬間の意識には、過去のあらゆる経験を藏し、之によつて新らしき將來への發展をなさんとする志向を含む。上の例につきていへば、吾人は花の色・香形を知覺すると同時に、過去の経験によつて此の花の何たるかを知り、又必ず之に何らかの感情を伴ふ。斯かる状態は花を見たる瞬間に於て凡て殆ど同時に意識せらるゝ者にして、決して之を區別すること能はず。然るに若し斯かる意識の状態に於て其の花を取らんと欲し、或は此の花は何かと考ふる時には、渾一的なる意識状態も忽ち分割せられて、花の表象と、之を取らんとし、或は之について考へんとする意志との

對立を意識し、其の對立によつて兩者の間に感情状態の存することを意識するに至るべし。今斯かる意識活動を、研究の便宜上、之を知的活動を表はす**知的現象**と、志向的發動を表はす**意的現象**と、感情を表す**情的現象**との三方面に區分して考察するを常とす。而して如何なる方面の意識状態について研究する場合にも、注意と記憶とは意識を成立せしむる條件として必ず之を缺くことを得ず。注意は外界よりの刺激を意識に轉ぜしむる者にして、記憶は斯かる意識に更に豊富なる内容と意味とを與ふ。

精神・意識及び意識過程(心的作用)の三語は屢、同一義に用ひらるゝ事あり、されど之を區別するときは、意識過程は心的現象中の個々の状態、例へば感覺・意象のごときものを指し、意識は一定の瞬間に於ける心的現象を總括的に表明し、精神は生より死に至る間に於ける意識の全系列を意味す。

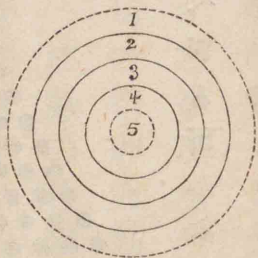
注意の明度と範圍

第二節 注意

注意の明度と範圍 外界の刺激が、注意作用によつて意識の内容となる場合に於て、同時に意識せらるゝ内容の量には、自ら一定の限度あり。實驗の結果によれば四個乃至六個の黒點は同時に認識することを得。斯かる認識の限度を注意の範圍といふ。但し注意せらるべき事物に意味の連絡の存するときは、注意の範圍は更に擴大すべし。例へば語を構成する文字に於ては、よく「意味なき綴り」の三倍に相當する文字を同時に認め得るが如し。こは記憶によりて意識の内容を豊富にせる者なり。されど注意の範圍に入り來たる内容は、悉く同等の明度を有する者にはあらず、或る者は明瞭に或る者は不明瞭に意識せらる。例へば視野に於て、諦視

意識の範圍と注意の明度の關係圖式

1 無意識
2 半意識
3 漠然たる意識
4 稍明瞭なる意識
5 意識の焦點

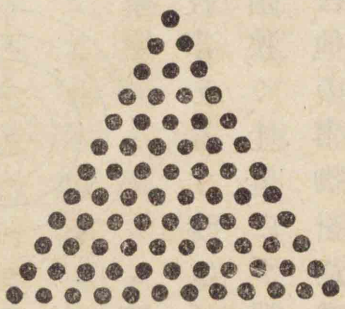


點に當る事物最も明瞭に見え、之を遠ざかるに從つて次第に不明瞭に映ずるが如し。而して注意が特に一事物に集中すれば之に應じて其の明度を増すも、同時に注意の範圍は狭くなるを常とす。一般に慣れざる

仕事をなす時は、一事物にのみ注意は集中せられ、意識の範圍狭く、仕事に不調和を來し易し。また一事物に熱中する時は、他の事物を意識せず、往々無意識に思はぬ誤をなすことあり。ニウトンが時計を煮たる如きは其の一例なり。故に一物に注意するは、是れやがて他の事物に不注意なることを意味す。教師よりして「絶えず不注意なり」と叱せらるゝ兒童も、實は課業以外の他の事物に注意しつゝあるなり。注意に強弱の度はあり、又其の固定と散漫とはあり、是等の弱き注

注意の持続と變化

マックブーガ
ルの點 (注意
動を)
示す
圖中の或點に注
意せよ。
三角形・六角形・
梯形・菱形等種
々の形交互に現
れ、長く同一の
形を眼前に保持
し、るを得ざるべ
し。



意、若くは散漫なる注意を、比較的、不注意と稱するは可なれども、絶對的に何物にも注意せざる状態は殆ど吾人の想像し能はざる所、苟も精神の活動あらんか、必ず多少の注意作用なくんばある可からざるなり。

注意の持続と變化 懷中時計を、漸くにして其の音を聞き得る距離に置き、之に耳を傾くるときは、音の明らかに聞ゆる瞬間と、毫も聞えざる瞬間とが互に相交代し、大凡三四秒毎に一循環をなすを見るべし。音の高さは客觀的に同一のものなれば、以上の現象は之を注意の動搖に基づくものと考へざる可からず。即ち注意には一定の持続時間ありて、單に短時間に於てのみならず、數分の中、一時間の中、又數時間の

注意の種類

中に於ても、小なる波動を含みながら、更に大なる動搖をなす。之を注意の律動といふ。而して此の律動と相並行して、一切の精神活動亦或は高く、或は低く、波狀をなして進行す。
注意の種類 注意は通常之を無意注意所動的注意と有意注意(能動的注意)との二種に分かつ。

無意注意

無意注意 無意注意とは對象の興味あるが爲に自然に注意を惹起するものにして、例へば麗しき草花を見、又は強大なる事物に接する時、自ら之に注意するが如し。無意注意の一種に**反意注意**と稱せらるゝものあり。こは或刺激に強要せられ、力めて注意せざらんと欲するも、尙且注意せざるを得ざるものにして、課業の中途に於て若し強き砲聲の響くあらば、己が意志は眼前の課業にありながら、之に注意を奪はるゝが如きは其の例なり。

無意注意の條件

無意注意を惹起する條件は大凡左の如し。

- 一、刺激の強大なること。されど弱小なるものも、時としては對比によりて注意を惹き易きことあり。例へば大なる活字の間に偶、交れる小なる活字の、却つて注意を惹くが如し、又強大なる刺激も之に慣るゝときは、終に毫も注意を喚起せざるに至る。
 - 二、刺激の急激に來るか、又は其の運動すること。
 - 三、刺激の新奇なるか、又は變化あること。
 - 四、快苦の感情に觸るゝこと。
 - 五、自己の利害に關係あるものなること。
 - 六、己有の知識と關係を有するものなること。
- 有意注意** 有意注意は一定の目的の下に、刺激を選擇して注意するものにして、同時に心の他の刺激に向ふを抑制

有意注意

豫期注意

せざるべからざるが故に、努力の感を伴なふを以て其の特徴となす。試験の成績を良くせんが爲に己が好まざる教科にも力めて注意を拂ふが如き是なり。而して此の努力の感は、同一注意の反復と共に、次第に減少するものなれば、其の始め大なる努力を要せしものも、練習を積むに従ひ、自然に注意するに至り、先の有意注意は變じて無意注意となることあり。之を**第二次無意注意**といふ。

有意注意の一種にして、將に起らんとする事物を、豫め心中に期待し、之に注意するを**豫期注意**といふ。體操の號令を下すに當り、豫令と動令との間に多少の時間を置くが如きは、即ち豫期注意の作用を利用せしものなり。

注意に伴なふ生理的變化 注意に際して生起する生理的變化は分かつて、(一)筋肉運動(二)呼吸及び循環作用の二と

注意の生理作用

なす。

一、筋肉運動 (甲) 感覺的事物に注意するときは、或は眼を正しく物體に注ぎ、或は耳を音響の來る方向に傾け、或は強く香を嗅ぐが如く、主として感覺機關を刺激に順應せしめ、(乙) 或觀念内容に注意を拂ふときは、眉間に縦皺を生じ、眼は或は之を閉ち、或は下方を眺め、口を鎖し、手を叉き、少しく頭を傾くる等、自ら思考に適する態度を取るを常とす。

二、呼吸及び循環作用 呼吸は注意の感覺的なるか、觀念的なるか、及び感覺的なる場合に於ても、刺激の種類に應じ、深さ及び早さに於て一様ならず。脈搏は、觀念的注意に於ては一般に増加すれども、感覺的注意に於ては屢、其數を減ず。
兒童の注意 幼兒の注意は、主として感覺的事物に對する無意注意にして、且外來の刺激に動かされ易く、甲より乙、

兒童の注意

乙より丙と絶えず變轉す。新たなる作業に對する順應は甚だ遅緩にして、持續性を缺き、疲勞亦速かなり。されど大凡就學期の前後より、有意的注意徐々に發達し、教師の適當なる指導により、興味少き事物にも注意し得るに至る。注意に伴なふ生理的變化は大人に比して顯著なり。されど是れ注意の強きが爲にあらざして、却つて抑制作用の足らざるを證するものなり。

注意と教育

注意と教育 注意は學習の第一要件なり。今以上叙述せる所に基つき、教授上必要なる事項を左に約説すべし。

一、兒童の注意發達の度に適應すべし。兒童の幼稚なる間は主として興味に基つきて無意的に注意せしめ、其の發達に伴なひ、次第に有意的に注意するの習慣を養ひ、自助奮勵の氣風を鼓舞せんことを要す。而して更に進んでは反復

練習の結果、嘗て有意注意たりしものをも第二次無意注意に變化せしむるやう力めざるべからず。

二、變化は注意を持続する最良の方便なり。吾人は時として、數時間の演奏を聞き、全く時の移るを知らざることあり。如此は是れ其の演奏が内容の變化に富み、吾人の注意は絶えず新しき内容に推移しつゝあるが爲にして、決して同一事物に對する注意の持續にあらず。是に等しく、教授の材料に於ても一題目の内容を多様に變化し、各方面より考察せしむるときは、兒童の注意は常に新しき方面に向ひ、興味を覺えながら、しかも其の材料の範圍を出づることなく、能く之を理解し得るに至るべし。變化は實に教授の一大秘訣にして、教授の巧妙は大凡變化の有無によりて之を推定することを得。

三、兒童の周邊に留意し、反意注意を起さしむるが如き諸種の刺激を除去すべし。

四、兒童の姿勢に注意し、長く同一の位置にあらしむることなく、或は時に深呼吸をなさしめ、或は時に休息をなさしめ、力めて兒童の倦怠を防ぎ、生理的方面より注意を助長する方法を講ずべし。

第三節 記憶

容量と確度

記憶の容量と確度 Memory 記憶は注意によつて印象せられたる事物を、再現の可能性として心に保存する作用なり。心の保存力には、一定の限度あり、同時に記憶せらるべき事物に一定の限度あること、注意の範圍に一定の限度あるが如し。一生の中に記憶せらるべき事物にも、亦一定の限度あり。人

の脳髓は決して無盡の藏にはあらず。たとひ注意の及ぶ限り多くの事物を印象するも、全部之を保持すること能はず、且時間を経るに従つて其の量減少す。之を忘却といふ。かく記憶の容量は個人にありて異なるも、一時に記憶せらるべき事物の数は記憶の方法によりて相違す。實驗の結果によれば、詩文の誦讀の如き場合には、全體を分割して誦記し、後に是等を結合する方法(分習)よりも、最初より全體を一度に誦讀する方法(全習)却つて有利なり。又記憶の容量は必ずしも其の確度と一致せず。確度とは事物の性質及び其の秩序を正しく記憶することにして、確度は反復の度数多きに従つて大なり。實驗によるに、七個の綴字が一回の反復にて正確に記憶せらるべき者とすれば、十二個の綴字に十五回、十六個の綴字は三十回、二十四個は四十四回、二十六個は五十

持續と再現

五回の反復を要す。また新たなる事物を記憶するに當り、是を既に知れる事物に連絡せしむる時は記憶極めて容易にして其の容量は著しく大となる。此は意味ある事物に對する注意の範圍が大なることに相應す。

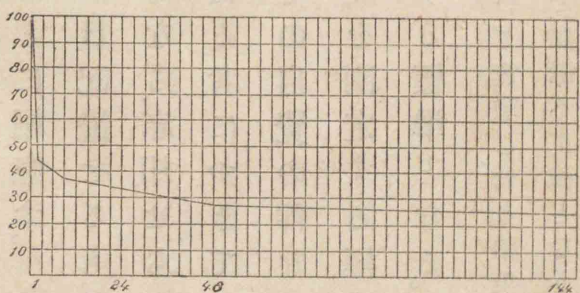
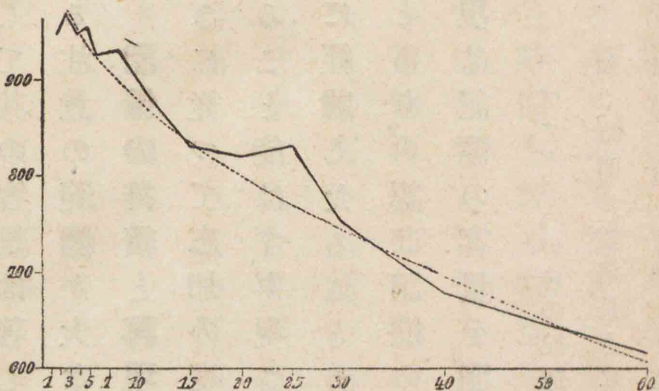
記憶の持續と再現 一旦記憶せるものも保存の時間長きに從つて忘却の度大となる。忘却せられたる者は再現すること能はず。再現されたる者につきても、之に再認即ち既に經驗したることありとの自覺の伴なふ者と然らざる者とあり。再認は記憶の確度を測定する標準となり、單なる再現は記憶の容量を測定する標準となる。

ヴォルフエが音の記憶について實驗したる結果によれば、左圖に示せる如く、時間の経過長きに從つて記憶不正確となり、六十秒後になれば正否相半し殆ど信するに足らず。

(上圖) 音の再現の減退

横線は、経過の時間(秒)
縦線は、確度、最高確度

(下圖) 忘却の進路
水平線は経過時間、垂直線は忘却の進路を示す



忘却の順序

適に少なく二十四時間の後尙五割を残留す。

忘却の順序

病氣又は老齡のために記憶力の減退し始

エビングハウスの意味の綴につき、忘却の割合を、再現によつて測定せる結果は、上圖に示せる如く、一時間の三分の一を経過せば約四割二分を忘却し、二十四時間後には六割六分を、二日にして七割二分を、六日にして七割五分を忘却す。されど意味ある材料にては忘却の度

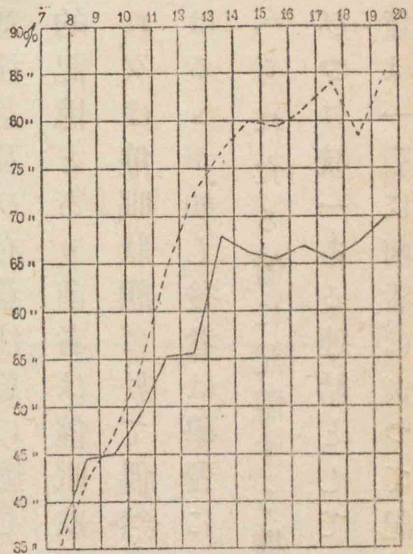
記憶の種類

むる時は、其の順序は、特殊のものより一般的のものに、新らしき者より古き者に及ぶ。人名の如き固有名詞は先づ忘却し、普通名詞之に次ぎ、形容詞動詞、接續詞等は最後に忘却せらる。最も忘れざるものは自己の名及び己が好んで慣用する語句なり。

記憶の種類

記憶は注意による印象の把持なるが故に、無意注意及び有意注意に應じて記憶にも無意的記憶と有意的記憶とあり。前者は催眠状態に於ける暗示により與へられ、又は催眠状態に於て偶然意識せざりし過去の経験の現はるゝが如し。後者は學習による記憶にして、之に、印象を與へられたる儘に記憶する機械的記憶と、印象を意味に結びつけ、統一ある連結として記憶する論理的記憶とあり。兒童は一般に前者によつて記憶し、成人は後者によつて記

器械的記憶の發達(スメツド) 實線... 聽覺的記憶 點線... 視覺的記憶



憶するも、兒童は前者に長じ成人は後者に長ずとは云ふべからず。一般に如何なる記憶も成人は兒童に優る。

記憶と教授 忘却の度を減少せんが爲には、第一、

學習後時を隔て、屢これを反覆し、第二、學習後直ちに他の作業に従事することなく、數分間休憩するを可なりとす。蓋し、直ちに他の作業に従事するときは、新らしく學習せるものと先きに學習せるものと相互に干涉して其の固定を妨ぐることあればなり。感情の激動亦屢、忘却を大ならしむる原因となる。

第二篇 知的現象

第一章 感覺

第一節 感覺の意義及び分類

身體の内外に於ける刺激によりて生じたる最も簡單なる心的現象を感覺Sensationといふ。感覺の發生には次ぎの三條件を必要とす。

- 一、光・音・熱の如き一定の刺激の存在
 - 二、目・耳・皮膚等の感覺機關に存する末梢神經の興奮及び之を中樞に傳達すること
 - 三、大脳皮質に於ける感覺中樞の興奮
- 感覺の分類につきては、學者の説く所一定せずと雖も、吾人は感覺を惹起する刺激の種類を標準とし、其の身體の外

感覺の意義

感覺の分類

部に起るか、又は身體の内部に起るかによりて、之を左の如く分類せんとす。

一、外的刺激によりて生ずるもの

一、皮膚の感覺 二、味覺 三、嗅覺 四、聽覺 五、視覺

二、内的刺激によりて生ずるもの

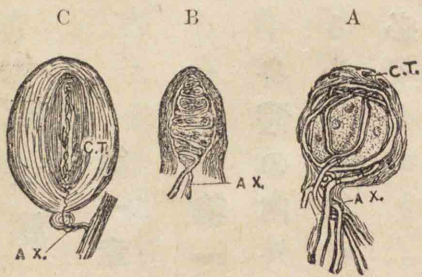
一、運動感覺 二、有機感覺

第二節 皮膚の感覺

皮膚の感覺 は通常世人の觸覺と稱するものにして、分かつて壓覺・溫覺・冷覺及び痛覺の四種となす。

壓覺 は皮膚に存する壓點を刺激するによりて生ずる感覺にして、其の銳鈍は皮

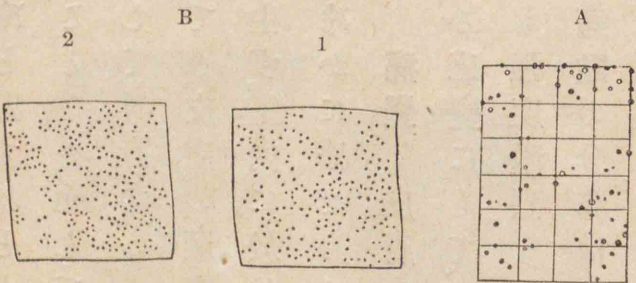
種々の觸小體
A クラウゼ氏末球、唇、舌、眞皮、腿及、其の他に存す
B マイスネル氏小體（眞皮の乳頭中に存し、手掌、足趾に最も多し）
C 小體（手、足、小指、腹等に存す）
D 其他の眞皮に存す
E 神經纖維
F 結締組織
C.T. AX.



溫覺及び冷覺

手首背面の溫點及び冷點

A ドナルドソン氏實驗
B ゴールドソン氏實驗
C 冷點
D 溫點
E 冷點
F 溫點
G 冷點
H 溫點
I 冷點
J 溫點
K 冷點
L 溫點
M 冷點
N 溫點
O 冷點
P 溫點
Q 冷點
R 溫點
S 冷點
T 溫點
U 冷點
V 溫點
W 冷點
X 溫點
Y 冷點
Z 溫點



膚の部位によりて異なり。前額・顳額部最も銳く、指爪・踵等は最も鈍し。

溫覺及び冷覺 溫度感覺は皮膚の表面

にある溫點又は冷點を刺激するとき生ずるものにして、溫點は溫を感じ、冷點は冷を感じ。但し、冷點は刺激を溫くすれば溫覺を生じ、反對感覺更に溫度を高めて四十五度に至るとき、再び冷覺を生ず（矛盾感覺）

鉛筆にて軽く皮膚（例へば頬）の各部に觸れ見よ、所々に著しく冷覺を起す點あるを覺ゆべし。是れ即ち冷點なり。溫點・壓點・痛點等は之を検出すること稍困難にして、特別の装置を要す。

一定の皮膚の一定時に有する溫度を其の生理的零點と

痛覺

稱す。生理的零點より高き温度は之を温と感じ、低きときは冷と感ずれども、之と同一の温度は何等の感ずるをも生ずることなし。而して生理的零點亦或程度迄、外圍の温度に適應して昇降するものなれば、(温度感覺の順應性)同一の温度にても、皮膚の順應状態によりて、或は温覺を生じ、或は冷覺を生ず。室内に於ける同一温度も時によりて或は温かに、或は冷かに感ぜらるゝは是が爲なり。

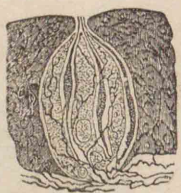
痛覺 皮膚の表面にある痛點を刺激するによりて生ずる感覺にして、一般に不快の感を伴ふ。而して何れの感覺も強度激烈なるときは終に痛覺を生ずるに至るを常とす。痛點の分布は甚だ密にして、感受性鋭く、且種類の如何を問はず、凡ての強刺激に感應するものなれば、身體の危害を豫告し、警戒を與ふるに於て重要な關係を有す。

味覺

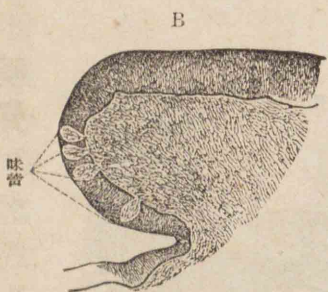
第三節 味覺及び嗅覺

味覺

諸種の溶液が舌面、軟口蓋等に存する味細胞を刺



味覺の機關
BA 味蕾
の輪郭狀乳起
の断面(味
蕾を示す)



激するときを生ずる感覺にして、分かつて甘・酸・苦・鹹の四種となす。舌は其の部分によりて刺激の感受性に分化あり。即ち其の兩側面は主として酸味に、舌尖は甘味に、舌根は苦味に感じ、鹹味は各部に於て殆ど一樣に感ぜらる。

通常味又は風味と稱せらるゝものは、以上各種の味覺と、他の感覺、特に壓覺、温覺、冷覺、嗅覺等と相融合して生ずるものにして、食物の口ざはり、温度、香氣等は其の味に影響すること頗る

嗅覺

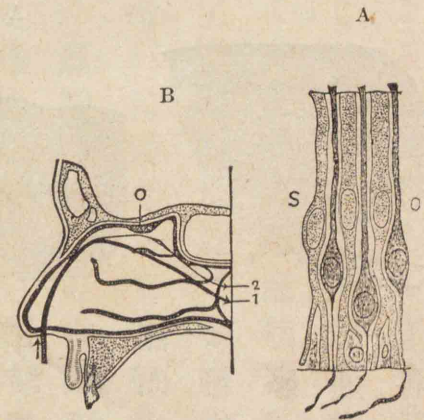
嗅覺の機關

2 1 S O
嗅細胞の支持細胞の通常の呼吸の通路の強弱の時の通路

大なり。

嗅覺

鼻腔上部の粘膜炎にある嗅細胞を瓦斯體の刺激



するによりて生ずる感覺にして、甚だ疲勞し易し。嗅覺の分類は頗る困難にして、或は感情の方面より善き香、悪しき香に分ち、或は嗅覺を惹起する物質によりて、堇の香、梅の香等に分かれてども、未だ之を完全に分類せるものなし。

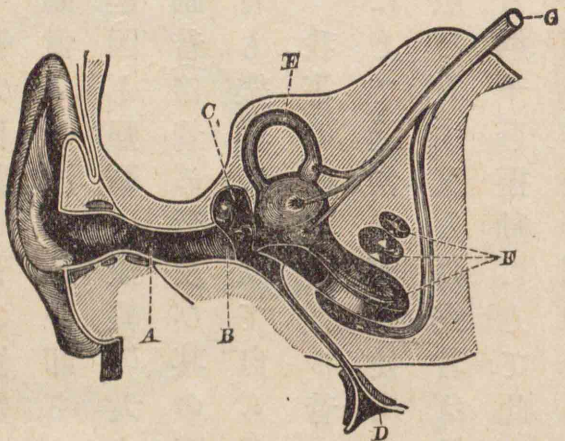
第四節 聽覺

聽覺の機關

聽覺

音響の内耳に於ける聽神經を刺激するとき生ずる感覺にして、其の生起の次第をいへば、空氣の振動耳殼

聽覺の機關
外聽道 鼓膜 中耳 耳蝸 氏管 半規管 蝸牛殼 聽神經
音の種類
G F E D C B A



に入るや、外聽道を経て鼓膜を振動せしめ、次に中耳内の小骨、内耳の淋巴液に傳はり、終に蝸牛殼内にある聽神經を刺激す。而して聽神經は此の興奮を大脳の聽覺中樞に致し、茲に聽覺を生ず。

音の種類 音は之を樂音と噪

音とに區別す。前者は規則正しき振動より起り、後者は振動不規則なるときに生ず。樂器より出づる音は概ね樂音にして、木枯らしの音、紙の破るゝ音の如きは噪音なり。日常聽取する自然界の音は多くは噪音にして、人の音聲は、子音は噪音にして、母音

音の性質

は樂音なり。故に談話に於ては噪音多く、唱歌の際には樂音却つて秀づ。

音の性質 音の性質には高低、強弱及び音色の三種あり。高低は音波の長短即ち一定時間に於ける振動數の多少に起因し、強弱は振幅の大小に基づく。又音色は主音に伴なふ副音(倍音)の數及び其の強度の差によりて生ず。故に同一の音も樂器によりて自ら音色を異にす。

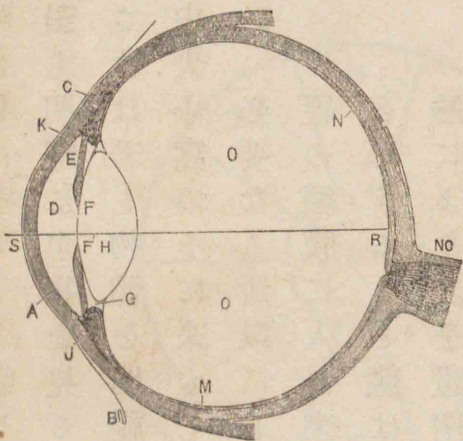
我等の聽取し得る音は、一秒時の振動數十六乃至四五萬にして、通常、音樂に使用するものは、六十四乃至五千の振動數を有す。又人の聲音は、最低音の振動數一秒時約三百、最高音約千百振動にして、此の限界内を聲域といふ。

種々の樂音相融合して快感を起すときは之を調和音といひ、之に反して不快感を起すときは之を不調和音といふ。

平衡感覺

視覺の機關

RRNONM KJHGFEDCBA
SO F'
中視視視網脈境角毛水後瞳虹前鞏結角
央軸神子膜絡膜膜膜・筋體房孔彩房膜膜
小經體膜 鞏膜 筋體



何れの樂器にてもオクターブ(振動數「 $\times 2$ 」十二度振動數「 $\times 3$ 」五度振動數「 $\times 1.5$ 」等は能く調和す。

内耳は單に聽覺の機關たるのみならず、又身體の平衡を主とする機關なり。目見る能はざる場合にありて、尙能く身體の位置を知り得る如きは是に由る。平衡の感は有機感覺の中に含ましむることを得れども、近時平衡感覺と稱して特に之を掲ぐる人多し。

第五節 視 覺

視覺 は光線の刺激によりて生ず。光線眼に入るや、水晶體・硝子體等を通過して、網膜に達し、茲に分布せる視神經を刺激す。而して此の視神經の興奮が大脳視覺中

盲點の實驗
左眼を閉ち右眼にて×を見詰める所迄近づくと消失すべし。

樞に傳はれるときに生起する感覺を視覺となす網膜の中最も明瞭に事物を見ることを得る部分を中央小窩といふ。されば若し物體を明視せんとするときは、其の映像をして中央小窩の上に来らしめざるべからず。是れ眼球の運動の必要なる所以にして、三對の動眼筋之を司どる。又視神經の網膜に入り來る部分は之を盲點といひ、全く光線を感じること態はず。盲點の存在は極めて簡單なる實驗により之を證明することを得べし。

× 視覺の種類 視覺は之を光覺(無色覺)と色覺との二種に分かつ。

光覺

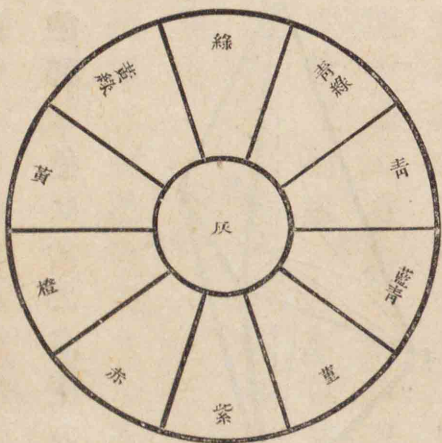
光覺 光覺は光の強弱によりて生ずる感覺にして、光の最も強きものを白となし、其の全くなきものを黒となし、黒と白との間に無數の灰色あり。



色覺

故に光覺は純白より順次諸種の灰色を経て純黒に至るものにして、直線的に之を表すことを得。

色覺 プリズムによりて太陽の光線を分析すれば、赤橙



黃・綠・青・藍・堇の七色を得べし。是等の感覺を色覺といふ。而して以上の七色中、堇は其の性質に於て甚だ能く赤に似たるものあるを以て、若し是等兩者の間に紫を入るときは、色の系統は茲に一循環をなす。色圏は之を圖解せるものなり。色圏中に

ある任意の一色は之に隣れる二色の混合によりて得らる。故に若し色彩の或者を選びて原色とせば、他の色は凡て原

色圏

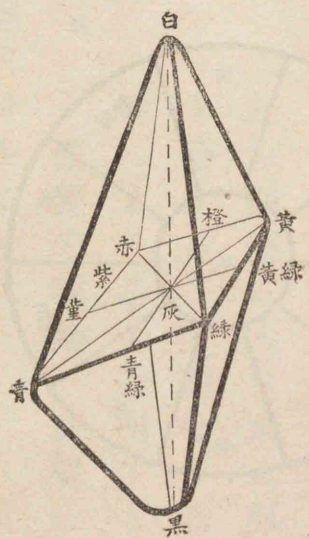
色を混合して作るを得べし。ヤング及びヘルムホルツは赤・緑・青を、ヘーリングは赤・緑・黄・青の四色を以て原色となせり。

飽和

飽和

色は常に或度の光と結合して存する者にして、此の結合の度を飽和といふ。光度適當にして、色の最も鮮明に見ゆる場合を完全飽和と言ひ、スペクトラムに現れたるものは是なり。完全飽和にする光度は色によりて異なる、赤最も高く、青最も低し。薄暮に於て赤き花の暗黒に變ぜし後、尙緑葉を辨へ得るは是が爲なり。

色の稜體



補色

補色

二色相合して灰色を生ずるときは、此の二色を相

互に他の色の補色なりと稱す。補色は其の性質全く反對にして色圈の直径の兩端に位す。紫と緑、赤と青緑の如き是なり。

互に補色をなせる二色を相接近せしむるときは、色彩の鮮明を増し、著しく引き立ちて見え(對比の現象)、又赤と暗青色の如く補色に近き色は最も能く調和す(色の調和)。故に繪畫・染物及び種々の裝飾に於て補色の應用せらるゝ範圍頗る廣し。

殘像

殘像

刺激の去りたる後、尙一定時間感覺の殘存するものを殘感と言ひ、其の視覺に於けるものを特に殘像といふ。松明を振り廻すとき、火の輪を見(積極殘像)、黄色の物體を見つめたる後、眼を灰色の壁に移すとき、黄色體と同形なる藍青色を見る(消極殘像)が如き是なり。驚盤・活動寫眞等は、この

色盲

理を應用せるものなり。

色盲 色彩の全部(全色盲)若しくは其の一部(部分色盲)を辨別する能はざるものを色盲といふ。色盲中多く存するは赤緑二色を缺く赤綠色盲にして、稀には黄青二色を缺く黄青色盲あり。色盲は多く先天的にして、男子に多しといふ。

第六節 運動感覺

運動感覺

身體諸部を活動せしむるによりて生ずる感覺を廣く運動感覺と稱し、之を細別して、隨意筋の運動によりて生ずる筋覺、關節の屈伸に伴なふ關節覺、及び腱の緊張によりて生ずる腱覺の三種となす。是等三種の感覺は通常相融合して感ぜられ、孤立的に之を経験すること難し。例へば重き物體を扛ぐるときの感覺は、壓覺、腱覺及び關節覺と筋覺との複

合より成るが如し。運動感覺は、知識收得上重要なものみならず、書寫、談話、圖畫、手工等一切の藝術活動の基礎をなし、又後章示す所の如く空間觀念の起原をなすものなれば、幼時より特に注意して之を練習せざるべからず。

第七節 有機感覺

有機感覺

有機感覺 身體内部の状態、即ち消化、呼吸、血行等に伴なひて生ずる感覺を有機感覺又は一般感覺と稱す。有機感覺を構成せる要素は通常極めて漠然たれども、其の中特に強度の大なるものあるときは、其の要素に限り明瞭に意識せらる。飢渴、嘔氣の如き是なり。

有機感覺は味覺及び嗅覺と等しく知識の基礎としては價值少けれども、感情生活に及ぼす影響は甚だ大なり。彼の

フエヒネルの
法則

則といふ。

フエヒネルはエーベルの法則を數學的に言表はして「若し感覺を算術級數的に増加する時は、刺激は幾何級數的に増加せざるべからず。」となせり。

認識及び辨別

三、感覺の認識及び辨別の時間

一定の刺激を受けたるとき、是に應ずる感覺を生ずるに至るまでには、一定の時間を經過し、其の時間は感覺の性質により、また個人によりて相違す。又感覺の變化を辨別する場合に於ては、變化の小さな程辨別に要する時間大なり。されば是等の時間の大小によりて一定の感覺に對する個人の感受性の鋭鈍を測定するを得。

第九節 兒童の感覺

下等感覺

下等感覺

生物進化上、最も早く發達せる感覺は、皮膚の感覺なり。故に壓覺、溫覺、冷覺、痛覺等は初生兒に於て已に略ぼ完成せり。味覺も亦出生と同時に具はれども、嗅覺は味覺より後れて發達し、六七歳に至つて略ぼ完成する者の如し。

高等感覺

聽覺

高等感覺たる視聽二覺は、兒童の成長と共に徐々に發達す。初生兒は外耳、中耳共に粘液に密閉せられ、鼓膜の位置亦正しからざるを以て、未だ聽覺を有せざれども、數日にして強き音を感じ、四五ヶ月以後、音の方向を感知す。又高音に對する感覺は低音に對するものよりも早く發達す。一歳以後の兒童の聽覺は甚だ鋭く、弱音を聽取する力却つて大人を凌ぐものあり。聲域の發達は、大凡六歳以後十歳に至る間は、高き音に向つて擴がり、十歳以後低音に向つて亦發達し、十三四歳に至り略ぼ完成す。

視覚 光覺は出生時と共に之を有すれども、事物を注視し得るは約二週以後に始まり、色覺は大凡十一ヶ月以後發達す。色の名稱を知ることと、色を區別する能力とは自ら別物なれば、名を知らざるの故を以て、辨別力なしと斷定すべからず。薄光に於て事物を識別し、又は遠隔の小物體を明視する能力は小兒は大人に勝れり。

第十節 感覺と教育

感覺機關は知識の門戸にして、感覺は知識の第一の要素なり。而して感覺機關は練習によりて或度まで鋭敏に赴くものにして、之を盲人に見よ、彼等は其の鋭き觸覺及び聽覺の助によりて能く事物の性質を辨別し、且街路の四辻をも安全に迂回することを得。加ふるに兒童は、天性、感覺機關を

感覺機關の練習

感覺機關の養護

使用するを好み、色彩・音響等凡ての外來刺激に對して、著しき興味を有するものなれば、教育者は此の兒童固有の性向を利用し、夙に幼時に於て、感覺機關を練習し、知識の鞏固なる基礎を與へざるべからず。

次に教育者は又自ら能く感覺機關に關する理法に通じ、苟も其の發達を害する如きものは力めて之を除去せざるべからず。例へば色彩の變化が眼球の疲勞を恢復するに與つて力あることを知るときは、教室に於ける色彩にもなるべく變化を與ふべく、皮膚の或程度迄順應性を有することを知るときは、溫度の多少の昇降を恐れざるのみならず、却つて之によりて皮膚の鍛鍊をなすが如き之なり。感覺機關の養護に關する一般の方法は教育學に於て之を敘述することとなすべし。

第二章 知覺

第一節 感覺と知覺

感覺と知覺

感覺を實際意識の内容として經驗する時には、種々なる感覺は、同時に注意の内に包括せられ、互に區別はせられながら、しかも離るべからざる統一をなして意識せらる。斯く感覺を統一して意識するを知覺と云ふ。例へば眼の知覺に於ては色覺と光覺とは同時に意識せられ、決して離れに意識せられざるが如し。之を區別して考ふるは知覺の働きのあらずして抽象の働による。知覺は又之を直觀と稱することあり。故に直觀は直接事物につきて其の性質を統一的に感覺によつて經驗することなり。

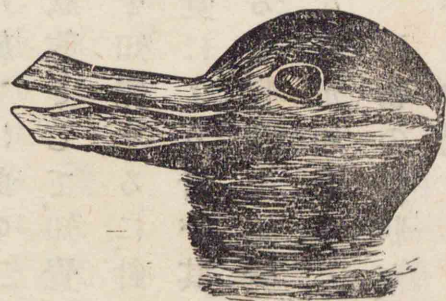
知覺の形式

凡て知覺せられたる感覺は統一結合せられたる感覺に

して其の結合の形式に二種あり。一は空間的連結にして、他は時間的連続なり。感覺を空間的に連結して知覺することを空間知覺或は空間表象といひ、時間的に連続して知覺することを時間知覺或は時間表象といふ。しかも實際の知覺に於ては、此の二種の知覺は更に結合して運動或は持續の狀態として知覺せらるゝを常とす。例へば時計の針の運動を知覺するに、針が一定の場所を指すことを知るは空間知覺により、針が其の場所を経過せりと知るは時間知覺によるも、實際上知覺せるものは二者の結合せる針の運動其者なるが如し。

事物の形狀が大にして且つ複雑なる時は、其の全體を同時に知覺すること困難なり。従つて其の全體を見るに當りては、注意の範圍分割せられ、一定の順序に従つて繼起的に

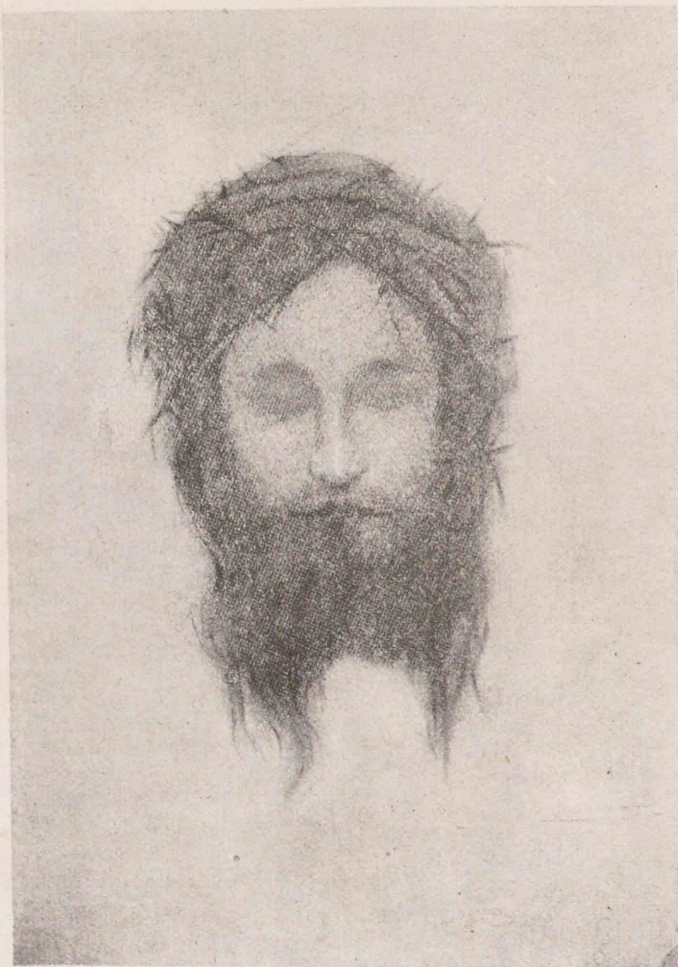
兎か鶡か



知覺せざるべからず斯く同一事物につきて注意の方向を變化して知覺する時は、其の事物の形狀を異なるが如くに知覺することあり例へば同一の繪が兎にも見え鶡にも見ゆるは、注意の方向に規定せられて變化する空間知覺の關係による。但し之を兎と知り或は鶡と知るは、單なる空間知覺の關係のみによるにはあらずして、直接兎及び鶡について經驗したる過去の記憶加はり、知覺に明瞭なる意味を與ふるによる。斯く現在の知覺を過去の記憶によつて變化せしむるを類化作用といふ。

第二節 空間の知覺

像の督基のスクマ・ルエリブガ
かるたき開かるた閉は眼



感覺の空間的連結は、形状・大いさ・位置・方向・距離等の變化として知覺せらる。感覺の内視覺と觸覺とは最もよく空間知覺を表はし、他の感覺は是等に結合することによりて、其の刺激の位置・方向等を知ることを得。例へば有機感覺は觸覺に結合して其の位置を知り、味覺は舌の觸覺に結合して味を感ずる場所を知り得るが如し。而して嗅覺の如く觸覺及び視覺に結合し難き者は其の場所を知ること困難なり。空間知覺に於ては、一般に、觸覺と視覺とは協同し、頗る密接なる聯合を有すれども、其の一々の性質を明らかにせんが爲に、便宜上之を觸空間・視空間の二者に分ちて敘述すべし。

甲 觸空間

局所徵驗

局所徵驗部位覺 皮膚に點様の刺激を與ふるとき、此の刺激によりて生起せられたる觸覺は、皮膚の各部によりて各特殊の感じを有すべし。此の特種の感じを感覺の局所徵驗といふ。今觸覺計を用ひ、其の兩尖端を二點として感知し得べき最小距離を測るときは、此の距離は即ち局所徵驗の始めて變化せることを示すものにして、其の値は皮膚の各部に於て著しき差異を有す。

刺激の定位

刺激の定位 點様の刺激皮膚に觸るゝ時は、眼を閉ぢ居る際にも、尙身體の如何なる部分に觸れたるかを知覺することを得べし。之を刺激の定位といひ、觸空間の最も簡單なるものなり。刺激の定位は局所徵驗と、是によりて喚起せられたる視覺心像との融合によりて生ず。是れ蓋し平生刺激の觸れたる部分を目撃せるを以て、一定部の觸覺と一定の

距離・形状及び
大いさの知
覺

視覺との間に自然に聯合の成立するものあればなるべし。距離・形状及び大いさの知覺 物體への距離は、該物體に向つて手足を動かすときに生ずる運動感覺に基づき、其の形状・大小等の知覺は、或は物體の周邊若しくは表面に沿うて手指・掌等を動かし、或は之を握り、或は之を抱きて測るときに生ずる運動感覺・壓覺及び局所徵驗の融合より成る。但し此の場合に於ても、視覺心像の補助を受くることは刺激の定位に同じ。

盲人に對する文字は、其の始め普通の文字を凸出せしめて讀ませしめたりしが、十九世紀の中葉、ルイ・ブレイイユが點字を發明してより、凡て點字によることゝなれり。これ觸空間にては非連續的の點は、連續的の線よりも、知覺し易きことを證するものなり。

乙 視空間

視覺と觸覺との比較

視覺の作用は觸覺の作用と頗る相似たり。即ち網膜亦局所徵驗を有すること皮膚に等しく、三對の動眼筋は四肢の筋肉に相當す。されど眼球の構造は皮膚に比して精巧を極むるを以て、視空間は其の完全の度に於て遠く觸空間を凌げり。

形状及び大きさの知覺

形状及び大きいさの知覺 凡て物體を明視せんには、其の映像をして中央小窩の上に来らしめざるべからず。是が爲に眼筋の運動を必要とすることは、已に之を述べたり。形状大小等の知覺が此の運動感覺と網膜に於ける局所徵驗との融合によりて成ること、猶觸空間に於けるが如し。

距離の知覺

距離の知覺 物體の映像をして、正しく網膜の上に来らしめんが爲には、其の遠近に應じて適當に眼球を調節せざるべからず。一目による距離の知覺は、概ね此の調節作用に

關係ある筋肉の感覺に因るものにして、不精密なるを免れず。されど兩眼の場合に於ては、之に加ふるに兩眼の視軸（諦視點と眼の中央小窩とを結合する虚線）輻湊の度に伴ふ筋覺の多少を以てす。其の他、映像の大小、物體明瞭の度、陰影の關係、色彩の變化等は何れも皆距離の知覺を助くるものなり。

立體の知覺

立體の知覺 立體の知覺は之を距離の知覺の特別の場合と見ることを得べし。蓋し立體は畢竟遠近の差異ある種の部分より成れるものに外ならざればなり。されど又立體知覺にのみ關係せる作用なきにあらず。今兩眼を以て近距離にある一物體を見る時、左眼は多く其の左方を見、右眼の見る所は右方に偏するを以て、兩眼の映像自ら同一ならず。網膜の映像の平面的なるに拘らず、能く立體の知覺を得

聽覺による空間知覺

るは主として斯く差異を有する兩眼映像の融合に起因す。實體鏡は此の理を應用したるものなり。

視觸二覺の外に、聽覺亦方向及び距離の漠然たる知覺を與ふることを得。聽覺による方向の知覺は主として兩耳に響く音の強さの差(聽差)による者にして、右に強ければ之を右方に、左に強ければ左方に、兩耳同一なるときは正面又は背面に定位す。又音の距離は其の強さを同一音の過去の經驗に照らし、強度の比較によりて之を知覺す。故に音の性質不明なる場合には知覺甚だ不確實なり。

第三節 時間の知覺

試に一定の時間を隔て、數個の音を發し、此の音と音との間の時間を如何にして知覺するかを内省するに、一方に

時間知覺の起因

於ては、第一の音の感覺の次第に微弱となり行くと共に、他方に於ては、第二の音を期待し、一種の緊張を感じ、第二の音の聞ゆると共に弛緩の感を覺ゆべし。即ち時間の知覺は、意識内容の變化及び之に伴なふ緊張弛緩の感に基づくものにして、凡ての感覺より來れども、就中聽覺最も之に適し、運動感覺之に次ぐ。

時間の長短

時間の知覺は斯く意識内容の變化及び之に伴なふ緊張状態に基づくが故に、此の兩者は自然に時間の長短を測るの標準となり、一定時間内に起りし意識の變化多きか、又は興味ある事物に對する時は、時間は直ちに經過すれども、變化乏しくして單調なるか、又は興味なき時は緊張を感ずること多く、其の時間は頗る長し。列車を待つ時間、病中に於ける時間の經過の非常に緩慢なる如きは是が爲なり。

變化と運動

第四節 變化及び運動の知覺

運動せる物體或は變化する事物を知覺する場合は、空間知覺及び時間知覺は、同時に運動の知覺に融合して意識せらる。例へば手を以つて同一距離を速かに運動せしむる時は、遅く運動せしむる時よりも距離を短く判断するが如し。また一物體の運動の速度は他の物體の運動の速度に對して相對的に知覺せらる。例へば汽車に乗れる時他の列車の動くを自己の乘れる列車の動くが如く感じ、また列車が等速度にて並行して進行せる際、之を動かざるが如く感ずるは斯る運動知覺の相對性による。

第五節 錯覺

錯覺

錯覺 Illusion

外來の刺激を誤りて知覺するを錯覺といふ。例へば夜間白衣の竿に掛かれるを幽霊なりと思ひ、或は同長の線を異長なりと感ずるが如き是なり。錯覺は或は吾人の精神状態に基づくあり、或は覺官の生理的構造に由來するあり。前者は中樞的にして、人によりて必ずしも一樣ならざれども、後者は末梢的にして、苟も正常なる覺官を有する限り、何人も避く可からざる所のものなり。故に又之を正常錯覺といふ。

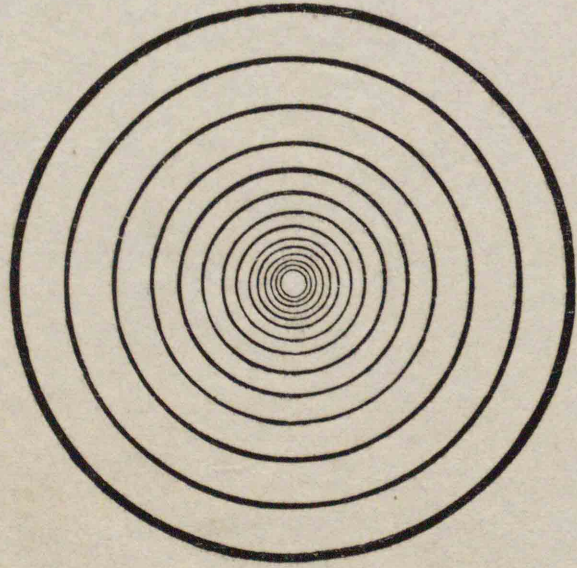
中樞的錯覺

錯覺の中樞的なるものは感覺に現れたる事物の解釋を誤ること、換言すれば類化の誤りによりて生ず。例へば繩を見て蛇となし、吹く風を狼の聲と恐るゝが如し、中樞的錯覺は豫期注意の状態にあるとき、多く起る所の現象なり。

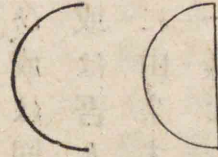
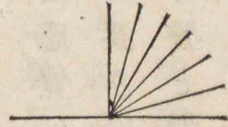
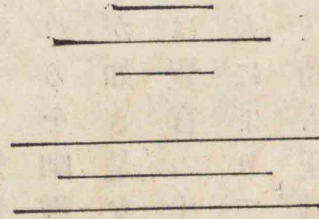
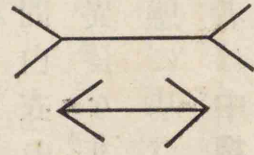
末梢的錯覺

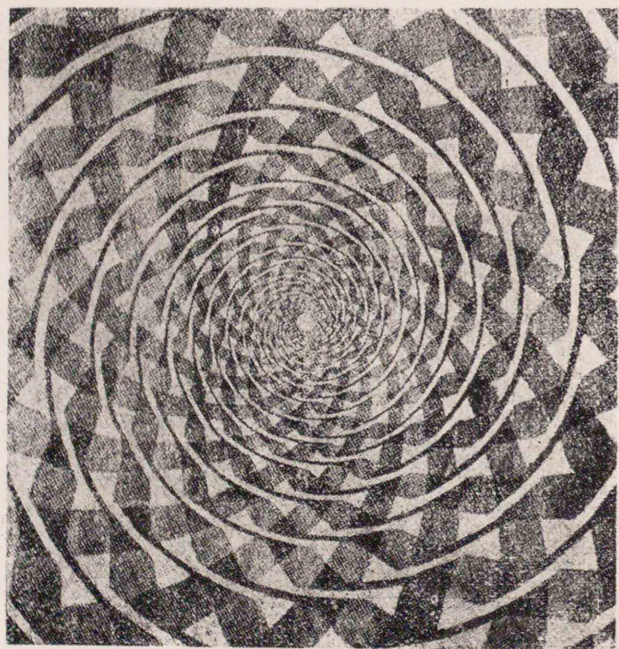
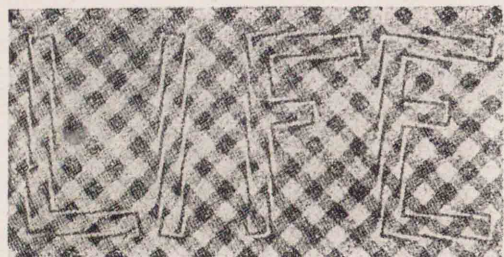
末梢的錯覺には、味覺に於けるもの、觸覺に於けるもの等

LIFE

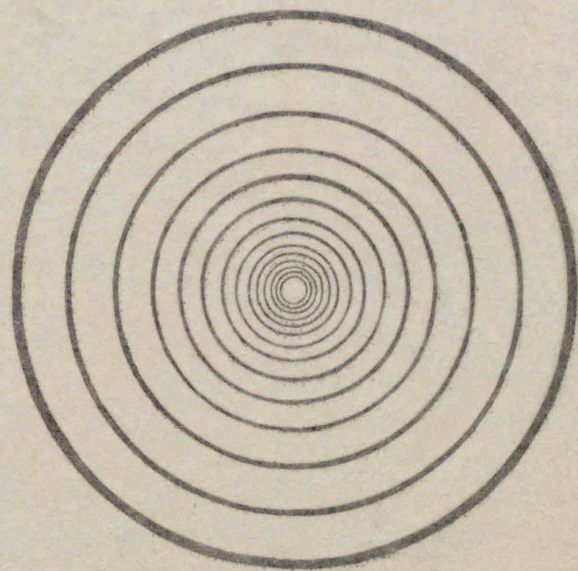
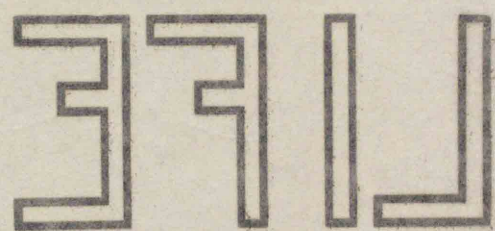


種々の錯視



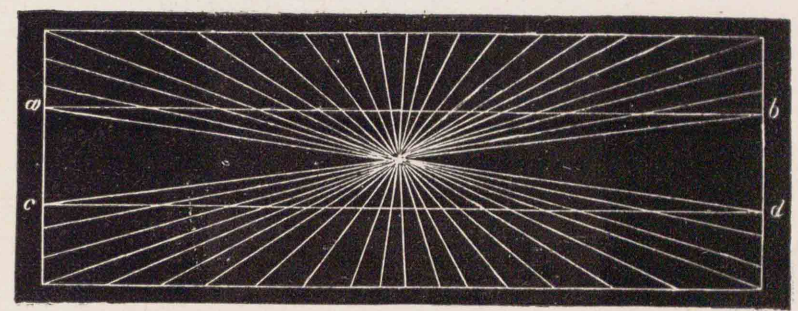


(輓近心理學七二七三)

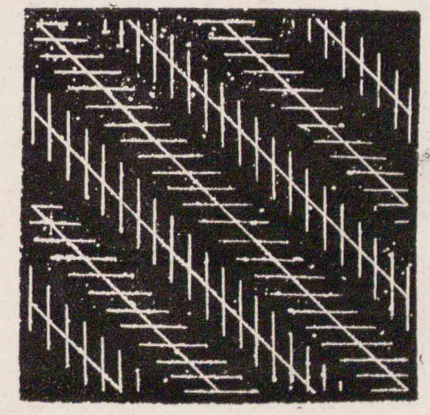


けるものなり。上を遠く見れば、眼の運動によりて生じたる感
 動感によりたるものなれば、眼の運動によりて生じたる感
 覺の量は自然に外物を測るの標準となす。種々の錯覺を生
 すべし。例へば垂直線は同一の長さの水平線より長く、垂直
 線を二等分すれば、上半は下半より長く、斜角は過大、過
 せられ、鈍角は過小、直線と曲線の間に於て、直線は曲線
 第六編 幾何の性質

ヘリングの圖形



ツエルネルの圖形

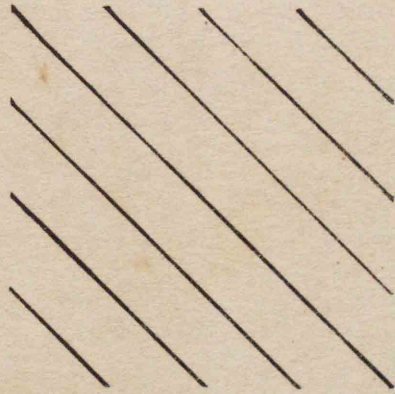


注意と知覺の
方法

種々あれども、其の最も顯著にして、且興味あるは視覺に於けるものなり。上來述べ來れる如く、空間知覺は主として運動感覺によるものなれば、眼球の運動によりて生じたる感覺の量は、自然に外物を測るの標準となり、種々の錯覺を生ずべし。例へば垂直線は同一の長さの水平線より長く、垂直線を二等分すれば、上半は下半より長く見え、銳角は過大視せられ、鈍角は過小視せらるゝが如き是なり。錯覺は繪畫建築彫刻等諸種の美術に於て廣く應用せらる。

第六節 兒童の知覺

注意と知覺の方法 實驗の結果に徴するに、兒童が外界の事物を知覺するに當り、注意の向けらるゝ對象方向は年齢によりて同じからず、大凡左の諸段階を経て次第に發達



す。

- 一、個物期 直觀的事物を個々に分離し、孤立的に觀察する時期にして、七歳以下の兒童は概ね之に屬す。
- 二、活動期 専ら人物の活動、事物の作用に著目する時期にして、八歳以下の兒童は之に屬す。
- 三、關係期 九歳乃至十歳頃に始まり、事物相互の空間的、時間的及び因果的關係に注意す。
- 四、性質期 事物の性質を分析して觀察する時期にして、最も後れて發達す。

類化の形式は、心理的に自然に起る現象にして、人爲によりて之を變更する能はず。今其の實例を示さんが爲に、ステルンが兒童をして、農家の一室を描ける繪畫を觀察記載せしめたる文章を左に掲ぐべし。

「一人の男、一人の女、一の搖籃、一の寢臺、一の十字架、一の皿、一の扁額、七歳

の兒童

「室の中央に食卓あり、父及び兒童其の側に坐す、父は椅子に、兒童は長椅子に、母は食卓に壺を載せ、左方に搖籃あり、小兒其の中に眠る。云云」
 四歳の兒童にして、未だ關係期にあるもの。

空間知覺

空間知覺は比較的早く發達し、就學期に於て、大凡、大小方向距離等を判斷することを得。諸種の幾何形體中、最も能く新入兒童に知られたるものは、圓及び球にして、正方形之に次ぎ、三角形又之に次ぐ。此の理を推せば、ヘルバルトが三角形を以て、ペスタロチが四角形を以て直觀の出發點となせるに比し、フレーベルが球を第一恩物となせるは、一層心理的なりと言ひ得べし。

時間の知覺 五秒以下の短時間に對する知覺は、比較的早く發達し、十五六ヶ月の幼兒にして已に單一なる拍子

時間知覺

を理解し、之を反復するを見る。されど週・月・年の如き長き時間には抽象的なるを以て、之を理解すること甚だ困難にして、實驗によるに、八歳乃至十歳の兒童にして、一日の時間数を知らざるもの甚だ多く、一年の日數を知れるもの極めて罕なりきといふ。こは歴史的事實の教授に於て特に注意すべき事なりとす。

第七節 知覺と教育

以上述べたる所に従ひ、左に知覺に對する教育上、特に注意すべき二三の事項を列擧すべし。

一、凡て知覺は類化に基づくものなるを以て、教育に當りては、先づ類化の基礎たるべき兒童の舊經驗を調査し、其の固有資本を知悉することを要す。近時、新入兒童の精神内容を

知覺と教育

を調査するの企圖、次第に多きを加へたるは是が爲なり。

二、類化の基礎たるべき舊經驗は正確・明瞭ならんことを要す。然らざれば誤りたる知覺を起し易し。而して是が方法としては、模式的の事實を精選し、直觀教授によりて、兒童の經驗を整理・補正するに如くはなし。初歩の教授の大半は直觀教授にありといふも敢へて過言にあらず。

三、新に教授せんとする事項は、兒童既有の知識と必ず何等かの關係を有せざる可からず、全く新らしき事物は舊經驗と結合するに由なし。されど又充分に熟知せる事項は兒童の好奇心と興味とを振起すること能はず。舊中若干の新作を交へたる者なるとき、類化は最も自然に行はる。古來教授上の格言として「既知より未知に進め」「近より遠に及べ」等の語あり。是等は何れも上の事實を簡易に發表せるものに過

ぎず。
四、兒童の類化形式に順應すべし。然らざれば勞して效なきに終らん。

第三章 心 像

第一節 知覺と心像

眼前に事物ありて之を意識するは知覺なり、眼前に事物なきも、尙其の事物を思ひ浮かぶるを心像Imageといふ。即ち心像とは、刺激の現存せざるときに生ずる事物の意識にして、左の二點に於て知覺と區別せらる。
一、心像は直接に、外來の刺激によりて生起せられたるものにあらざれば、其の明瞭の度に於て、一般に知覺に劣れり。故に此の二者は、夢に於ける心像の如く、異常の場合を除く

心像

知覺と心像との區別

外、決して混同せらるゝことなし。

二、心像は知覺に比すれば、其の内容に於て細かき點を缺如し、且不安定なり。知覺は刺激の存する間は比較的に固定すれども、心像は強ひて之を固定せしめんとする場合にも、尙且移動し變轉す。

試に眼を閉ぢ、昨日會合せし友人を思ひ浮かべ見よ。衣服の縞柄、頭髮の形の如きは、多くは思ひ出さるゝことなく、又其の顔面も、明らかに描き出されたりと思ふ次の瞬間に於て、忽ち漠然たるものに移動すべし。故を以て、知覺にては、個人的差異比較的に少きも、心像にては人により時により大なる差異を來すを免れず。

心像は或は之を觀念と稱す。されど觀念なる語は心像よりも稍廣義に用ひられ、後章論ずる所の概念をも其の中に含ましむる事あり。又心像と表象とは同義に用ひらるゝこと多きも、時としては、表象をば狭く知覺せられたる感覺のみに限定することあり。以下普通の用法に従ひ、是等の語

觀念及び表象

を混用することとすべし。

第二節 心像の型式

型式の意義

一の心像は多くの感覺的要素より成る。然るに是等の要素中特に主要の位置を占むる感覺は人によりて同じからず。或は視覺的要素の秀づるものあり、或は聽覺的要素の著しき者あり。人々各一定の傾向を有す。此の個人的差異を名づけて心像の型式若しくは範類といふ。

型式の種類

心像型式は通常之を視覺型式・聽覺型式・運動型式及び混合型式の四種に分かつ。視覺型式に屬する人は主として形狀・色彩等によりて事物を想起する人にして、機械の發明家・畫家等には此の型式に屬するもの多し。聽覺型式は聽覺による印象の秀づるものにして、運動型式は運動感覺による

要素の最も強く働くものなり。音樂家・演說家等には聽覺型式のもの多く、彫刻家・盲人等は概ね運動型式なり。又混合型式は以上の三型式の何れにも屬せざる人にして、何等主要なる感覺的要素の認め難きものなり。

心像の特異なる者に、色聽と稱して、音と色とが聯合して音を聽きて色を感じ、色を見て音を感じる者あり。又數型として、位階・年代・年月・七曜・四季・數等を空間的固形として表象するものもあり。

教育上の注意

兒童の多くは各特殊の型式を有するを以て、教授者はなるべく、兒童の型式の何たるかを確め、之に適應することをかめざるべからず。されど一學級の兒童中には種々の型式のもの共存するを以て、若し教授の方法が單に一方に偏し、或は視覺のみに訴へ、或は聽覺のみに訴ふるが如きことあり。

るときは、児童の多數は自己の型式に適せざる教授を受く
ることとなるべし。故を以て教授に當りては、なるべく各種
の覺官に訴ふるを以て其の眼目となさざるべからず、殊に
國語の教授に於て「讀みつゝ書寫すること」は、何れの型式に
も適する方法なれば、多く利用せらるべきものなりとす。

第三節 聯想(一)再現

心像の再現

凡ての心的現象は一定の方法によりて把持せらるゝも
のなれば、一度意識を去りたる知覺も、其の儘消滅すること
なく、機に觸れて再び意識に現れ來るべし。之を再現といふ。
然らば如何なる心像が如何なる場合に再現せらるゝかと
いふに、通常、現在意識を占領せるものと何等かの關係を有
する心像が順次再現せらるゝものにして、其の状宛も絲の

觀念聯合

一端を引けば他端自ら現るゝが如し。換言すれば心像の再
現は概して觀念聯合の法則に支配せらる。

觀念聯合 机を見れば直に椅子を想起し、白といへば黒
自ら意識に現るゝが如く、嘗て意識内に共存し或は繼起せ
し心像は、相互に相誘發する傾向を有す。之を**觀念聯合**若し

Association of Ideas

くは**聯想**と稱す。之を生理的にいへば、互に聯想せらるゝ二
個の心像に伴なふ神經活動は、嘗て屢、同時に若しくは相繼
續して起りしを以て、自ら其の間に神經傳達路を構成し、相
連絡し得るに至り、若し其の中、一の神經活動起る時は、自然
に他の神經活動を誘發し、茲に觀念の聯合を生ぜしむる者
なり。觀念聯合は、古來最も多く學者の注意を惹きし心理上
の現象にして、聯想派の如きは、之を以て精神現象の根本原
理となし、因りて以て一切の意識的事實を説明せんと企て

觀念聯合の法則

たり。

一、接近聯合 同時に若しくは相繼續して起りし心像は互に聯合し、相互に再現を助く。インク壺を見てペンを思ひ、雷鳴と電光と相聯合せらるゝが如き是なり。

二、類似聯合 類似の性質を有する心像は互に聯合す。例へば蛇と鰻、白砂糖と雪との間に起れる聯合の如し。

茲に a なる一心像あり、此の心像は b、c、d 等の心像と相關係し、以上の法則に基づきて、 $a | b, a | c, a | d$ の如き聯合を形成せりとせんに、今 a なる一心像意識に現るゝとき、b、c、d の各心像中何れが想起せらるゝかといふに、若し他の事情に於て等しき限り、a と最も強く聯合せるもの、換言すれば、生理的に神經傳達路の最も固定せるもの、先づ再

聯合の固定

現せらる。即ち心像の再現は聯合の強固なるに従つて容易なり。然らば聯合を強固ならしむる條件は如何左に之を略述せんとす。

一、反復 聯合は反復せらるゝに従つて其の強固の度を増す。觀念聯合が其の人の職業、境遇等と大なる關係を有するは此が爲にして、花なる一觀念も畫家は直に色彩美を聯想し、植物家は直に花瓣、萼蕊等の形態を想起すべし。

二、明瞭 印象の明瞭なるものは不明瞭なるものに比して聯合し易し。而して明瞭なる印象は注意と興味によりて得らる。嘗て興味ありし事項の容易に想起せらるゝは是が爲なり。

三、始端 第一回到に經驗せし事項は、同一事實に對する

反復

明瞭

始端

新近

其の後の経験に比して聯合容易なり某友人の第一回目の訪問が其の後の訪問よりも能く想起せらるゝが如し。
四、新近 同一の経験にても新近なるものは、多く時日を経過したるものに比して、一層容易に想起せらる。某友人を想起するとき、直に其の最近の會合、會合の場所等を想起するが如し。

以上四者の中、始端及び新近は何れも其の印象の強きが爲にして、之を明瞭の中に含ましむるも可なるべく、要するに(一)注意及び興味を起して印象を明瞭ならしめ、(二)且之を反復することは、記憶を確實にし聯想を容易ならしむる二大條件なり。

再現當時の心情

心像の再現は、斯く聯合の強度に依存すと雖も、又同時に再現當時の心的状態に左右せらるゝ事大なり。即ち再現當

時の注意の方向及び感情の状態等は再現せらるゝ心像を決定するに與りて力あるものなり。例へば天空に懸れる満月を見たるとき、之を觀察する人の注意が遊戯に向へるときは、自らフットボールを聯想し、之に反して演劇に向へるときは、劇場の電氣燈を想起し、若し又、憂胸に滿つる時は、缺くる所なき月も、唯悲しき思ひ出の種となるが如き是なり。教授に於て兒童の感情を靜平ならしめ、且其の注意を教授の目的に集中せしむるの必要實に此に存す。

第四節 聯想(二) 再認

再認

再現せる觀念に「嘗て自ら経験せり」との意識伴なふときは之を再認といふ。故に再認を生ずるに至る迄は(一)経験を收得する學習、(二)以前の経験を保存する把住、(三)把住せられ

再認の誤り

たる觀念の再び意識上に現るゝ再現(四)嘗て自ら經驗せりとの意識即ち再認の四段階の過程を経ざるべからず。此の中把住は印象の強度及び反復に依存し、再現が聯想に基づくこと、已に述べたる所の如し、又再現の方法は實驗的に他より觀察することを得るあるも、再現せる者を再認せるか否かは全く主觀的に意識され、他より觀察することを得ず。再認と記憶の誤謬 若し再認の有無のみを以て記憶の確實性を證明する方法なりとせば、個人の證言は悉く信ずるに足るものなるも、再認亦往々にして誤ることあり。記憶の誤謬とは、斯かる再現に對する再認の誤によつて判斷さるべき者にして、記憶の有無とは全然異なる意識の事實なり。記憶の有無は、他より觀察して、再現し得たるか、忘却せるかによつて判斷さるべき者なり。此の點に於て記憶の誤謬

聯想の時間

は知覺に於ける錯覺に類似す。又再現し得ざる場合にも忘却せりといふ意識を有す。要するに再認は、再現し得たりと判斷する意識にして、忘却は再現し得ずと判斷する意識なり。故に過去の經驗に對する個人の證言は必ずしも信ずるに足らず。刑事上、證言の問題は頗る興味ある研究にして、また兒童の證言の如きも教育上大いに注意すべき問題なり。

第五節 聯想の實驗

刺激を認識するには一定の時間を要するが如く、知覺に對し、之に關聯せる他の心像を自由に想起するにも、一定の時間を要す。之を聯想時間といひ、一般に、感覺の認識及び辨別時間よりも長く、平均七〇〇シグマ乃至一四〇〇シグマ(一シグマは一秒の一千分の一)を要す。聯想時間は個人によ

り相違し、疲勞により長くなるを常とす。又聯想が一定の標準によつて制限され或は選擇的に行はるゝ時は、聯想時間は増加すべし。是れ心像相互の禁止作用による者にして、若し一定の心像が故意に禁止せられずとする場合には、之に代るべき心像の想起に要する時間は甚だ大なり、或個人につき、特に禁止せられ居る觀念を、聯想時間の關係により察知し得ることあるはこの理に因る。

第六節 夢及び幻覺

夢

夢は睡眠中身體の内部及び外部より來る刺激を正當に類化する能はずして錯覺を生ずるに基づく。例へば電燈の刺激により火事を夢み、呼吸苦しき姿勢を取りしたため、絞殺さるゝと夢みるが如し。凡て睡眠中に於ては有意注意思考

幻覺

等の高尚なる心的活動減退し、統制作用を缺くを以て、一度錯覺によりて觀念の再現を來すときは、之に關係ある觀念は所動的に續々聯想せられ、其の間に何等の統一なく、荒唐無稽の連鎖を爲すこと、恰も小兒の空想に於けるが如し。近時フロイドは、夢は覺醒時に抑壓せられたる強き觀念の表現なりとの新説を立て、夢によりて潜在的に活動せる強き觀念を卜知し、之を精神療法に應用せんと試みたり。

幻覺は覺醒時中外界の刺激なきに拘らず、或刺激に相當せる物體を實際存在するが如く知覺するものにして、多く精神病者に起る現象なり。其の強度は眞の知覺に等しく、音なきに聞き、物なきに見、しかも自ら幻覺なるを知らざること多し。幻覺と夢とは、共に常規を逸せる意識状態にして、それが覺醒時と睡眠時とに起るの相違あるのみ。従つて前者は

比較的永續的なるも、後者は覺醒と同時に消失し、且つ其の強度弱し。

第七節 想像

想像の意義

想像と記憶との別

想像とは過去の經驗を材料として、新しき觀念を構成する作用にして、例へば未だ曾て沙漠を見たることなきものが、繪畫若しくは他人の談話によりて、沙漠の状態を心中に描くが如き是なり。故に想像の作用を分解するときは、其の中に(一)過去の經驗を想起する**再現**、(二)之を其の要素に分かつ**分析**、(三)是等の要素を結合して一の新しき觀念を構成する**綜合**の三過程を含む。一般に記憶は過去の經驗をあるがまゝに再現し、想像は之を變化すと稱せらるれども、記憶必ずしも過去の經驗と全然一致するものにあらず、想像亦全

く過去の經驗を離れて成るものにあらず。此の如きは畢竟便宜上の區別にして、兩者の根本的差異は實に再認の有無にありとす。

想像の種類

想像の種類 想像は其の作用上より之を分かつて、**受動的想像**(再生的想像)及び**能動的想像**(構成的想像)の二種となす。

受動的想像とは特に意志の力を用ひず、觀念の再現に伴ひて自ら起る想像にして、他人の言語・文章によりて**實物**・**實際**の何たるかを推察するが如き是なり。**能動的想像**とは豫め一定の目的を立て、之に指導せられて觀念の新結合をなすものにして、**再現**・**分析**・**綜合**の三作用最も明瞭に行はる。之を大にしては、**美術家**・**哲學者**・**科學者**・**發明家**等の**大事業**より、之を小にしては**日常些事**の**計畫**に至るまで、何れも**能動的想像**の作用によらざるはなし。

理想・空想及
び妄想

想像の合理的にして、企圖的なるものを**理想**といふ。又想像の自由にして、何等の制限なく、全く實際より離れたるものを**空想**といひ、空想の尙一步進みて其の中に種々の矛盾を含むに至るときは之を**妄想**といふ。空想と妄想とは兒童及び青年に多く見る所なり。

想像の利害

想像の利害

感覺・知覺・記憶等は人の知識を増加すれども、是れ唯知識の蓄積に止まり、未だ經驗せざる新しき事物を作り出すの作用を有するものにあらず。其の是あるは實に想像の賜なり。記憶は過去を與へ、想像は未來を作る。未來に對する理想を構成し、之に向つて向上發展せんと希望を起すは一に想像の力によらずんばあらず。豊富なる想像に思考と趣味との結合するあらば、科學・美術及び工藝上に於ける新發明期して待つべし。されど想像にして一旦其の

向ふ所を誤り、空想に陥るときは弊や亦大なりといはざるべからず。世人の往々にして想像を以て全く有害無益のものとなすことあるは、此の惡方面を過重視せる結果に外ならず。

第八節 兒童の想像と教育

兒童の想像

兒童の想像は多く受動的にして、系統を缺き、想像よりも寧ろ模倣に傾き、且人化的なるを以て其の特徴となす。所謂人化的とは天地萬物を人の如く活動するものと見るの傾向をいふ。小兒が人形に食物を與へ、又は躓きたる石を怨み打つが如きは是が爲にして、彼等が童話・傳説等に對して興味を有するも亦是が爲なり。美しき想像の世界は實に兒童の特權なれば、大人の心を以て妄りに之を破壊すべからず。

と雖も、又反對に之を煽り、想像的幻影と事實とを混同するに至らしむる如きは、頗る危険なりといふべく、兒童の虚言は此の種の混同に基づくもの甚だ多し。されば其の幼稚なる間は之に童話・傳説等を授けて、其の心性に合せしめ、年齒の長ずるに従ひ、次第に直觀教授・理科教授等を加へ、以て知識の確實なる基礎を與へ、空想より、徐々に能動的實際的の想像に導くは、教育上重大なる要件なり。能動的想像の養成に與りて特に力あるものは、幼年に於ては遊戯・學校に入りては手工圖畫・綴方・算術等の諸教科なりとす。

第四章 思考作用

第一節 思考と統覺

數學の問題につきて考へ、綴方につきて考ふといふ場合

思考の性質

の如く、凡て「考ふる作用」を**思考**といひ、思考の所産を**思想**といふ。左に例を幾何學に取りて、Thinking思考作用の一般の性質を明らかにすべし。

一、幾何學に於ける思考は、常に一定の問題を解く作用として現るゝが如く、凡て思考は疑問の發現を以て其の端緒となし、此の疑問を解決するを以て其の目的となす。即ち思考作用は**目的を有する有意的活動**なり。此の點に於て思考作用と能動的想像とは頗る相似たり。

二、幾何學に於て一の問題を解決するに當り、此の問題に關係ある種々の小なる問題と過去に學習せる幾何學の定理とは續々聯想的に生起し、甲の角は乙の角に等しきか、甲の線は乙の線に平行なるか等の小疑問につき、一々之を比較吟味し、此の中、今解決せんとする問題に關係あ

るもののみを選択す。故に思考は聯想の助を借るものなれども、又聯想作用と異なり、一定の原理に従つて選擇し、若しくは排斥する作用なり。

三、斯くて問題を解決し終るときは、其の結果は角と角との關係、又は線と線との關係を明確に定立する一種の斷定を成す、幾何學の定理即ち是なり。即ち思考は物と物との關係を定むる作用にして、此の點に於て記憶・想像等の諸作用と區別せらる。

四、幾何學に於ける問題の解決は、新しき知識を増加し、且其の知識には眞理なりとの信念を伴ふ。新しきことと眞なること亦思考の一特徴にして、記憶は過去の經驗の再現にして新らしからず、想像は新なれども常に必ずしも眞ならず。

五、幾何學に於て、三角形に關する一定理は如何なる三角形にも適用せらるゝ如く、凡て思考の作用は一般的なるを以て其の特徴となす。是れ聯想・想像等を具體的となし、思考を抽象的又は形式的となす所以なりとす。

思考は之を定義して或は問題を解決する作用なり。といひ、或は關係の認識なり。といふ。前者は主として思考の機能より見たるもの、後者は其の本質より見たるものなり。斯く思想が聯想及び想像と異なる所は、一定の目的の下に事物を相互に比較・判斷し、事物を出來る限り分析すると同時に、之を一定の關係に基づきて綜合し、統一ある知識を獲得せしむる點にあり。斯かる作用を聯想及び想像に對して特に

統覺といふ。

Apperception

思考は概念・斷定及び推理の三者によりて行はる。再び幾

何學の例につきて言へば、三角形・四角形等は概念、引用せらるゝ諸種の定理及び思考の結果として得たる定理は斷定にして、角と角、線と線との關係を推究する作用は推理なり。

第二節 概念

概念の形成

小兒あり、屢街頭に犬を見たる時、是等の犬の表象は各多少の差異を有すれども、他方に於て又種々の共通點を有す。然るに此の共通點は苟も犬に遭遇する場合には必ず經驗する所のものなるを以て、自ら明瞭に意識せられ、容易に思考せらるれども、個々の犬に存する特異點は甲の場合と乙の場合と各相異なり、互に相制して不明となるに至る。斯くて經驗を積むに従ひ、犬なる觀念は次第に其の特殊相を脱して、一般的性質を帶び、終には凡ての犬を代表するに足

るべき一の普遍的觀念に發達すべし。此の普遍的觀念は即ち是れ心理學上概念と稱せらるゝ所のものにして、之を定義すれば左の如し。

概念とは或種の事物の共通點を總括して成れる普遍的代表的觀念なり。
Concept

概念的種類 概念は其の發達の度に應じて、心理的概念論理的概念の二種に區別せらる。

心理的概念

甲、心理的概念 上に例示せる如く、經驗を反復せる結果、自然に事物の共通點を綜合して成れるものを心理的概念。若しくは自然的概念といふ。小兒及び無教育者の有する概念は概ね是に屬す。

論理的概念

乙、論理的概念 心理的概念は、特に思考の精練を経たるものにあらざれば、時としては水中に住むものを凡て魚類

となし、空飛ぶ動物を凡て鳥類となすが如き誤謬に陥ることあり。故を以て完全なる概念を得んとするときは、(一)先づ同類の事實を多く觀察して、其の屬性の異同を比較し、(二)次に是等の事物に共通なる屬性を抽象し、(三)然る後之を概括せんことを要す。斯く比較・抽象及び概括の三過程を経て有意的に構成せられたるものを論理的概念若しくは科學的概念といふ。固より心理的概念に於ても、上の三過程は無意の間に行はるれど、有意的構成を経ざるを以て、未だ概念の精確を期すべからず。心理的概念と論理的概念との差異は之を常識と科學との區別に比することを得べし。故に論理的概念は左の二特徴を有す。

一、明瞭 其の内容即ち共通的屬性は明らかに規定せらる。

二、判然 他の類似の概念と明らかに區別せらる。

概念を明瞭・判然に表示する方法たるべき定義及び分類につきては之を論理學に譲るべし。

吾人若し一の概念を想起せんと努むるときは、或具體的表象の心中に現れ来るを常とす。之を**範類表象**といふ。例へば机の概念を考ふるに當りては、必ず或特殊の机を想ひ浮かべ、之によりて机全體を代表せしむる事とし、決して其の共通屬性のみを意識すること能はざるが如し。斯く概念は常に**範類表象**を借りて意識に現るゝものなるを以て、概念の養成は必ずや先づ**範類**たるべき適當の事實を擇び、實例によりて、其の内容を明らかにし、次第に抽象的に之を構成するに至らしむべし。**直觀**より**概念**に、**具體**より**抽象**に達せしむるは實に教授上の最大要件なり。故を以て古人も、**概念**

概念と範類表象

なき直観は盲目なり、直観なき概念は空虚なり。」といひて兩者の互に離るべからざることを説けり。
 概念は多くの經驗を集めて之を整理し、多くの事物を一の觀念に代表せしむるものなれば、心的活動を迅速容易ならしめ、心力を經濟的ならしむるに於て、其の効果頗る大なり。古人が概念を以て、能く圖書を整理する敏腕なる圖書館長に比したるは、誠に以ありといふべし。

第三節 言語

言語の效用

概念と言語 概念は本來抽象的のものなるを以て、之が取扱に當りては、何等かの具象的符號と結合し置くを要す。而して是等の符號中最も便利なるは音聲的符號即ち言語なり。言語は單に(一)思想を自由に發表し、之を他人に傳達す

るの用をなすのみならず、(二)吾人は又是を以て概念の代理となし、容易に自ら思考を進行することを得。試みに「正直は最良の政略なり。」との思考に於て、正直、政略等の語なしと假定せよ、思考の困難想像するに餘りありといふべし。彼の身振手眞似等も亦多少思想を發表するものなきにあらざれども、是等は何れも、其の迅速の度、精密の度、自由の度に於て遠く言語に及ばざるものなれば、唯言語の補助として、之に併せ用ひらるゝに過ぎず。

身振は、教授上に於て亦有力なる補助方便なり。身振を大別して指示的と表現的との二種となす。前者は指にて事物の方向を指示する者にして、後者は、例へば事物の形象を指頭にて空中に描くが如く、事物の特徴を運動によりて表現す。兩者共に巧みに之を使用せば説明の不足を補ひ、且教授を直觀的ならしむるの效あり。

言語の發達

兒童の言語 幼兒生まれて三四個月に至れば、言語に類する一種不明の音を發し、又は「パッパ」「ターター」の如き喃語を、興味を以て、連續的に反復す。是れ即ち言語習得の準備時代にして、滿一年以後に至りて、始めて能く、大人の言語を模倣し之を發音し得るに至る。之を模倣期と稱す。模倣期に先だち、且之と平行して、單に言語の意味を理會し、未だ之を使用し能はざる時代あり。幼兒に「オ月サマ」と問へば、月を指して之に答ふる如き是なり。故に言語の理會と發音の習得とは必ずしも一致するものにあらず。一歳半以後に至れば言語の學習最も盛に行はれ、滿四歳に於て、大凡日常の言語を理會し、之を使用し得るに至る。

言語の教授

言語の教授 言語は之を其の發生の順序より考ふれば、恐らく思考の後に現はれしものならんも、今日にありては、

人は凡て言語の世界に生まるゝを以て、先づ言語を學び、然る後其の内容に及ぶを常とす。加ふるに、言語の習得は主として模倣によるものなれば、言語は豊富なれども内容の充實せざること多し、大に注意せざるべからず。概念は言語を得て始めて明瞭確實なるを得るが如く、言語も亦内容を得て始めて價值あるものなれば、一方に於て言語の修練をなすと共に、又他方に於て事物の教授を重んじ、充分なる内容を與ふるは實に言語教授上の一大眼目なり。殊に兒童の言語は其の數僅少なれども、之によりて指示せらるゝ事物の範圍は大人に比して甚だ廣く、赤きものを凡て花と呼び、黒きものを炭といひ、未來を凡て明日といふ如く、意義概ね曖昧なれば、務めて兒童語の研究を怠らず、適宜に之を矯正するの用意あるべきなり。

斷定の意義

第四節 斷定

「薔薇は美なり。馬は走る。鉛は金屬なり。」といふ如く、事物に關する或種の立言を**斷定判斷**といふ。今其の成立の次第を考ふるに、例へば「馬は走る」といふ斷定は、走る馬を見て、其の有する各性質、各状態より、「走る」といふ一状態を分析し、然る後「馬」と「走る」との關係を定立せるものにして、先づ分析し、然る後之を綜合す。即ち斷定は單なる分析作用にも、又單なる綜合作用にもあらずして、分析作用なると同時に綜合作用なり。凡て斷定に於ては思考の對象たるべき事物又は概念を**主位**といひ、主位を規定する概念を**賓位**といふ。「馬は走る」に於て「馬」は主位、「走る」は賓位、馬は走る」は主賓兩位の關係を定立せる斷定なり。

概念と斷定

概念と斷定

概念が比較、抽象及び概括の諸過程を経て構成せらるゝものなることは先に之を見たり。而して是等の諸過程は之を他面より考察するときは、既に斷定作用を豫想せるものにして、個々の事物を分析して、其の屬性を明らかにし、又は是等の事物に共通なる屬性の何たるかを定むる如きは、何れも斷定作用に外ならず。即ち斷定作用は下は知覺より上は推理に至るまで、凡ての精神作用を貫ぬく所のものにして、心理的にいへば、斷定は概念に先だちて存し、思考の最も原始的なる形式なり。されど知覺に伴なふ斷定作用は多くは自然に行はれ、自ら其の作用を意識することと尠し。此の如く事物の出現に應じて直に起る斷定を**知覺的斷定**（直覺的斷定）といふ。乳兒の其の母を見て喜ぶ如きはこれ既に知覺的斷定の發現なり。之に反して思慮を用ひて、

思考の原始的
形式

抽象的に概念其の物につきて断定するものを概念的断定（思慮的断定）と稱し、其の發現は之を知力の發達に俟たざる可からず、通常世人の断定と稱するものは多くは概念的断定なりとす。

第五節 推理

推理の意義

凡て問題の解決に當りては、前に述べたる如く、多くの既知の断定を想起し、之に基づきて事物間に存する新しき關係を考へ、從來不明なりし所のものを明らかならしめざるべからず。之を**推理**といふ。即ち推理とは既知の断定より一の新断定を導く作用にして、此の際推理の基礎となるべき既知の断定は之を**前提**といひ、新断定は之を**結論**と稱す。推理亦断定に等しく、原始的のものは早く已に精神作用

推理の種類

の初期より存すれども、其の論理的となるに至るは、之を知力の發達に俟たざる可からず。而して論理的の推理は通常之を分かつて、**演繹推理**及び**歸納推理**の二種となす。

演繹推理 或特種の事物につきて、何等かの疑あるときは、一般の法則に照らして、之を説明するの外なし。斯く一般の法則により、特殊の事實を明らかにするを**演繹推理**といふ。其の形式左の如し。

凡ての人は死す。

太郎は人なり。

故に太郎は死す。

歸納推理 一般の事實につきて疑あるとき、例へば凡て金屬は熱によりて鎔解するにあらざるかとの疑問起るときは、**演繹推理**とは反對に、先づ個々の事實を吟味し、之によ

りて疑問の正否を決定せざるべからず。之を歸納推理といふ。其の形式左の如し。

金銀銅鐵鉛等は熱によりて鎔解す。

金銀銅鐵鉛等は金屬なり。

故に凡ての金屬は熱によりて鎔解す。

凡て教授に於て、先づ一般の法則を授け、之を基礎となして次第に部分に推及し、特殊の疑問の解決を試むるときは、之を演繹的方法といひ、之に反して先づ個々の場合を考究し、之に基づきて一般的疑問を解決し、原理法則に導くときは、之を歸納的方法といふ。修身科に於て一の格言を授け、之を種々の場合に應用せしむるは前者の例にして、實驗觀察より入りて、以て一般の理法に達する理科の教授は後者に依據す。

演繹的方法と
歸納的方法と

第六節 兒童の思考

兒童の思考

概念發生の時期は之を決定すること難しと雖も、極めて幼少の時代より漠然たる概念を有するは疑ふべからず。殊に言語を使用し得るに至れば、急速なる發達をなす。幼兒が男子を見れば凡て「父」と呼び、動物を見れば凡て「犬」と呼ぶ如きは已に心理的概念の發現なり。而して兒童の概念の内容をなすものは、主として其の物の作用にして、例へば筆は、多くは、字を書くもの、馬は、多くは、人の乗るものとして意識せらる。

兒童の思考は、新しき境遇に處し、新奇なる事物に遭遇するに従ひ、之に順應するの必要に迫られて徐々に發達す。其の大人の思考と異なる顯著なる特色は、大人が言語による

抽象的思考をなし得るに反し、兒童は具體的なる事物觀念によりて思考するにあり、具體性は兒童精神の大特徴にして、實驗の結果によれば、抽象的なる思考は、十三四歳以後に於て始めて發達するものゝ如し。

第七節 思考作用と教授

思考作用は諸種の知力中最も重要な作用なり。記憶の如き亦重要なりと雖も、若し推理力の之に伴ふなくんば、常に死知の蓄積たるに止まり、應用自在なる能はず。又想像の如きも思考の精練を経ざる時は、空想に流れ易し。思考力の陶冶は實に教授上主力を注ぐべき中心問題なれば、左に之に關し、二三の注意すべき要點を擧ぐべし。

一、慎重に思考する習慣を養ふべし。兒童は經驗に乏し

く思考作用亦發達せざるを以て、未だ能く事物の本質を發見する能はず。一二の外面的類似によりて、不當の類推をなし、輕率なる斷定を下す事多し。されば教育者は兒童をして、なるべく慎重に思考を進め、徐々に推理するの習慣を得しめざるべからず。早き思考は皮相と速斷とに陥り易し。

二、教授は具體的なるべし。次に教師は兒童精神の具體性を顧慮し、教授材料の取扱に於ても、なるべく之を具體化し、適當なる事例を用ひて指導せんことを要す。これ兒童をして思考材料に對し、興味を保持せしむる第一の方法にして、又兒童の自己活動を促す最良の手段なりとす。

三、巧みに兒童の疑問を誘發すべし。凡そ思考は疑問を動機として生ず。古人も、疑は知の始なり」といへり。然るに兒童は好んで種々の疑問を發する傾向を有する者なれば、教

育者は此の兒童固有の性情を善導し、彼等をして能く疑ひ、能く思考し、眞理を愛好するの人たらしめざるべからず。

第三篇 情的現象

第一章 單一感情

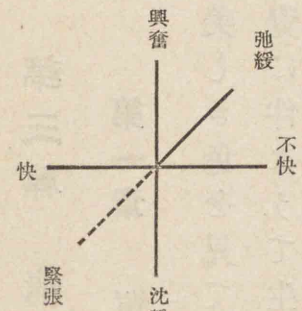
單一感情の性質

美しき色を見て快を感じ、苦き味に不快を感じるが如く、感覺に伴なうて生起する最も簡單なる感情を**單一感情**又は**感應**といふ。單一感情は通常感覺と共存し、單獨に之を経験するを得ざれども、左の二點に於て容易に感覺と區別せらる。

單一感情と感覺

一、感覺は外界刺激の性質を現示し、同一の刺激は大凡同一の感覺を起せども、單一感情は刺激に對する主觀の反應なるが故に、同一の刺激も、人により場合により異なる感情を發することあり。換言すれば感情は感覺に比して一層主觀的なり。

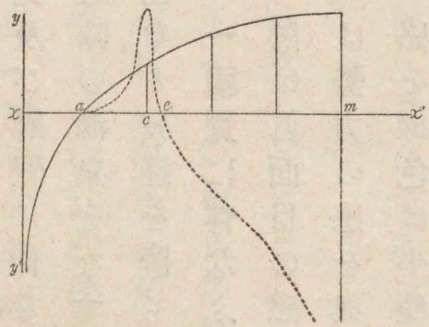
意識の構成要素



二、感覺は、之に注意するときは、一層明瞭の度を増せども、
 單一感情は注意して之を検せんとせば忽ち不明となり
 又は全く消失するに至る。
 以上の特質により、單一感情は感覺の一屬性にあらずし
 て、全く別種の精神作用なることを知る。即ち感覺と單一
 感情とは共に意識を構成する原始的要素にして感覺は
 其の客觀的要素、感情は主觀的要素なりと見ることを得
單一感情の種類 單一感情の種類に就ては異説多し、之
 を快・不快の二種に限るは、一般に行はる
 る所なれども、又興奮及び沈靜、緊張及び
 弛緩の情を加へ、感情の三方向説を成す
 者あり例へば嗅感、味感及び皮膚の感覺
 には快・不快の情著しく、視覺及び聽覺は

刺激と感情との關係(サント)

刺激は、感情の強弱を示す最も強き部位なり。
 感情は、刺激の強弱を示す最も強き部位なり。



興奮、沈靜の情を伴ふ事多く、メトロノームの拍撃を聞く
 場合の如く、或刺激に注意する時は、緊張と弛緩との交、現る
 るが如し、三方向説は未だ一般の承認を得るに至らずと雖
 も、感情に就て研究し、及び之を記述する
 に於て便利なる點少からざるを以て、以
 下主として之に因ることとなすべし。
各種感覺と感應 單一感情は、通常、感
 覺に伴なうて生起するが故に、同じく快
 感と稱せられ、不快感と呼はるゝもの
 にも、共存する感覺の差異によりて多少
 其の趣を異にせざるを得ず。加ふるに三方向中、快・不快の方
 向は刺激の強度及び刺激の時間の長短に影響せらるゝこ
 と大にして一般に、刺激甚だ強大なるときは、何れの感覺も

終に不快を感ずるに至り、又刺激の時間長きに亙るときは、始め不快を感ぜしものも、次第に其の度を減じ、終に消滅に歸することあり。諸種の感應中教育上特に注意すべきは、視覚及び聽覺に伴なふものにして、此の二者は共に高尚なる趣味の源泉をなすものなれば、幼時より意を用ひて其の完全なる發達を圖らざるべからず。

視覺に伴なふ感應

一 視覺に伴なふ感應

黒は眞面目の感を與へ、白は快活喜樂の感を與ふ。又赤色は勢力の感を與へ、黄色は暖かなる感を、青色は冷かなる感を、綠色は平穩なる喜悅の感を、堇色は不安易に憧憬的なる嚴肅の感を與ふ。

色圈に於て赤色より綠色に至る間の各色は、概して興奮的の感を起さしめ、綠色より堇色に至る間の各色は沈靜

聽覺に伴なふ感應

的の感を起さしむ。殊に強き光度を有する赤色は最も興奮性を帶び、堇色は沈靜の中に稍興奮性を有す。

二 聽覺に伴なふ感應

低き音は眞面目の感を起し、高き音は快活の感を起さしむ。

樂器につきていへば、オルガンは眞面目の感を與へ、ヴァイオリンの如き絃樂器は快活又は情熱的なる興奮の感を、喇叭は勢力の感を起さしむ。又笛は眞面目と勢力の感を混じ、中には陰鬱なる悲調を帶ぶるものあり。

感應の表出

單一感情の表出

凡て感情は身體諸機關に種々の變化を與ふるものにして、之を感情の表出といふ。感應の身體的表出は、さまで顯著ならざれども、尙脈搏・呼吸等に對して多少の變化を與ふ。例へば快感は脈搏を強く且遅く、呼吸を淺

く且速かならしめ、不快感は之と正反對の變化を起さしむるが如し。

第二章 複合感情

複合感情

知覺表象等は感覺的要素の結合より成れども、日常の經驗に於て、個々の感覺を單獨に意識せざる如く、感情に於ても亦具體的に經驗せらるゝものは、單一感情にあらずして、却つて其の結合より成る複合感情なりとす。例へば、食物に對する快感は、味覺、嗅覺及び皮膚感覺に伴なふ諸種の單一感情の融合より成り、輕き衣服に伴なふ快感は温覺と皮膚感覺との起す單一感情の融合より成るが如し。故に複合感情は(一)其の對象を構成する各種の感覺に伴なふ感情と、(二)對象其の者に伴なふ感情とより合成するものにして、前者

一般感情

を**部分感情**といひ後者を**全體感情**といふ。

複合感情中、身體より起る諸種の感覺に伴なふ感情の融合せるものを**一般感情**といひ、視覺・聽覺等高等感覺に伴なふ複合感情を**初等美的感情**といふ。

初等美的感情

初等美的感情 初等美的感情は視覺又は聽覺の對象によりて生起せらるゝ適意の感にして、之に左の諸種の形式あり。

イ、調和 色彩につきては、互に補色に近き色は最も能く調和し、(第五十一頁)二個の音につきては、振動數の簡單なる比例を有する二音は能く調和す。(第四十七頁)又三音にては長三和音 c e g(振動數 4:5:6)及び短三和音 c e s g(振動數 10:12:15)の調和は最も美的價値に富む。

ロ、形體の分割 形體の分割にて、最も美感を起すものは、

左右の分割にては對稱にして、上下の分割にては黄金截なり。前者は空間を均齊に一と一との比に分かつものにして、其の區分の増すに従つて益々美感を加ふ。模様圖案等に多く用ひらる。後者は長方形の短邊と長邊との比が二邊の和と長邊との比に等しきものにして、二邊は大凡一と一、六の比を有す。

ハ、輪郭線 眼球の運動は直線に沿うて移動するよりも、多少彎曲せるものに沿ふとき容易にして快感を起し易し。神社・佛閣の建築等に曲線を利用し、裝飾に波狀線を用ふることも多きは、此の理に基づく。

ニ、類形の反復 類似したる形體の反復亦美感を起すに足る。五重の塔の如きは此の理を應用せるものなり。

ホ、律動 強弱相異なる音が規則的に繼起するときには自

變化と統一

ら一定の拍子を作り、快感を與ふ。音樂・舞蹈等の美感は之に基づくもの多し。

以上は初等美的感情の單純なる形式なるが、是等の形式相合して複雑なる美術を構成する場合に、最も必要なる法則を「變化中の統一」となす。個々の場合を検すれば、美的要件に合するものにて、其の結合單調なるときは、直に之に厭くを免れず。變化の中に統一を有すること人體の如きは、美の模範とも稱すべし。變化を與へんが爲に、時としては、故意に美の要件に合せざる分子を加ふることあり。音樂に於て不調和音を交へ、全體感情に興趣を保たしむる如きは、屢見する所なりとす。

兒童の美的感情

兒童の美的感情 實驗によるに諸種の色彩中、最も兒童の興味を引くものは、青にして、赤之に次ぎ、黄又之に次ぎ、黒

を好むもの殆ど是あるなし。されど年齒の進むに従ひ、縁を好むもの増加し、黄は次第に疎んぜらる。美的判断につきては、幼年兒童は作品の内容に注意すれども、其の形式に心を寄するもの甚だ少し、音楽につきては、律動先づ興味を引き、旋律に關する趣味は、比較的に後れて發達す。

第三章 情緒

第一節 情緒と其の種類

辱しめられて怒り、賞せられて喜び、友人の死に遇ひて悲しむが如く、自他の利害と相關係して起る強き感情を情緒Emotionといふ。即ち情緒とは或對象によりて生起せられたる複雑なる感情にして、身體諸機關に大なる影響を及ぼし、爲に多少精神の平衡を失せしむるを以て其の特徴となす。喜怒哀

情緒の性質

樂等の七情を始め、日常の用語にて感情と稱せらるゝものは概ね之に屬す。

試みに恐怖の情を内省し見よ。以上の特質は自ら明らかなるべし。即ち恐怖は常に何等かの對象に基因して起る。但し此の對象たるや必ずしも現實的なるを要せず、單に想像せるものにて可なり。幽靈を想像して恐るゝが如し、次ぎに恐怖の場合には、下に説明するが如き種々の身體的變化を起し、精神は一時平靜を失し、正しく思考し判断すること能はざるべし。感情の盲目的なりといはるゝは是による。

情緒の表出

情緒の表出 情緒の身體的表出は甚だ複雑多様にして、其の脈搏、呼吸等感應に表るゝものゝ外、尙左の諸種の現象を呈す。

一、涙腺、汗腺等の分泌機關及び内臓の諸機關の混亂を來す。例へば恐怖甚だしきに至るときは、皮膚は蒼白となり、唾腺の分泌作用停止して口中は乾燥し、身體は收縮して

戰慄を起し、毛髮立ち、冷汗流れ、時としては、下痢及び嘔氣を催すに至るが如き是なり。

二、全身の態度を變じ、手足の運動を起し、時としては感嘆の語を發す。忿怒に際して、思はず腕を扼し、拳を握り、攻撃の態度を執るが如し。

三、殊に著しく、顔面、就中目及び口に於ける種々の表出を伴なふ。

而して是等の生理的變化は更に有機感覺となりて情緒に反響し、益之を亢進せしむ。斯く情緒と其の身體的表出とは頗る密接の關係を有するを以て、或學者は此の身體的表出を以て却つて情緒の原因なりとし、悲しきが故に泣くにあらずして、泣くが故に悲しきなり。とまで説くに至れり。

最近生理學者の研究により、感情の興奮は身體にアドレナリンを生ぜ



(糖 砂) 味 甘



(酸 檸檬) 味 酸



(苔 蘆) 味 苦

(最近心理學二二八—二二九)



悦 喜



目 面 眞

しむることを確めたり。アドレナリンは血管を収縮し、心臓を興奮せしめ、胃液の分泌を阻止する等の作用を有す。上の如き情緒の表出は恐らく斯かる生理的變化に起因するものなるべし。

情緒の種類 情緒の種類は頗る多く、中には喜悅恐怖の如く、主として快不快の方向に屬するあり、憤怒悲哀の如く、主として興奮沈靜の方向に屬するあり、希望満足の如く、緊張弛緩の情の秀でたるあり、一々之を列擧するを得ず、左に其中教育上重要な關係を有するもの二三につきて簡單なる説明を加へんとす。

一、恐怖 恐怖は將に來らんとする危害を豫想して起る所の情緒なり。故に何等の危害を感じざる事物に對しては恐怖を起さざるべきも、時としては始めて見聞せる事物を本能的に恐るゝことあり、小兒が暗黒を恐れ、又は奇異なる

恐怖

動物を恐るゝが如きは是なり。

恐怖は自衛的の情緒なるを以て、其の正當なるものは固より必要なれども、小兒の本能的恐怖の中には不合理にして毫も恐るゝに足らざるものを恐るゝことあり。注意せざるべからず。恐怖は常に合理的なるを要す。

忿怒

二、忿怒 忿怒は不快感を與ふる事物を除去せんとする時に起る情緒にして、恐怖と等しく**自己の保存**を以て其の目的となす。されど忿怒の身體的表出は全く恐怖と異なり、恐怖の血管を收縮せしめ筋力を減少せしむるに反して、忿怒は血管を擴張し、且筋力を増加するの傾向を有す。忿怒の正當なるものは、往々勇氣・正義等の基となることあれども、其の性質反社會的のものなれば、努めて此の情に驅らるゝことなからんを要す。

自尊と卑下

三、自尊と卑下 自己の價值を確認したるときは**自尊**の情を生じ、價值少くして、他人に劣れるを覺るときは**卑下**の感を抱く。自己の價值を過大視する傲慢・自負の如きは固より不可なりと雖も、正當なる自尊心は勇氣・果斷・努力等の源泉となり、獨立心の基となるものなれば、自己の價值を正當に認めしむることは、教育上最も必要なりとす。卑下甚だしきに至るときは、卑屈となり、自暴自棄となり、終には決行の力に乏しく、向上の念なき人となるに至るべし。

四、同情 同情は他人の快苦を自己の快苦の如く感ずるの情にして、其の性質**社會的**なり。同情の最も單純なるものは、彼の幼兒の他人の泣くを見て共に泣き、他人の笑ふを見れば、即ち笑ふ如く、單に生理的に他の表情を模倣する有機的同情に過ぎざれども、次第に發達するに従ひ、快苦の原因

に對する明瞭なる觀念を得て、此の觀念に相當する感情を伴ふに至る。同情に反するものを反情といふ。反情は他人の苦を見て快を感じ、他人の快を聞きて却つて苦を感じる。反社會的の情なり。

第二節 氣色及び激情

氣色

比較的弱くして、且永續する情的偏向を氣色Moodといふ。氣色は、多く、強き情緒の餘波として生ずるものにして、例へば吉報を得たる後に遭遇する事物は、悉く愉快の面影を宿し、憤怒の後には、事々物々一として不平の種ならざるなきが如き是なり。之に反して情緒の發作極めて激しくして、繼續時間比較的短きときは、之を激情Passionと名づく。激情に於ては情緒の衝動的傾向特に勢力を占め、直に爆發して動作となる。

激情

ことあり。而して如何なる情緒も其の強度を増せば遂に激情に達するものにして、例へば嫌悪は其の度を増せば忿怒となり、忿怒更に亢進すれば變じて激怒となるに至るが如し。

第四章 情操

情操の意義

情緒は或事物に對して起る一時的の強き感情なり。されど若し同一事物に關する情緒が屢、反復せらるゝときは、終に之に關して固定せる感情の一傾向を生起するに至るべし。例へば一友に會して喜び、其の去るを聞きて憂へ、別れに臨みて悲しみ、再會して喜ぶ等、種々の情緒を経験するとき、は終に其の友に對する暖かき友情を生じ、又再三已を苦しめたる悪友に對しては自ら憎惡の念を醸し、事々物々反抗

的態度を取るに至る。斯く或對象を中心として組織せられたる感情の傾向を情操sentimentといひ、上に例示せる愛情と憎悪とは其の最も重要な形式なり。

情操は情緒の如く、個々の場合に應じて起る現實的感情にあらずして、寧ろ對象其の物について抱懷する感情の永續的傾向なり。兒童の母を見て喜ぶは情緒にして、母其のものに對する愛情は即ち情操なり。今兩者の關係を考ふるに、上に述べたる如く、情操は本來情緒より發達せるものなれども、他方に於て又諸種の情緒の原因をなすものにして、二者は互に原因・結果の關係を有す。例へば屢苦しめられたる者が爲に之に對して憎悪の念(情操)を抱き、又一度憎悪の情操成立するや、極めて些少の動機も、直に忿怒の情(情緒)を挑發するが如し。

情操の分類

情操は便宜上之を具體的情操と抽象的情操との二種に區分す。

甲、具體的情操 具體的事物に對する情操にして、更に之を(一)個人的のもの、及び(二)團體的のものに分かつ。自愛の念、父母教師に對する愛情の如きは前者の例にして、家族に對する愛、學校に對する愛の如きは後者に屬す。

乙、抽象的情操 抽象的觀念に對する情操にして、高等なる精神作用を待ちて始めて完全に發達す。通常之を分かつて知的情操・道德的情操・宗教的情操及び美的情操の四種となす。

知的情操

一、知的情操 眞理を愛し、虚偽を惡むの情を知的情操といふ。自己の理會し能はざる事物に接するとき一種の不快を感じ、努力して之を解決したるとき名狀すべからざる一

種の快感を覺ゆるは、是れ人情の自然にして、知を愛し無知を惡むは、人類固有の性能なり。されば知的情操は何人も之を有すれども、其の程度に至りては人々各差異あり。甚だしきは之が爲に全く寢食をも忘れ、真理の前には自己の身命を捧げて毫も悔いざるに至る。

道德的情操

二、**道德的情操** 善を愛し、不善を惡むの情を道德的情操といふ。此の情操は道德的行爲の原動力たるを以て、多くの情操中最も重要な地位を占め、社會生活上一日も缺くべからざる所のものなり。

道德的情操は**良心**の重要な一要素をなす。所謂良心とは吾人の全精神が道德的活動を營む時の意識状態に名づけたるものにして、其の中に**知情意**の三作用を含む。即ち善惡の何たるかを識別するは、其の知的作用にして、善を愛し

兒童の道德的理想

惡を憎み、善は之を嘉し、惡は之を悔ゆるは其の情的作用、善は之を爲し、惡は爲すべからずと刺激するの力は其の意的作用なり。良心の萌芽は人々の稟賦に潜在すれども、其の完全なる發達は教育と經驗との力に待たざるべからず。

兒童の道德的理想は年齢と共に發達す。幼兒にありては、理想の人を、父母、教師等家庭及び周圍に求むれども、年齢の長ずるに従ひ、歴史的人物又は現代に於ける著名の人物を理想となすに至る。又幼兒にありては、主として**財産、地位**等を標準となせども、知識の發達に伴ひ、次第に倫理的道德的價值を尊重す。理想として周圍の人を選ぶの度、女子は男子に比して遙に多し。

宗教的情操

三、**宗教的情操** 超人者を崇拜し、之に歸依するの情を宗教的情操といふ。今宗教的情操と他の情操とを比較して、其

美的情操

の關係を畧言すれば、此の情操は超人者を以て全智全能のものなりとなすの點に於ては知的情操に關係し、又之を完全無缺にして調和統一せるものなりとなすの點に於ては美的情操に、道德的理想として景仰するの點に於ては道德的情操に關係せり。就中道德的情操との關係は頗る緊密なるものにして、西洋諸國に於ては、専ら宗教の教授によりて、以て、道德的品性を陶冶せんとするものあり。

四、美的情操 美的情操は自然美及び人工美を觀賞する際起る情にして、全く利害の關係を離れ、無關心のなるを以て其の特徴となす。高尚なる美的作品に接し、醇乎たる忘我の状態に入るは是れ美的情操の極致にして、又人生至上至樂の境涯なり。美的情操は初等美的感情に對して、之を高等美的感情といひ、初等美的感情を其の要素となす外に、又知

美の種類

的、道德的及び宗教的分子をも含み、甚だ複雑なる情操なり。美には純粹の美即ち優美の外に、瀑布の奔下するを眺むるときに生ずる如き壯美、狂言を見るときに生ずる如き滑稽、悲劇を見るときに生ずる如き悲哀美等あり。狹義に美といへば單に優美を指し、廣義の場合には四者を併稱す。美的情操は、單に、高尚なる娛樂を供し、精神に慰安を與ふるのみならず、又人の氣品を高め、下等なる欲望に囚はるゝを防ぐ等道德と頗る密接の關係を有す。されど優美、悲哀美等は時としては、人をして文弱に流れしむるの弊なきにあらず。學校教育、就中男子の教育にありて、最も力を注ぐべきは、壯美の情の養成にありとす。

第五章 感情の教育

感情教育の
法

抑制と助長

感情は價值の意識なり。外界事物の價值如何を現示し、適當なる行爲を營ましむるは、凡て感情の力にして、若し世に感情なからんか、従つて幸福もなく、不幸もなく、希望もなく、活動もなく、人生は誠に乾燥無味にして何等の曲折なき沙漠の旅に等しかるべし。感情の人世に對する意義此の如く大なり。故を以て教育者は常に兒童の感情に注意し、不良過激なる感情は努めて之を抑制し、善良なる感情はなるべく之を助長し、兩者相待つて其の圓滿なる發展を期せざる可からず。感情の抑制及び助長に當りて取るべき方法の主要なるもの大凡左の如し。

一、感情の修練 助長すべき善良の感情は之に對する適當なる刺激を與へ、又抑制すべき惡感情は之が刺激を遠ざけ、次第に修練を加へ、情緒をして善良なる情操に發達せしむべし。

二、感情の相殺及び轉向

感情は、時としては、妄りに之を抑制せんとすれば却つて益、激烈に至ることあり。斯かる場合にありては、之に反對せる他の感情を誘起して、相互に相殺せしむるか、又は適當なる他の刺激によりて、兒童の注意を轉向せしむるに如くはなし。特に感情の變化し易き兒童に取りては、此の方法は甚だ有效なりとす。

三、模倣 感情は頗る暗示的の性質を有す。故に父母、教師等の表情は自ら兒童の模倣する所となり、此の表情は引いて其の情緒に影響し、之を支配するに至る。快活なる教師の下にある兒童は、陰鬱ならんと欲するも能はざるべし。

四、環境の整理 兒童の周圍を適當に整理し、常に自然美及び人工美による良好なる刺激を與へ、一方に於て劣等な

る感情を起すの機會なからしむると共に、他方に於て高尚なる感情を誘起するに力むべし。

五、知識の開發 感情と密接に相關係せる知識を開發し、感情の發現に當りて、充分其の正否を反省するの習慣を養ふべし。理性の力能く感情を指導し、理性と感情と相一致するに至るは、實に感情教育の極致なりとす。

第四篇 意的現象

第一章 運動及び意志

神経系統の機能が刺激を變じて運動となし、生物をして外界に順應せしむるに於ては已に之を述べたり。而して此の順應運動は外界の事情に従つて夫れ夫れ變化すべきものにして、一々列擧するを得ずと雖も、之を形式上より區分するときは、大凡左の三種となすことを得。

一、刺激と運動との間に、何等の意識作用の介在せざるものにして、反射運動及び自動運動は之に屬す。

二、刺激を知覺するや否や直に運動を起すものにして、渴する人が水を見れば思はず手を出だす如き是なり。此の種の運動にありては、刺激と運動との間に意識の存すること

運動の種類

あれども、それは感覺若しくは知覺の如く、極めて簡單なる作用にすぎず。本能的動作の如き之に屬す。

三、以上二種の運動にありては、他に之を妨ぐる事情なき限り刺激と運動との連絡は自然に行はれ、何等の停滯なきこと、宛も水の流るゝが如し。然るに運動の第三形式は之に異なり、二者の間に高等なる意識現象の介在するものにして、例へば衛生を重んずる人が、渴せる場合にも、尙水の有害なるべきを慮り、眼前の水をすてゝ湯を求むるが如し。日常の用語にては此の第三形式を特に行爲と稱して、他の運動と區別す。

されど以上三種の形式は、固より其の大綱につきて分類せるものにして、各形式の間には種々の過渡段階あり、最も單純なる運動より最も複雑なる行爲に至るまで系列を追

意志

うて相連續するものとす。

意志には廣狹二義ありて、廣義には意識の發動的方面を總稱す。故に廣義の意志運動は、上に述べたる第二形式及び第三形式を其の中に含み、範圍頗る廣けれども、狹義の意志運動は、單に其の第三形式を意味するを常とす。第一の形式は固より生理的のものにして、之を意識現象とは稱すべからざらんも、他の意志運動と頗る密接の關係を有するを以て、本篇に於ては併せて之を概説することゝなすべし。

第二章 反射運動及び本能

凡て動物は遺傳により、生後の學習を待たずして、能く日常生活に必要な種々の運動をなすことを得。此の種の生得的運動は、一方に於て動物を外界に順應せしむると共に、

反射運動

他方に於て又高等複雑なる意志の基礎をなすものにして、分かつて反射運動及び本能的動作の二種となす。

反射運動
Reflex Movement

反射運動は外來の刺激に對して機械的に反應し、しかも能く自己保存の目的に適合する運動にして、刺

刺激 ← 運動

激と運動との間に毫も意識作用の介在せざるこ
と、上に示すが如し。此の運動は已に述べたる如く、
全く遺傳的の者なれども、幼兒の生まるゝや、直に
凡ての反射運動を完備せるにあらずして、其の發
現には一定の次第あり。例へば「噎め」は早く生後數
日にして現るゝも、「瞬き」は生後第七週乃至十一週に於て始
めて現るゝが如し。

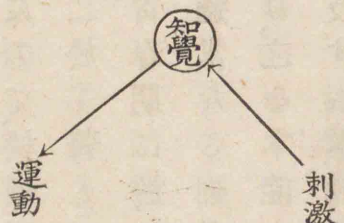
反射運動中「瞬き」の如く運動の結果を意識することを得
るものを「感覺的反射」といひ、「瞳の大いさの變化」の如く全く

本能の特質

無意識に終るものを「生理的反射」といふ。

本能
Instinct

とは目的を豫知する事なく、又之に對する何等の
教育をも受くることなくして、しかも能く目的に適合する
が如き運動を營む能力なり。本能に基づく所の運動は、之を



本能的動作といひ、其の性質甚だ能く反射運
動に類似し、兩者を分かち難き場合尠からず
と雖も、其の間亦重要な二三の區別あり、即
ち(一)反射運動は全く無意識的なれども、本能
的動作は意識的にして、例へば鳥類の穀物を
啄む時の如く刺激に對する知覺ありて然る
後運動に移行すること上に示すが如し。次に(二)反射運動
は動作甚だ簡單なれども、本能的動作は概して複雑にして
其の全活動中に簡單なる運動の一系列を含む。鳥の巢を作

本能の發現

る場合に於けるが如し。
 本能の發現には一定の時期あり。之を本能の**定期性**といふ。人類に於て最も早く現るゝは自己の保存に關する本能にして、模倣の本能、好奇の本能の如きは幼兒期及び少年期に於て著しく發達し、種屬の保存に關するものは最も遅く、青春期に於て始めて發現す。又本能は其の發動期に當りて適當なる刺激を缺くときは遂に發現せずして止むことあり、之を本能の**一時性**といふ。例へば雛が運動せる物體を追及する本能は生後四日以内に起るものなれども、若し此の期間其の眼を掩ひ置くときは、終に追及本能の發現を見ることなしといふ。

第三章 人類の本能

個體的本能

第一節 本能の種類

本能を其の目的より區分して、**個體的本能**、**種族的本能**、**社會的本能**及び**順應的本能**の四種となすことを得。

一、**個體的本能**(自己保存の本能) 個體の保存と幸福とを目的となすものにして、屢、他人の利益と衝突するの性質を有す。其の主なるものは(一)食物の攝取に關する**營養本能**、(二)自己の防衛に關する**爭鬪本能**、**逃匿本能**及び**排斥本能**、(三)自己を主張する**自己主張**の本能、(四)反社會的なる**侵略本能**、**人見知**の本能等なり。此の種の本能の情的方面は特に顯著にして、忿怒、恐怖、嫌惡等の情緒は(二)に關し、自尊、倨傲、卑下等の情は(三)に、輕侮、怨恨、羞恥等の情は(四)に關係す。

本能と情緒とは極めて密接の關係を有し、凡ての本能は其の情緒的方

面を有し、反對に凡ての情緒は本能的方面を有す。故に此の二者は同一事象の二方面に過ぎざる者にして、意識として内面より見れば情緒行動として外部より見れば本能なり、と説くものなり。例へば恐怖は情緒なると共に又本能の中に數へらるゝが如し。

種族的本能

二、種族的本能 種族の保存を目的となすものにして、前に述べたる營養本能及び防衛本能に次ぎて最も強烈なるものなり。兩性相愛の性的本能、及び兒子の養育に關する保育本能は之に屬し、其の情的方面としては戀愛・嫉妬・親子の愛情等あり。

社會的本能

三、社會的本能(團體的本能) 社會の維持・發達に必要なる本能にして、道德の基礎をなすものなり。群集本能・共働本能・愛他本能等は其の主なるものにして、同情・友情・獻身等の感情的方面を有す。

順應的本能

四、順應的本能(發達的本能) 幼稚なる生物をして外界に順應することを學ばしむる本能にして、心身發達の基礎とも稱すべきものなれば、兒童教育に關して、特に注意を拂はんことを要す。其の種類甚だ多し。

イ、穿鑿本能 兒童は著しく好奇心に富み、新しき事物に遇へば、何の目的もなく、唯、物珍らしさに、一々之を穿鑿せんとす。幼兒の好んで玩具及び器物を破壊するは多くは穿鑿本能の致す所にして、之を善導すれば變じて高尚なる知識欲となすことを得。

ロ、構成本能 多くの材料を集めて一の事物を構成する本能にして、兒童の手工に對して有する興味は主として此の本能の發現なり。

ハ、蒐集本能 草木・昆蟲等を採集し、玩具・繪葉書・切手等を

模倣と反復

貯藏するが如く、諸種の事物を蒐集する本能を蒐集本能といふ。此の本能は之を利用するときは、事物の性質を比較考察するの習慣を得しめ、理科・地理・歴史等の断片的知識を興ふる等、教育上種々の効果を擧ぐることを得べし。

二、模倣 順應的本能中、最も重要なものにして、兒童若し他人の運動を見るときは、其の目的及び意義につきて何等の顧慮する所なく、單に運動の暗示によりて、直に之を模倣し、一度模倣し得たるものは自發的に之を反復するを常とす。始めて「トト」なる言語を發音し得たる兒童が終日之を反復して尙飽かざる如きは往々見る所なり。模倣の傾向は三四歳の頃に於て特に著しく、之によりて兒童は普通の言語を習得し、普通の動作をなし得るに至る。數千年の永き發達を有する言語を僅々數年間に學び得るの一事に照らし

遊戯

ても、順應上、模倣が如何に重大なる任務を有するかを察知するを得べし。

模倣に二種あり。一は模倣せんとの意識なくして、自然に起るものにして、之を**暗示的模倣**又は**反射的模倣**といひ、他は意識的に完全に模倣せんとするものにして、**意識的模倣**と稱せらる。幼兒にありては暗示的模倣先づ現れ、然る後徐徐に意識的模倣に及ぶ。

ホ、遊戯 遊戯は自由にして且愉快なる活動にして、毫も結果の如何を顧みることなく、唯活動の爲に活動するを以て其の特色となす。

遊戯の本質 遊戯の本質につき、學者の間に異見あり。左に其の中代表的ものを擧ぐべし。
一、運動中樞に於ける過剰なる神經勢力が、自ら溢れて、遊戯となるとなす

遊戯の發達

ものにして、之を勢力過剰説といふ。
 二、我等の祖先が過去に於て營める運動を、總括的に反復するもの、是れ遊戯なりとなすものにして、兒童の石投げは原始民族の狙撃を、相撲は其の個人的格闘を反復すとすが如し、之を反復説といふ。
 三、遊戯に於ける活動と將來の生活活動との間に密接の關係を認め遊戯を以て實際生活の準備演習となす者にして、之れを準備説といふ。子猫が毯を見れば直に躍りつき、女兒の人形遊びに耽る如きは準備説を助くるに足る。

遊戯の發達 兒童の遊戯は其の始め、事物を弄ぶ**感覺的**遊戯に起り、次いで歩行運動の自由なるに及べば、主として四肢の筋肉を活動せしむる**運動遊戯**に移り、三歳以後に於て、之に加ふるに、種々の**想像的遊戯**を以てす。想像の世界は實に兒童特有の寶庫にして、彼等に取りては、一本の竹も生きたる馬となり、小さき枕も生命ある人形たることを得。兒

遊戯と他の本能との關係

童稍長じて、八九歳以後に至れば、想像は次第に合理的となり、之と共に思考の活動を要する**智的遊戯**に興味を有するに至る。されど將基かるたの如き高尚なる智的遊戯は十一歳以後にあらざれば現れず。角力競走の如き**競争遊戯**亦八九歳以後著しく發現し、其の始めは個人的競争たるに止まれども、十二三歳以後次第に團體的となり、ベースボール、フットボール等に興味を有し、之と共に共働的犧牲的精神の徐々に修練せらるるを見る。之を要するに幼稚園時代に於ては運動遊戯、及び想像遊戯、小學校の始期にありては個人的競争遊戯を主とし、其の終期に至るに従ひ、團體的競争遊戯となり、之と共に遊戯の種類は漸を追うて減少し、終に一二の團體遊戯にのみ熱中するに至る。
 遊戯の本能は上に列舉せる穿鑿、構成、模倣等の諸本能と

密接に相關係す例へば男子の軍隊的遊戯、女子の家事的遊戯が模倣性に基つき、手工的遊戯に於て穿鑿構成等の諸本能の共働するが如く、諸種の本能は遊戯の中に融合して以て、身體及び精神の發達を助く。遊戯は實に兒童の生活の全部にして、彼等は飲食及び睡眠の外は、常に全力を用ひて嬉戲す。されど兒童稍成長して學校生活に入るに及ぶや、課業と遊戯とは相分離し、遊戯は茲に一の新なる意義を加へ來り、課業の束縛と、之より起る疲勞に對して、恢復と自由と慰安を與ふる者となるに至る。されば小學校に於ける遊戯は常に之を二方面より考察し、一方には、課業の壓迫より離脱して、自由の天地を樂ましむると共に、他方に於ては、之を以て將來生活の準備たらしむるの工夫を講ぜざるべからず。

第二節 本能の變化と教育

本能の變化

本能は遺傳的傾向なれども、必ずしも、固定せるものにあらず、境遇に應じて其の發現を變化し得るの性質を有す。例へば啄むことは鳥の本能なれども、經驗の結果惡臭ある物を啄むことを禁止し、人見知り^レは幼兒の通有性なれども、多數の人に接見するに従ひ、次第に其の度を減ずるが如し。殊に人類の本能にありては、遺傳として享受するものは、多くは、其の大體の輪郭に止まり、一々の内容は生後の經驗によりて決定せらるゝを以て、之を彼の比較的固定せる形式を有する動物の本能に比すれば、其の變化甚だ容易なり。人類の本能が其の數に於て、動物より遙に少きかの觀を呈するは、此の變化性の著しきが爲にして、其の實決して僅少なる

本能と教育

にはあらず。

人は本能の力によりて其の生活を開始す。されど生涯本能以上に一步を出づること能はずとせんか、下等動物と何等の選ぶ所なく、進歩發展は得て望むべからず。人類の特徴は實に理想によりて本能を統御し、新しき境遇に應じて種種に之を變化するにあり。本能の變化は或は經驗の結果により、或は模倣の力により、或は智力の發達に伴ひ、自然に行はるゝものなれども、又不良なる本能を改善する教育的手段なきにあらず。其中重なるもの二三を左に列舉せん。

一、不良なる本能的動作に結合するに不愉快なる感情を以てすること。例へば蒐集は兒童の本能なり、されど他人の所有物を望むが如き極端なる蒐集欲は之を嚴禁せざるべからず。斯かる場合には課罰の手段によりて、本能の不良

なる發現に結合するに、恐怖の情を以てするを甚だ有效なりとす。

二、不良なる本能的動作を反對の本能によりて抑制すること。鬪争本能を和ぐるに社交本能を以てし、人見知りの本能を制するに好奇の本能を以てする如く、相反對せる本能をして相互に抑制せしむるは、亦本能の教育上甚だ有力なる手段なり。

三、一の本能的動作に伴なふ感情を他の動作に移入すること。例へば争鬪本能に伴なふ快感を、團體的なる正義の争に移入し、正義の爲に戦ふの快を味ははしむるが如し、彼の少年義勇團の如きは、粗野なる本能に伴なふ感情を高尚なる作業に移入して、本能の醇化を計る一大計畫に外ならず。

衝動と他の意志活動

第四章 衝動及び欲望

衝動 渴する人、水を見れば、思はず手を出して之を飲まんとし、小兒に示すに玩具を以てすれば、前後の思慮なく之を攫まんとす。此の如く刺激の現るゝと共に直に外部に向つて運動を起さんとする意識の傾向を**衝動**といふ。即ち衝動による動作は思慮の結果として起る動作と相對するものにして、内部的壓迫により、理非如何を顧みずして發動するを其の特徴となす。今之を他の運動と比較して其の異同を明らかにすれば左の如し。

一、衝動的動作は刺激の知覺と之に對する感情とを有する一の意識的活動にして、運動の第二形式に屬す(第四篇第一章)。反射運動の如く無意識的生理的のものにあらず。

二、されど何等の思慮を用ひず、殆ど盲目的に發現する點に於て運動の第三形式に異なり。小兒及び下等動物の動作は多く之に屬す。若し思慮を用ひ、衝動相互の關係を考へ、其の間に系統を附するに至るときは、衝動は進んで、次章に説く所の執意となる。

三、衝動的動作と本能的動作とは其の形式全く同一にして、心理的に觀察すれば、此の二者は相同じ。故に「本能的」衝動的の二語は同一の意義に用ひらるゝこと多し。されど本能的動作は刺激と運動との連絡先天的に一定すれども、衝動は必ずしも然らず、後者は前者に比して其の範圍一層廣しとす。

欲望 多くの場合に於て、衝動は直に動作となりて外部に現れんとするものなれども、若し他の事情のあるありて、

欲望

多少にても其の實現を妨げらるゝときは、茲に**欲望**を生ず。即ち欲望は自己に快感を與ふる事物を得んとして、未だ之を得ざる不安の状態にして、現在の不満足なる我と、其の事物を得たる未來の満足なる我との對照よりして起る所のものなり。欲望の習慣となりて固定せるものを**偏向**といひ、偏向の更に進みて殆ど第二の天性となりしものを**性癖**といふ。飲酒の欲、喫煙の欲の如きは屢、**性癖**となり、教育の力も復た如何ともする能はざるに至ることあり。

第五章 執意

執意

執意 Volition は又狹義に意志と稱せらるゝものにして、凡ての意志作用中、最も高等なるものなり。左に之を其の要素に分析して、簡單なる説明を加ふべし。

動機

動機 凡そ有意的動作には必ず目的の表象あり。動機とは即ち此の目的の表象に感情の加はりたるものにして、目的の表象を其の靜的要素となし、之に伴なふ感情を動的要素となす。而して執意とは通常二個以上の動機共存して互に相争ひ、思慮選擇決定の後初めて動作に移るものにして、甚だ複雑なる現象なり。

思慮・選擇及び決定

思慮選擇及び決定 讀書と遊戯との二動機意識に現れて互に競争するとき、書齋にありて書を讀まんか、室外に出て、遊戯をなさんかと思ひ惑ふは**思慮**なり。思慮は通常不安の情を伴なふ。斯くて吾人の精神が、或は其の一方に傾き、或は他方に向ひて、暫時動搖したる後、何れかの一方を選ぶは**選擇**にして、選擇したるものを實現せんとするは**決定**なり。決定は安固の情(決定感情)を伴なふ。若し思慮長きに互る

外部意志と内部意志

ときは選擇の過程明瞭に意識せられ、思慮短きときは決定却つて明らかに現る。決定の後には動作あり。動作の後には満足の感情を伴ふべし。

執意の二種 されど執意は常に身體の運動となりて外部に表るゝものにあらず。時としては内部の激情を抑へ、其の動作に移るを禁ずることあり。之を**内部意志**又は消極的意志と言ひ、外部的動作を伴ふ**外部意志**と區別す。

道德と不道德

道德的努力

執意に於て二個以上の動機の競争あることは已に之を見たり。而して是等の動機は、悉く同一の價値を有するものにあらず。之を己が理想に照らし、己が境遇に應じて判斷するときは、其の一は比較的高等にして、他は比較的劣等に、一は理想に合すれども、他は覺官的衝動的なるを發見すべし。而して是等二種の動機中下等なる覺官的動

機は人の本性に根ざすこと甚だ深く、吾人を誘引するの力亦甚だ大なるものなれば、苟も道德的行爲を遂行せんとするものは、必ずや大なる努力を以て、理想的動機に注意し、飽くまで之を固執し、次第に其の勢力を高めざる可からず。努力充分にして理想的動機の力と努力との合計が、覺官的衝動的動機の力より大なるに至るときは、茲に理想的動機の勝利を宣することを得て、行爲は道德的なれども、努力不充分にして下等なる動機に就くときは、其の結果不道德に陥ること多し。是れゼームスが道德的行爲を以て、最大抵抗の方向に進む所の行動なり。と言へる所以にして、又古人が禁欲説を唱へて下等なる欲望を絶滅せんとせし所以なり。されど極端なる禁欲説は是れ亦一方に偏したるものにして、如何なる動機もそれ自身全く不必要なるものあることな

意志の自由

し要は下等なる動機を高等なる動機に従屬せしめ、凡ての動機に相當の地位を與ふるにあり。

意志の自由 動機的選擇に當りて下等なる動機と高等なる動機と其の何れを選ぶも全く自由なりと感じ、決して他より強迫せらるゝことなし、是を**意志の自由**といふ。斯く選擇も決定も自ら之を爲すを以て、吾人は自己の行爲に對して責任を有し、善惡共に自ら其の責に任せざるべからず。人として意志の自由を感じざるものも、將責任の感を有せざるものもあることなし。若し意志の自由なく、責任の感なくんば道德的事實亦存在することなきに至らん。

品性

品性 意志の習慣性を**品性**又は**性格**といふ。即ち品性とは意志活動を反復せるの結果、強固なる意志の習慣を形成せるの状態にして、之を過去の行爲の結果と見るを得べし。

されど、一度品性の成立するや、其の人の將來の行爲は、一に是によりて規定せらるゝものにして、品性は之を他の方面より見るときは、實に行爲の原因を爲し、行爲を一定の主義の下に統一する所のものなり。晨起の習慣を有する人が晏起を以て却つて苦痛と感じ、慈善家が貪慾の行爲を敢へてする能はざるは、此の理に基づく。要するに行爲の結果は品性となり、品性は更に行爲の原因をなし、相互に因果の關係を有す。

第六章 順應及び習慣

第一節 順應の學習

兒童の生まるゝや、其の遺傳的傾向によりて、或度の順應をなし得ることは已に之を述べたり。されど兒童の境遇は

順應の學習

常に變化し、四圍の刺激は日に増大するを以て、生得的活動のみにては到底完全に此の新境遇に應ずること能はず、何等かの方法を以て本能を變化し、新しき順應をなすの道を學ばざるべからず。吾人は今兒童が如何にして是等の新境遇に順應し、及びそれが如何にして固定するに至るかにつきて大體の説明を加へんとす。

先づ順應の學習につきて考ふるに、其の方法は境遇の如何によりて種々に變化すべきも、大凡之を左の三種に概括することを得。

試行と錯誤

一、試行錯誤法 甲の方法を用ひて失敗するときは乙の方法に依り、尙失敗するときは更に他の手段に訴へ、手當り次第に方法を變化し、終に偶然の成功に逢著するものを試行錯誤法といふ。こは動物及び幼兒に多く見る所にして、概

して無計畫なれども、時としては意識的に之に依據することあり。數學の問題を解くに當り、數個の可能なる證明法を考へ、其の中何れが適當なる解釋なるかを實地に檢するが如き、亦一種の試行錯誤法と見るを得べし。

迂曲曲折せる迷路を有する大なる箱を作り、其の一隅に食物を入れ置き、飢ゑたる鼠をして此の食物を望見せしめて、動作如何を観察するに、其の始め鼠は或は一の迷路に入りて退却し、或は他の袋路に入りて失望し、數回失敗を重ねたる後、漸くにして食物に達す。斯くて經驗を重ねるに従ひ、失敗の數は次第に減じ、終には何等の過誤なく直に食物に達するを得べし。

幼兒が始めて事物を掌握することを學ぶ過程も、略ぼ之に等しく、其の始めに於ては、運動は亂射的にして、或は激しく手を動かす、頭を振り、或は掌を開閉し、時としては足に至るまで動搖せしめ、試行と錯誤とを重ねたる後、漸くにして之を捉ふ。されど一旦之を掌握するや、茲に成功に對する

模倣

快感を覚え、此の成功に關係ある手の運動は他の運動に比して深く腦裏に刻まれ、掌握其の度を重ぬるに従ひ、過剰運動は次第に減少し、終に何の苦もなく之を握り得るに至る。

二、模倣

試行錯誤法は自ら新なる經驗を築くものにして、勞力に於て將た時間に於て頗る不經濟的なり。然るに模倣は同じ境遇にある他人の順應を其の儘採用するものにして、一舉して完全なる効果を收むることを得、故を以て兒童の順應は大部分模倣によりて行はれ、純粹なる試行錯誤法に依る事、之を模倣力に乏しき動物に比すれば遙に少し。

舊經驗の利用

三、舊經驗の利用 眼前の事情に多少類似せる舊經驗を記憶の中より喚起し、之を應用して以て新しき境遇に順應するの道を講ずるものにして、知力の進みたる後に於て適用せらるゝ方法なりとす。

習慣

第二節 習慣

新に學び得たる運動は、之を反復するときは、生理的には神經傳達路の固定を來し、心理的には運動に伴なふ意識作用を減少し、終に習慣となり、機械的に之を遂行し得るに至るべし。習慣による動作は運動の第二形式に屬し(第四章)、習熟の度によりては、時に第一形式にすら近づくことあり。之を音樂家に見よ、目に樂譜を見、口に歌詞を唱へながら、手は自ら、鍵盤の上を走り、刺激と運動との間に些の間隙あることなし。習慣は、之を草茫々たる廣野の踏むに従ひて一條の徑路を開くにも譬へつべし。

習慣と本能との異同

習慣と本能 習慣的動作は感覺と運動と緊密に連絡し、及び意識の指導を要せざる點に於て、本能的動作に類似し、

時としては其の何れなるかを區別し難き場合あり。されど兩者は其の起源に於て異なり、本能的動作は先天的にして、種族に共通なれども、習慣は後天的にして生後の經驗に基づくを以て、人によりて差異あるを免れず。習慣による運動は或は之を自動運動といふ。

習慣と本能とは尙他に類似點あり。本能的動作は多く快感を伴ひ、若し其の運動の阻害せらるゝときは強き不快を感じるものなるが、自動運動亦是に等しく、運動の自動的となるに従ひ、次第に快感を覺ゆ。テニスを學ぶものを見よ、其の始めは球の方向思ふに任せず、意氣屢、沮喪するも、技術の進むと共に快感を感じ、終には之が爲に正規の課業をも放棄せんとす。寒中の冷水浴すら一味の愉快と満足とを與ふるに至るは、之を實行せるものゝ等しく經驗する所なり。

自動運動なる語は、又呼吸運動、消化運動、循環運動の如く、身體内部の刺激によりて無意識に起る運動を指すことあり。此の意味に於ける自動運

動と反射運動との差は唯運動を惹起する刺激が身體の内部にあると外部にあるとの別に過ぎず。或は之を第一次自動運動と稱し、習慣による自動運動を第二次自動運動と呼ぶことあり。

習慣の價值

習慣の效果 習慣は(一)動作をして正確、迅速、一樣ならし

め、(二)動作に伴なふ疲労を減ずるのみならず、(三)其の始め意識的に努力を要せしものをも、全く機械的に變じ、意識をして更に進みて新しき活動を開始するの餘地を生ぜしめ、人をして絶えず向上發展せしむ。若し世に習慣なからんか、吾人の精神は常に日常の些事にのみ齷齪たるの外なく、復た何等の進歩をも見ることも能はざるべし。

習慣形成の時期

習慣形成の時期 多くの習慣は個人が社會に順應するの必要よりして生ずるものなるを以て、之が形成には自ら一定の順序及び時期あり。就中最も大切なるは兒童期より

青年期に至る期間にして、衣服の着方、言葉遣ひ、身振り等の坐作進退に關するもの、及び道德的、宗教的、習慣等は何れも二十歳頃迄に殆ど完成せらる。されば此の時期を失ふときは、語學の研究の如きも、正しき發音を會得すること頗る難しとす。又此の時期を下等社會に過こせしものは、其の後如何に富貴の生活を營むとも尙野卑なる面影の争ふべからざるものあるを見るべし。二十歳以後は所謂職業的習慣の成立する時期にして、これは多く三十歳前後に及びて確立す。故に此の時代に達すれば、一見して大凡如何なる職業に従事する人なるかを知るを得べし。

意志の進歩と退歩

意志の進歩と退歩 衝動は動機單一にして、思慮なく發動するものなれども、經驗の加はると共に二個以上の動機相互の間に競争を起し、衝動は進んで執意に發達すべし。(四第)

四第之を意志の進歩的發達といふ。然るに一定の行動を反復するに従ひ、行爲に伴なふ意識作用減少するを以て、始め



思慮を用ひし者も、後には衝動的となり、終に機械化して、自動運動若しくは反射運動となるに至る。之を意志の退化的發達といふ。即ち衝動は之を意志の原始的形式と見るを得べく、之より進歩して複雑となり、退歩して單純となり、意志の諸形式を現出すること上圖に示す所の如し。

第七章 意志の教育

意育の必要

教育の目的は圓滿なる人、換言すれば身體及び精神の諸作用の最も完全に發達せる人を作るにあり。されど是等の諸作用中、人の人たる所以のもの、即ち人格の核子をなすも

知見の養成

のは、實に意志活動にして、思想も感情も共に意志を實現する要素として、意志活動中に織り込まるべきを以て、具體的なる精神活動はこれを意志の體系なりといふも不可なし。加ふるに現今社會の趨勢は從來に比して、益意志の強固なる人を要求するものあるが如し。之を意志の人格に於ける位置より見るも、將社會の要求より考ふるも、意志の教育は實に教育の中心問題をなすものなり。左に意志教育上特に注意すべき條項を略述せんとす。

一、行爲の善惡を判別するの知見を養ひ、行爲に先だちて審に思慮するの習慣を附與し、同時に善は之を好み、惡は之を惡むに至らしめざるべからず。之が爲には修身教授を始め、命令・訓諭等は何れも有力なる手段なれども、其の最も有效にして且確實なるは、生きたる模範なりとす。示範は兒童

身體の鍛鍊

をして善行の何たるかを直觀せしむると共に、之に對する感情を起さしめ、無意識の間に善惡如何を體得せしむるの力を有す。

二、障礙に遇ふも容易に屈することなく、耐久持續、外に向つて能く奮闘し、内に向つて能く節制し、努力的活動を以て却つて愉快なりと感ずるに至らしめざるべからず。是が爲には平素より身體を鍛鍊し、其の活力を充分にし、元氣を旺盛ならしむること最も必要なり。是れ體育と意育との密接なる關係を有する所以にして、彼の英國の教育が、古來體育を以て品性陶冶の主要なる方便となし、其の國技たるフットボールによりて、堅實剛健なる國士を養成し來れるの理實に此に存す。

自信の念

三、成功に對する信念を與へ、強き自信を以て、事に當りし

めざるべからず。兒童の程度に合する適當の作業を與へ、自己の力によりて之を成さしめ、成功に對する愉快を味はしむるときは、兒童は次第に自己の力を認め、自信の念を起すに至る。己が力に應ぜざる作業は屢、失敗を招き、意志頓挫の基となることあり。特に兒童は暗示感性に富み、長者の一言一行は直に其の意志に作用し、之を左右するの力を有するものなれば、兒童の成功を適當に承認し、之を獎勵する事を怠るべからず。

欲望の統制

四、不良なる欲望の起るときは、妄りに之を抑壓することなく、他の高尚なる欲望を以て之に代らしむることを要す。是れ猶感情教育に於て其の轉向及び相殺を必要となせるが如し。

習慣の養成

五、品性は意志の習慣性なり。故に道德的品性を作らんと

せば、先づ善良なる習慣を養成すること必要なり。習慣の養成に關して注意すべき要件は大凡次ぎの如し。

- イ、新しき習慣を作り、又は古き習慣を破らんとするには、極めて鞏固なる決心を以て之に着手せざるべからず。
- ロ、習慣の固定するに至るまで、決して例外を許すべからず。こは舊き悪習慣を打破せんとする場合に特に必要なりとす。禁煙の習慣を作らんとする人が、僅かに一回の例外を許したるがため、再び喫煙家に返る如きは、其の例に乏しからず。
- ハ、一時に多くの習慣を作らんとすべからず。一時に一事。とは習慣養成上守るべき原則なりとす。
- ニ、苟も習慣たらしめんとする行爲を實行する機會あらば、直に之を捉へ、決して逸失せしむべからず。一機會を

失ふは屢之を失ふの端緒なり。

第五篇 動作及び特殊機能

第一章 動作成立の條件

生理的條件

生理的條件

動作とは、意志が外部意志として發動したる身體の筋肉的運動の形式なり。従つて動作の現はるゝ状態は身體の形態的條件により制限せられ、筋肉運動の性質により規定せられ、運動の禁止及び解發は神經中樞の機能によつて支配せらる。例へば文字を書くに、執筆の方法は五指の形態によりて制限せられ、運筆の運動は手腕の形態及び筋肉の運動に規定せられ、筆力の變化、筆意の好悪は種々なる神經中樞の禁止及び解發の關係によつて支配せらるるが如し。故に此等三種の生理學的條件に障礙を生ずる場合には動作は不完全となるに至る。

心理的條件

心理的條件 動作に於ける心理的條件は、動作をなさんとする意志活動に於ける知覺表象、即ち運動感覺の變化に伴なふ觸覺、視覺、聽覺の時間及び空間的關係による運動の知覺と之に伴なふ感情となり。動作に於ける運動の知覺は、主として視覺によりて動作の方向及び距離の變化を知り、聽覺により時間の長短を知り、觸覺及び運動感覺は是等の中間にありて、空間と時間との知覺を調節す。

第二章 動作發現の形式

第一節 動作發動の形式

動作が上述の如き條件によりて外面的に現はるゝ場合には、之を力學的に、運動の方向・速度・力量の三方面より觀察することを得べし。方向の變化は空間の知覺によりて規定

運動の方向・速度及び力量

せられ、速度の變化は時間の知覺によりて規定され、力量は觸覺及び運動感覺に於ける強度の變化によりて知覺せらる。然るに既に述べたるが如く、時間・空間及び運動の知覺には錯覺を生じ、感覺の強度には最少可知差異の限度あるを以て、動作の方向・速度・力量の變化に對して、正當の判斷をなし、適當に之を統制すること困難なり。故に動作に於ける主觀的判斷と客觀的觀察とは必ずしも一致するものにあらず。また速度及び力量は、其の多大値を出すべき能力に一定の限度と、個人的相異あり。

第二節 動作表現の形式

動作は一定の目的を以て表現せらる。之を動作の機能といふ。今教育上特に重要な動作について其の機能の一般

讀書

を説明すべし。

一、讀書 讀書には黙讀と音讀とあり。前者は文字の認識によりて其の意味を理解し、後者は更に之を發音して理解す。されど黙讀と雖も全然發音的要素なくして行はるゝものにあらず、聽覺的要素と運動的要素との結合よりなる内讀の伴なふを常とす。一般に言語の理解には内讀を伴なふ者なり。實驗によれば音讀は黙讀より六割六分遅く、極めて速に讀むも尙五割六分遅し。然れども兒童は音讀にあらずれば讀書困難なれば最初は音讀をなし、漸次に黙讀の習慣を養はざるべからず。讀書能力の測定は讀書の速度と確度とにより、確度は記憶力と理解力とによりて之を測る。又讀書の速度は文字の大小及び配列の性質による眼球運動の難易に影響せらる。

書寫

二、書寫 書寫には自由書寫と書取と臨寫とあり。書寫の動作を喚發する條件は、自由書寫にありては言語の再生に於ける文字の視覺心像と發音の聽覺心像との聯合、書取にありては聽覺と文字の視覺心像との聯合、臨寫にありては視覺心像なり。書寫の發達を見るに、最初手指は衝動的に發動し、何等知覺によつて統制せらるゝことなきも、意志の發達に應じ、主として視覺心像之を統制し、動作の反復により、注意は漸次運動感覺に向けらる。進んで習慣となるに至らば、主として運動感覺によりて行はれ、殆んど動作を發せしむる表象的條件を意識せざるに至り、時としては自動書記の現象を現はすに至る。但手指は左右によりて其の運動の性質相反するが故に、左手にて書寫する時は左文字を書くこと容易なり。未だ充分に視覺的統制を受けざる兒童にあ

音樂

りては、斯かる運動の性質に規定されて、書寫の方向及び形狀を誤ることあり。試みに鏡面に映じたる文字を寫し見よ、其の運動の困難なるを感ずべし。又運動感覺は、主として、力量變化の知覺により、律動的に時間の變化を知らしむるものなるを以て、書方には一定の律動を生じ、若し筋肉運動の調節よく行はるゝ時は、書方は律動的となり、筆力及び筆勢は形と調和して美しき書を表現することを得べし。一般に書は發達するに従ひ、敏活となり、律動的となり、指壓及び筆壓の力量は減じ、形は調和するに至る。タイプライター・圖畫・手工等の機能は大凡斯かる性質を有す。

三、音樂 音樂は唱歌と演奏とに分かたれ、前者は音讀に類し、後者は書寫に比すべき動作なり。但し此の場合には機能の性質、知的作業にあらずして藝術的作業なるが故に動

作の條件は思考に存せずして、感情に存す従つて動作の性質は主として感情の變化に規定せられざるべからず。音樂にては動作によりて表現せらるゝ表象は聽覺なるが故に、時間の知覺が動作に關係し、感情の變化は主として律動的運動に於て表はる。音樂と舞踊とが、密接なる關係を有するは此がためなり。繪畫及び彫刻は感情を視覺的に表現せる者に外ならず。

第三章 動作を變化せしむる條件

第一節 練習

動作を變化せしむる條件は之を動作の繼續によりて生ずる内部的條件と、時日氣候・藥品等の影響による外部的條件とに分つことを得。内部的條件は更に之を動作に積極的

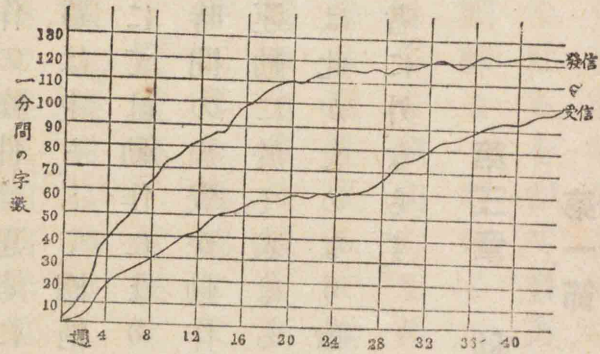
動作を變化せしむる條件

練習の性質

影響を及ぼす者と、消極的影響を及ぼす者とに分つ。前者は練習と休養にして、後者は疲勞なり。但し休養は主として疲勞を恢復せしめ、消極的影響を除く條件なり。

練習とは習慣を形成する動作の方法なり。例へば計算は數概念の獲得の爲なるも、之を獲得するには數を發音し、或は之を書寫して學び、且之を練習するを要するが如し。練習によりて習慣の形成せらるゝ道程を、時間と仕事の分量との關係によりて曲線に表はしたる者を練習曲線といふ。練習曲線は時間を標準として表はせば、反復を重ねるに従ひて一定の時間内になし

電信の發信及び受信の練習に於ける練習曲線



練習の條件

得る仕事の分量は漸時増加し、仕事の分量を標準として表はせば、一定の仕事に要する時間は漸時短縮せらる。されど、其の進歩の程度は最初は速なるも、漸時其の度を減じ、終には進歩を見ざるに至る。之を練習の極限といふ。此の極限は、休養の後、或は練習の條件を變化して、更に練習を繼續するときは、再び練習の効果を表はすことあり。斯る場合、以前の極限即ち一時進歩の停滞せる時期の曲線を高原といふことあり。

練習の効果を大ならしむる積極的條件は、興味と努力とにして、消極的條件は、休養と繼續となり、興味は努力を起さしむる動機となるものにして、練習の効果を自覺することによりて現在の状態に満足せず、更に之以上の効果を得んとする希望によりて、益々努力し、愉快に仕事をなさしむ故

練習の効果

に興味を起さしむるには、現在に満足せしめざるやう、常に刺激を新たににして、好奇心をそゝり、賞賛を與へて自信力を得せしめ、時としては、批難によりて憤激せしむるなど、種々なる方面より刺激を與ふる必要あり。練習を休みなく持續するときは疲勞を生ずるが故に、適當の時間休養せしめて、疲勞を恢復せしめざるべからざるも、休息の時間餘りに長きに失し、或は練習を廢する時は、却つて其の効果をば防失する恐あるが故に、練習は一定の休息時間を置きて繼續せざるべからず。

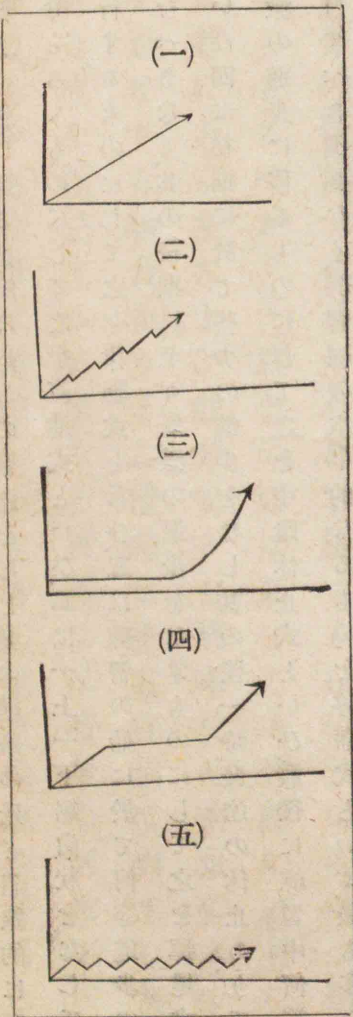
練習は新らしき經驗の結合により習慣を成立せしむる者なるが故に、一度成立せる習慣を破るには、之を形成するに要したる時間より大なる時間を費さざるべからず。是れ習慣は第二の天性にして容易に變化し難しと云はるゝ所

練習發達の形式

式練習發達の型
 一 直進式
 二 律動式
 三 掉尾式
 四 中段休止式
 五 停滯式
 (松本博士)

以なり。之に反して一定の習慣は、之に類似の性質を有する仕事の練習に對しては、其の効果を容易ならしむる條件となる。例へば右手の練習は左手に於ける同じ仕事を容易ならしむるが如し。斯く一部分に於ける練習効果が他の部分に波及することを**交叉教育**といふ。

練習を比較的長く繼續して行ふ時は、練習の效果に種々なる條件相影響して、種々なる發達の徑路を示す。其の型式に大凡五種あり。一は練習の



始より終に至る迄、略ぼ均等の發達をなし、其の進路の殆ど斜線的に表示せらるゝものにして、之を直進式といひ、二は一上一下鋸齒狀をなして進行するものにして、之を律動式と言ひ、三は練習の始に於て何等進歩の認めべきなく、其の後期に至り、急激の進歩をなすものにして、之を掉尾式といひ、四は初期に於て些少の進歩をなし、其の後一時發達の休止ありて、急激の進歩に移るものにして、之を中段休止式といひ、最後に練習中何等注目すべき進歩なく、練習線の水平的なるものを停滞式といふ。最も多きは直進式及び律動式にして、停滞式最も少し。

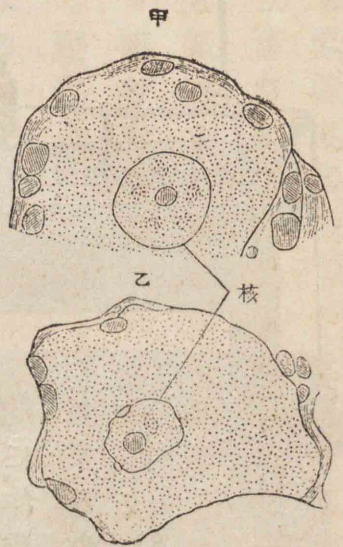
第二節 疲勞

疲勞の條件

疲勞の條件 疲勞は組織内に老廢物蓄積すること、及び疲勞物質と稱する一種の毒素の血液中に生ずるよりして、起るものにして、神經細胞に變化を起し、有機體の危害に向ひつゝあることを報告す。故に疲勞せる動物の血液を疲勞

疲勞による神經細胞の變化

甲、休息せるも
乙、疲勞せるも
甲乙共に猫の脊
髓神經節にし
て、その細胞を
時間的電氣刺激
と核は縮小し且
不規則となる。



象に陥ることあり。疲憊の極は死に至る。

疲勞の徵候

疲勞の徵候

疲勞の有無を検するには、其の現はす徵候を知らざるべからず。疲勞の感は必ずしも實際の疲勞に伴なふ者にあらず。たとひ疲勞するも、興味及び興奮によつて之を感じざる場合あり、また倦怠を生じ、作業に對する興味を缺き、之を厭忌するに至るも、實際には疲勞し居らざるこ

とあり。しかも疲勞は倦怠を生ずるに至り、倦怠は疲勞を催せざる者に注射して、之を疲勞せしむることを得、疲勞を忍んで尙活動を持續するときは、心身の勢力次第に衰へ、恢復困難となる。斯る状態を特に疲憊といひ、往々病的現象に陥ることあり。

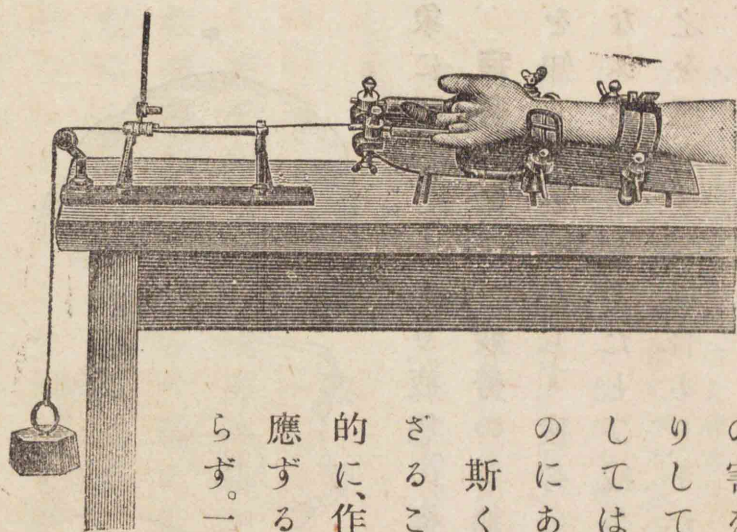
進せしむる條件となる。世人動もすれば二者を混同し、疲勞

の害を過大視せんとす。學校の課業よりして受くる疲勞は、正常の兒童に對しては恐らくさまで危険視すべきものにあらざるべし。

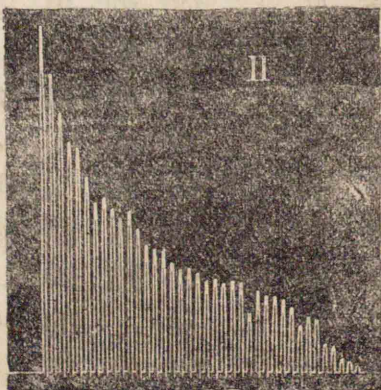
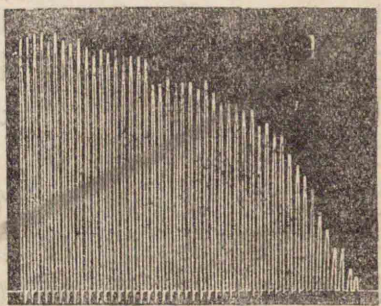
斯く疲勞の感は疲勞の事實を示さざることあれば、之を検するには、客觀的に、作業の質と量との變化、及び之に應ずる心身の變化を測定せざるべからず。一般に疲勞せるときは、知覺は遲鈍となり、聯想は緩慢に、想像は單純となり、思考は明晰を缺くに至る。感情は興奮する

も緊張せず、従つて努力をなすこと能はざるに至る。疲勞が作業量の變化として表はるゝ場合は、練習曲線と正反對の關係を以て表はる。上圖はモツソーが、自ら工夫したるエ

モツソーのエ
ルゴグラフ



疲勞の曲線



の關係を以て表はる。上圖はモツソーが、自ら工夫したるエ
ルゴグラフを用ひ、中指の屈曲の作業によりて測定せる疲
勞曲線の二標式なり。

疲勞と年齢 一般に、年少の兒童は年長者に比して疲勞
を來すこと早く、六歳の兒童は一時間若しくは半時間の課
業にて、已に疲勞の徵候を示せども、十三四歳の兒童は三時

疲勞と年齢

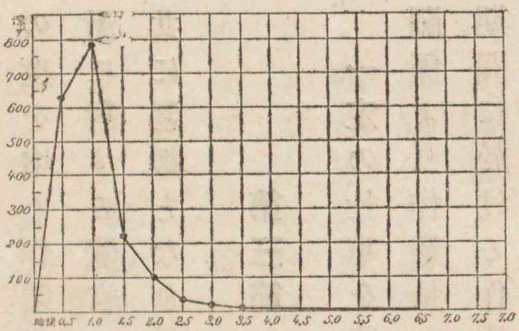
休養

間の課業の後、始めて明らかに疲労を認め得べし。されど發情期に於ては、再び疲労を來し易く、又學級兒童の數少きときは、各兒童の注意は、兒童數多きものに比し、一層緊張せるを以て、疲労の度従つて大なりとす。

休養 疲労を恢復するに要する休息の時間は、疲労の程度に應じて變化すべく、一般に筋肉の疲労は、感覺の疲労よりも、恢復に要する時間長く、作業に要したる時間よりも遙かに大なる時間を経過せざれば恢復し難し。又精神的作業を相互に轉換し、若しくは精神的活動と身體的活動との交代により、疲労を恢復し得べしとは從來一般に信ぜられたる所なれども、疲労の結果は一般的にして、一の作業によりて生じたる疲労は、心身の全部に波及するを以て、作業の轉換は單に兒童の興味を新にし、一時倦怠の情を防ぐのみに

睡眠

睡眠の曲線
（コイルシユツ）
水平線は時間數
を示し、垂直線
は之を覺ます人
が爲に要する、
球の落下の距離
を示す。



して、決して疲労恢復の用をなすものにあらず。身體的活動の精神的活動に於ける亦然り。休養と轉換とは明らかに區別せられざるべからず。

睡眠 疲労の恢復は一部は休息により、一部は營養分の攝取によりて成れども、其の十全なる恢復は之を規律的の睡眠に待たざるべからず。學者の實驗によるに、睡眠の深さは就眠後大凡四十五分乃至一時間の間に於て極度に達し、夫より俄に深さを減じ、四時間以後は殆ど同一の程度にて繼續すといふ。睡眠による疲労の恢復は、其の深さに正比例するが故に、大體二時間熟睡すれば、疲労の大部分は恢復せらる。若し睡眠することな

く徹底して作業をなす時は、睡眠の不足の度に應じて疲労の度を増し、作業量を減ず。睡眠中に於ては、一般に外來の刺激に對する覺官の興奮性著しく減退し、排泄機能呼吸脈搏共に遲緩となり、意識は朦朧たるか、或は全く無意識となる。

第三節 作業の徑路

一定の仕事を繼續して行ふ時には、練習疲労及び休養の關係より作業量は一定の變化をなして進行す。斯かる、一定期間に於ける作業量の變化を表はしたる者を**作業曲線**といふ。作業曲線の性質は、仕事の性質及び之をなす個人の業質によりて一様ならざるも、其の特徴の主なる者を擧ぐれば左の如し。

一、**律動的變化** 作業の進行は注意の律動に伴なひ律動的に變化す。

二、**初發努力** 作業の最初は感情緊張せるが故に、特に意を用ひざるも努力の表はるゝものなり。

三、**氣乗り** 作業が、一定の繼續により習熟の感を生じ、興味を喚起するに至れば、仕事に氣乗りを生ず。俗に「油がのる」とは此の時期を表はす者なり。

四、**終末努力** 作業の繼續は疲労により漸次其の量を減ずるも、仕事終末に近けりとの意識は、最後に努力を奮起せしめて、一般に作業量を増さしむる者なり。

第四節 作業に及ぼす薬品の影響

酒は作業の反應時間を、最初は短くするも、後之を長くし、感覺作用も亦最初は鋭敏となるも、後鈍くなる。然るに運動

酒茶・煙草

作用は最初より緩慢となるを常とす。茶は之に反し反應時間を短くし、感覺作用は多少鈍くなるも、運動作用は速かとなる。煙草の影響は、實驗の結果によれば、大體精神作業の能率を減じ、特に記憶心像の再生鈍くなるが如し。

再筆

餘論

第一章 兒童心身の發達

第一節 發達期の區分

發達期の區分
兒童心身の發達は常に相連續し、其の一定時期に於ける性質は、已に前時期に於て萌芽として存し、前時期に於て毫も其の影を認むること能はざる作用の突如として現出する如き事あるなし。故を以て、劃然時期を區分すること甚だ難く、諸學者の意見必ずしも一樣ならざれども、本章に於ては、之を幼兒期・兒童期・少年期及び青年期に分ち、各期に於ける特質を略敘せんとす。

發達の二形式

兒童の發達は常に連續すと雖も、其の速度に至りては必ずしも一樣ならず。概して之をいへば、(一)兒童の幼少なる間

は變化急速なれども、成長するに従ひ、變化の度次第に減じ、成人に至るに及びて略ぼ固定し、且(二)發達の進路は直線的に繼續せず、其の急激なる時期と甚だ遲緩なる時期と相入りて律動的に進むを常とす。此の二者は身體及び精神の各方面に亘りて行はるゝ發達の二大形式とも稱すべきものにして、兒童觀察に際し、教育者の特に注意すべき點なりとす。

第二節 幼兒期

幼兒期

生後より乳齒の略ぼ完備するに至る大凡二個年の期間を幼兒期といふ。此の時期は主として感覺機關及び筋肉を使用することInfancyを學び、外界に對して身體上の順應をなす時代にして、其の進歩極めて顯著なりとす。

身體

身體 初生兒は一般に頭大に、胸小に、足短く、身體權衡を失し、筋肉亦微弱なれども、三個月の終に至れば、正しく頭首の位置を保持することを得、六七個月にして始めて乳齒を生じ、又坐し得るに至り、九個月以後匍匐し、一年以後歩行を始め、十五個月以後に至り、ヒョウキ顛門閉塞す。身長及び體重の増加は極めて顯著にして、三島通良氏の調査によれば、滿三歳の兒童は身長に於て初生兒の約一倍半、體重に於て四倍強に達す。

精神作用

精神作用 幼兒の行動は、其の始め、反射運動、本能運動に過ぎざるも、次第に有意的動作に進み、二歳前後より模倣の本能著しく發現し、言語の收得盛なり。其の感情は冷熱常ならず、目に涙を湛へながら口に微笑を浮かむることすらあり。凡て新奇なる事物を好み、容易に注意を惹起するを得れ

ども、之を持續せしむること難く、其の行爲は凡て利己的衝動的なりとす。幼兒の感情及び意志の斯く不定なるは、是れ意識に何等一定の傾向なく、習慣の固定せるもの未だ少きが爲にして、其の反面に於て陶冶性の大なることを證するものなれば、幼兒期は教育上最も細心の注意を要すべき時代なりとす。古人も、幼兒が生後の三年に於て學ぶ所は、大學三年の課程に勝るものあり。」と言へり。

第三節 兒童期

兒童期

幼兒期の終より大凡七歳に至る間を兒童期childhoodと稱す。遊戲、模倣等順應的本能の著しく發現し、日常生活に關する習慣の略ぼ完成せらるゝ時代にして、若し幼兒期を以て身體上の順應をなす時期とせば、兒童期は之を精神上の順應を學

身體及び運動

ぶ時期といふことを得べし。

身體及び運動 身體の發達は幼兒期の如く急速ならざれども、滿七歳に至れば、身長は成人の約三分の二に達し、腦髓の容積は殆ど成人に近く、其の機能亦略ぼ完備し、乳齒は永久齒に代り始む。身體運動の統制力亦著しく發達し、自由に飛躍、跳走をなし、活潑なる戶外運動をなし得るに至る。

精神作用

精神作用 兒童長じて、五歳に達すれば、大凡大人の有する諸種の精神作用を具備す。されど其の機能は甚だ不完全にして、抑制作用未だ發達せず。時間及び數の觀念は極めて不確實に、類化作用は表面的類似に基づきて行はる。直觀及び想像は共に盛なれども、統制を缺き、感情及び意志は一時的にして暗示せられ易く、注意は感覺的無意的にして動搖不定なり。されど穿鑿本能極めて著しく、言語の發達と相待

ちて盛に質問を發す。故に或は此の時期を質問期と呼ぶことあり。

第四節 少年期

少年期

少年期は大凡七歳より發情期に至る。兒童期に於て得たる習慣を基礎となし、諸種の知識を收得する時代にして、略ぼ初等教育の期間に相當す。

身體

身體

學齡兒童に對する諸種の統計的調査によるに、男兒の體重は八歳乃至十二歳に於て大に増加し、身長は十三歳以後十五六歳に至る期間に於て急速に發達す。女子の發達も略ぼ之に等しく、八歳乃至十歳は體重の増加期なれども、身長は増加期は男子に比して早く、概ね十一二歳以後に於て發達最も旺盛なり。故に少年期の終に於ては女子の發

精神作用

達一般に男子を凌ぎ、男女兩性の區別次第に顯著となるに至る。されば少年後期を或は兩性兒童期と稱し、性的特質の未だ認め難き時代をば中性兒童期と稱することあり。

精神作用

此の時期に於ける心的特質は、第二篇及び第三篇に於て、略ぼ之を敘述せるが、今概括的に約説すれば、少年期は知識及び技能の收得に於て顯著なる進歩を爲す時代にして、讀書力次第に増加し、種々の知識を收得すると共に、筋肉活動亦微細に赴き、技能的練習を爲すに適す。殊に後半期に於ては、思考力稍發達し、直觀的具體的なる精神内容は次第に抽象的となり、想像も亦合理的なるを得るに至る。感情の一時的にして、意志の衝動的利己的なること、及び其の暗示せられ易きことは又少年期の特色なれども、之を前期に比すれば自制力稍發達し、十歳前後よりして眞面目に

學習し、多少有意的に注意を持続し得るに至り、衝動的行為は漸を追うて減少す。社會的感情未だ薄弱なれども、特に密接の關係を有する友人、故舊に對しては同情を有し、道德的感情徐々に發現す。

第五節 青年期

青年期

青年期は少年期の終より二十一二歳に至り、男女共に心身の大變化を表す時期にして、實に人生の一大危期なり。此の時期に於ては身體は著しく發達し、聲音は變化し、筋力次第に充實して大なる勞作に堪へ得べく、諸種の遺傳的資質明らかに認めらるゝに至る。又他方に於て思考力は殆ど完全の域に達し、諸種の觀念は益々精練せらるゝを以て、知的、道德的、宗教的の高尙なる情操は徐々に發達し、社會的本能性

的本能亦發現し、意氣大に昂り、行動甚だ活潑なり。されど青年期の男女は其の感情極めて激烈にして、名譽心強く、動もすれば主我の念に富み、長者に反抗するをも意とせず、一般に未來に對して大なる希望を抱き、空想に支配せられ易く、爲に、往々にして理想と現實との衝突を來し、或は厭世に傾き、或は自暴自棄に陥り、甚だしきは自殺をなすに至ることあり。其の他兩性の關係、飲酒、喫煙の悪習慣、諸種の犯罪の傾向等も丁年前後に起ること多し。是れ此の時期を以て人生の一大危期といふ所以なり。

第二章 人格及び個性

第一節 自我意識と人格

人格 精神の内容は頗る複雑にして、絶えず變化するも

自覺

のなれども、其の間に一定の統一を保持して相連續し(第一
章)加ふるに、是等の活動を「我が精神作用なり」と自覺す、
この自覺を自我意識といひ、一切の活動が自我意識により
て統一せられたるものを人格Personalityと言ふ。

自我意識の發達 人格は上に述べたる如く、思想感情及
び意志の統一せられたるものなるを以て、人格の内容は日
に月に變化し、同一の人格なるものあることなし。然るに吾
人は自ら顧みて自己の人格を同一なりと感じ、又他人につ
きて、昨日の人格と今日の人格と同一なりとす。如此は畢
竟人格の核をなす自我意識の同一性に基づくものにして、
其の實人格の不變なるを示すものにあらず。

幼兒の始めて生まるゝや、未だ自我の意識を有せず。彼は
自己の身體をも外物と同一視すれども、經驗の加はると共

身體的自我

に、自己の身體は視覺に現るゝのみならず、又運動感覺痛覺
等によりて特殊の感を起し、加ふるに是等の感覺及び之に
伴なふ感情は、一切の經驗に常存するを以て、始めて、身體と
外物とを區別し、一を我とし、他を物となす。是れ即ち自我意
識の端緒にして、名づけて**身體的自我**といふ。進んで、生物と
無生物とを區別し、自我と他我とを對立せしめ、「私」「僕」等の
語を使用し得るに至れば、自我の意識は次第に明瞭の度を
増し、反省作用の加はるに及び、更に一轉機をなす。蓋し身體
的自我は尙外物と等しく、知覺の對象となり、知らるゝ者の
一部なれば、之と區別して、知る所のもの、即ち精神を以て眞
の自我となすに至らざるを得ず。之を**精神的自我**といふ。さ
れど深く考ふれば、精神作用亦經驗の對象となり得ざるに
あらず。知覺・記憶・感情等は何れも我が精神作用として、我が

精神的自我

純粹自我

知覺し、我が記憶し、我が感ずる所のものなり。於是か、知られ感ぜらるゝ精神内容よりも、寧ろ知り感ずる「我」を以て眞の自我となすに至る。是を純粹自我と言ふ。斯く自我の意識は身體的自我に始まり、精神的自我を経て、終に純粹自我に達するものなれども、其の何れも經驗の主觀的方面を指示せるに於ては一なり。

人格内容の増大

人格の擴大 人格の内容亦年齢と共に發達す。幼時にありては、自己の快苦を以て其の主要なる要素となし、個人的なれども他の人格と接觸し、社會的經驗を積むに従ひ、自己の利害と他人の利害とを同一視し、人格の内容は次第に擴大せられ、家族、友人、教會、國家等を其の内に含み、「我が家」「我が國」などと稱ふるを得るに至る。

二重人格

人格は常に必ずしも完全なる統一をなすものにあらず、時としては其人

人格轉換

の統一を破り、意識の分裂を來すことあり。之を二重人格と云ひ、二重人格は更に之を左の二種に區分す。

甲 繼續的 二重人格 或は人格轉換といひ、同一の人が繼續的に、全く相異なる人格に變ずるものなり。人格轉換にありては、甲なる第一人格は突然乙なる第二人格に變じ、しかも毫も從來の經驗に對する記憶を有せず、全然別種の性質を有し、別種の行動を爲すに至る。而して此の第二人格が數時間、數週間又は數箇月の後に於て、再び第一人格に歸るときは、以前の第一人格の記憶を回復すれども、其の中間に於ける第二人格時代の記憶を有することなし。人格轉換は往々周期的に相交代して起ることあり。此の場合に於ては、第一人格の經驗は單に第一人格の記憶にのみ現れ、第二人格の記憶に現れず、其の第二人格の經驗に於ける亦然り。

人格分裂

乙 同時的 二重人格 又人格分裂と稱せらるゝものにして、同一意識が同時に、何等の連絡を有せざる二個の作用を營む特殊の現象なり。例へば第一人格が某氏と會話をなせる間に於て、第二人格は他人に對する書信を認め、しかも其の動作が毫も第一人格の意識に入らざるが如きはなり。

彼の狐憑病と稱するものは人格分裂の一種なりとす。

第二節 個性

個性の成立 人格の内容は經驗の進むと共に變化するのみならず、人によりて亦異なり、人々各特質を具へたること、宛も其の面の如し。人格を此の個人的特質の方面より見たるものを特に**個性**と言ふ。

Individuality

個性の因つて分かる、原因は種々あれども、之を大別して遺傳によりて得たる先天的要素と、境遇即ち自然界及び社會より來る影響による後天的要素との二となすを得べし。兒童の父祖より稟けたるものは一定の素因たるに止まり、未だ完全に發達せる性質にあらざれば、遺傳も境遇の影響を待ちて始めて完成せらるべく、境遇の影響亦遺傳の方

遺傳と境遇

統計と傳記

向に適應して始めて有效なりとす。二者は例へば乘法に於ける被乗數と乗數との如く、相待ちて一定の結果を生起す。若し其の一を缺くときは、乗數又は被乗數の零なる場合と等しく、其の結果亦無に歸せざるを得ず。

個性の類型 精神作用を知情意の三者に區分する如く、個性の差亦之に應じて、大凡材能氣質及び品性の三方面より觀察することを得。而して是等の個性につきて其の類型を定むるには、(一)統計により個性の相異を調査し、(二)傳記によりて、個性の發展を知らざるべからず。又個性の統計的觀察には之を調査する標準なかるべからず。精神検査法は此の標準を定むるものにして之に次の二種あり。

一、判斷價値 個人の行爲は眞善美の價値によつて判斷せらるべき者にして、検査の標準は論理學倫理學美學の定

材能

むる規範に従はざるべからず。

二、平均價值 眞善美の價値によつては評價し得られざる機能、例へば感受性の大小、記憶の大小、感情の強弱等は、多數の統計により、其の平均値を正常と認め、之より脱逸する程度によりて異常の度を定む。

一、材能

(イ)材能の相異 一定の標準によりて多數の個人を測定する時は、各個人の差は連續的段階をなして變化し、之を判然たる特殊の類型に分類すること困難なり、故に統計的測定の結果を圖表する時は、大體相稱的曲線として表はるゝを常とす。即ち平均値を表はす者最も多く、之より性質の相異なる度の大なる者程其の數減少す。されば材能の相異を定めんが爲には、便宜上一定の値を定め、之を尺度として材

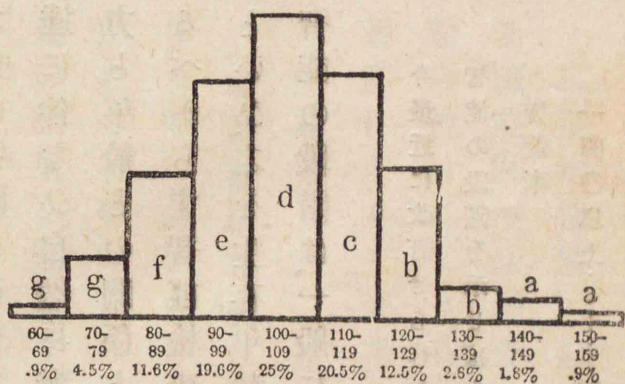
能の大小を測定せざるべからず。ビネーシモンの智能検査表は斯る目的によつて作られたる者にして、低能兒及び天才兒の判斷には便宜なる所多し。又智能は一般に年齢の發達に伴なひ自然に發達するものなれば、智能検査の示す能力と年齢との關係とによつて、個人の智能の程度を定めざるべからず。智能検査により定められたる年齢を精神年齢といひ、之を生存年齢にて除したる商を智能率 IQ₀といひ、智能の段階は、一般に、智能率の大小によりて之を定む。

今最近に改訂せられたる智能検査によりて得たる結果より定めらるゝ智能の段階を示せば次の如し。

智能率

- 一四〇以上……………天才(a)
- 一二〇—一四〇……………最上智(b)

智能の段階



注意と知覺の検査

検査することを要す。

注意及び知覺の検査

知覺は感覺を離れて存せず、感覺

- 一一〇—一二〇……………上智(c)
- 一〇〇—一一〇……………平均智能(d)
- 九〇—一〇〇……………下智(e)
- 八〇—九〇……………遲鈍(f)
- 八〇以下……………愚鈍(g)

智能検査は、材料に關する凡ゆる方面の機能について検査し、其の總合的結果より評價せる者なるが故に、斯かる結果よりは個性の特徴を明かにすること困難なり。個性の特徴を知るには智能を更に分析して

の辨別は主として注意作用によつて行はる。斯かる機能を検査する方法としては、各感覺の感受性を測定する機械を用ひざるべからざるも、特に辨別力に對する注意作用の性質を検査するためには、**抹消法**主として用ひらる。其他知覺を主とし、之に記憶及び想像作用の加はりたる者としては、**型板検査及び相稱検査**等用ひらる。

抹消法 辨別せしめんとする色・形・文字等を無意識に配列し、其の内より一個或二個以上の内容を選択發見して之を抹消せしめ、其の速度と確定とを測定す。

型板検査 種々なる形を、之に適合する場所に當嵌め又は種々なる方向に截斷されたる形を組合せ、又は一定の形を有する場所に當嵌めしむる者にして、其の速度と錯誤とを測定す。

相稱検査 相稱的に列べ得べき形を無秩序に、或者は裏返して與へ、之を相稱的に配列せしむる者にして、其の速度を測定す。

記憶と聯想との検査

知覺に於ける注意の類型は動搖型と固定型とに分つことを得べく、動搖型の者は知覺の速度に、固定型の者は知覺の確度に注意を向けんとする傾向あり。

記憶及び聯想の検査

聯想は心像なくしては行はれず、心像の再生と再認とは共に記憶作用によつて生ず、斯かる機能を検査する方法として、聯想の難易を検するには**命名法**、**置換法**等用ひられ、聯想の傾向を検するには**自由聯想法**、多少想像の加はりたる者には**墨滴法**用らる。而して記憶の持続性は第一篇第二章第三節に述べたるが如き、諸種の感覺についての再現的實驗の方法によるべく、記憶の確實性は**叙述及び報告の検査**によらざるべからず。

命名法 普通に赤・青・黄・緑・黒の五種の色彩百個を無秩序に配列し、之を命名せしむ。速度と誤謬とを測定す。

置換法 普通五種の形百個を無秩序に配列し、一定の形に對し一定の文字を記入せしむる方法なり。勿論聯合の順序及び組合は種々に變化せしむることを得べく、聯合せしめらるゝ事物の性質亦種々に變化することを得。但し其の數を増加するに従つて聯想は次第に困難となる。速度と誤謬とを測定す。

自由聯想法 與へられたる種々の言葉に對し、最初に想起せる言葉を畫かしめ、是等の聯想語の性質が一般的なるか、特殊的なるかを調査す。

墨滴法 種々なる形狀の墨滴を作り、そが如何なる事物を聯想せしむるかを檢す。聯想の速度と數を測定し、其の内容を調査す。

聯想に於ける記憶の類型は、第二篇第三章第二節に述べたる心像の型式による者にして、聽覺型に屬する個人が、視覺心像によつて記憶せんとすれば、記憶は困難となる。故に聯想の難易は個人による心像の型式に規定さるゝこと大なり。計算をなすにも數字を聽きて行ふは困難なるも、見て行へば容易なる者なるが如し。また機械的記憶に勝れる者必ずしも論理的記憶に勝れる者にあらず。報告による記憶の確實性は再生せらる

想像及思考の検査

る報告の数の多少に關係なし。次に聯想の傾向に於ては一般に低能なる者程大なる特異性を示す。

想像及び思考の検査 想像及び思考は記憶による心像の聯想なくしては行はれず。斯る機能を検査する方法としては、先づ思考の手段となる言語について、其の意味の理解を検定すべく、之が爲には**語義検査**を用ふべし。而して想像作用を主とする構成的總合的機能を検するには、**語構法構文法・完成法等**を用ふべく、抽象的分析的機能を検定するには**反對聯想法・類推法・序列法・解釋法等**用ひらる。

語義検査 一定数の語を選び、其の意味を説明せしめて、理解の明否不能等を一定の標準により測定す。

語構法 一定数の文字例へば「リ・ミ・ウ・カ・エ・ネ」の如き六個の文字を與へ、是等の文字を一回使用することによつて、一定の意味ある語を作らしむ。一定時間内に作り得る語數を測定す。

構文法 三語或は二語を與へ、是等の語を使用して任意の文章を作らしむ。

完成法 之に言語による者と形による者とあり。前者は語の不足せる文章を與へ、之に適當なる語を補つて完全なる文章となさしむる者にして、**エビングハウス**の創意に成る。後者は種々なる部分の缺けたる繪畫又は一定の目的に使用さるべき機械の圖等を與へ、之に適當なる部分を補つて完全なる繪畫或は機械を完成せしむる者なり。

反對聯想法 一定の語を與へ、其の反對語を聯想せしむる方法にして、之に一定の語に對して反對語を聯想せしむるものと、既に與へられたる數語につきて、反對語を發見せしむるものとあり。

類推法 一定の關係を有する語或は數を與へ、此と同様の關係を有する語或は數を、他の與へられたる語或は數につきて、求めしむる方法なり。例へば頭——帽子なる關係を有する語を與へ、手に對して此と同様の關係を有する語を書かしめ、或は2・4・8なる關係を有する數を與へ、3・6に對し此と同様の關係を有する次ぎの數を書かしむるが如し。

想像及び思考に於ける類型

序列法 一定の標準に従つて、與へられたる語の順序を定めしむる方法にして、例へば「部分」と「全體」なる標準によりて、室家町・村郡縣國の如き語の順序を定むるが如し。

解釋法 一定の物語を聴かしめ、其の意味を解釋せしめ、理解の程度を檢し、或は其の物語についての批判をなさしむる方法なり。

一定の事物について思考する場合、其の手引となる者に、言語と、直觀的表象とあり。前者を思考に於ける言語型と稱し、後者を直觀型と稱す。一般に言語型に屬する者は、抽象的思考に秀で、直觀型に屬する者は、具體的想像に秀づ。更にまた想像作用には直觀的、受働的想像に秀づる者と、構成的、能動的想像に秀づる者との別あり。思考作用には演繹的推理に長ずる者と、歸納的推理に長ずる者とあり。二者相互に結合して、左の四種の類型を生ず。

材能の相關

(一) 觀察的材能 直觀的想像と歸納的推理との結合せるものにして、例へば博物學者の如し。

(二) 發明的材能 構成的想像と歸納的推理との結合せるものにして、發明家の特質なり。

(三) 分析的材能 直觀的想像と演繹的推理との結合せるものにして、幾何學者には之に屬するもの多し。

(四) 思辨的材能 構成的想像と演繹的推理との結合せるものにして、哲學者に多く見る所なり。

口) 材能の相關 以上の如き方法によりて行はるゝ検査は、同一個人の材能を種々なる方面より検査する者にして、一個人についての、斯かる検査の結果を總合して表はしたる者を、**個性検査表**と稱す。多くの個性検査表によりて、個人の各能力を比較するに、一機能に秀でたる個人は他の機能

に於ても亦優秀なること多し。即ち一個人に於ける各機能は概して平衡を保てる者にして、斯く諸種の材能が同一個人に於て相關的に平衡を保持せんとする傾向を材能の相關と稱し、其の程度を數學的測定したる者を材能の**相關係數**といふ。

氣質

二、氣質 生理状態に起因する先天的偏向を氣質と言ひ、其の中心要素は情緒なり。氣質の説は希臘の學者が人體に於ける四種の液體の分量上の差異よりして、四氣質を分かちたるに始まり、由來する所甚だ遠し。四氣質とは**多血質**、**胆汁質**、**神經質**、**黑胆汁質**及び**粘液質**にして、現時にありては、主として刺激に對する情緒反應の如何を以て、區別の標準となす。

四氣質の特徴

多血質のものは刺激に對する反應急にして且弱し、快の

感情に秀で、快活なれども忍耐力に乏しく、舉動輕躁なるを免れず。**胆汁質**のもの、反應は急にして且強し、不快の感情に傾き、短氣にして憤怒し易けれども勇往果斷の氣象に富み、舉動亦活潑なり。**神經質**の人は反應遅けれども強し、從つて長く同一感情に支配せられ、憂鬱にして悲觀的なるを常とす。觀察緻密にして智力に秀づるを以て、古來天才と稱せらるるものには此の氣質に屬するもの甚だ多し。最後に反應の遅くして且弱きものを**粘液質**となす。快の感情に傾けども活氣熱心に乏しく、舉動緩慢なり、されど心情の冷靜なるが爲に事に當りて動せざるは其の特長なりとす。

氣質は單に個人によりて異なるのみならず、同一の人にも、年齢によりて多少の變化を示すを常とす。概して之をいへば、幼時は多血質、少年期は神經質にして、壯年時代は膽

汁質に移り、老年に至りて粘液質に傾くが如し、又兩性の區別及び國民の相違によりても、氣質の傾向に多少の差異を認むるを得べし。

品性

三、品性 品性の相異は之を分量と性質との二方面より觀察するを得べく、分量即ち意志の強弱の上より、確實強固なる品性と薄弱にして動搖する品性とに分ち、性質の上より、不良なる品性、劣悪なる品性等に區分す。

男女の差

男女の特質 男女兩性を比較するに、男子は女子に比して個性の相違著しく、男子にありては上は天才より下は殘酷なる罪人に至る迄、個性に大なる間隔を示せども、女子は之に比すれば比較的個性の間隔少しとす。女子は其の長所として忍耐、忠實、節約等の美德を具へ、同情と想像とに富めども、反對に、移り氣多くして暗示せられ易く、稍もすれば

誇張に傾き、抽象的思考に適せざるの缺點を有す。又女子は男子に比して其の精神内容、一層緊密に融合するを以て、一定の事業に全力を傾中することを得れども、動もすれば偏見に驅られて、論理的辨別性を缺き、眼前の印象に支配せらるゝの憂なしとせず。

個性と教育

個性と教育

兒童の個性には善良なる方面と不良なる方面とあり、善良なるものは之を助長すべきも、不良なるものは力めて之を矯正せざるべからず。妄りに個性を抑壓するの不可なるは言ふ迄もなけれども、個性の向ふ所に一任し、之に阿るに至つては、弊や又大なりと言はざるべからず。兒童の個性と社會の要求との二方面より考察し、個性を善導して、最良の人格を完成せしむるは、教育終局の目的とする所にして、個性調査の必要なる所以實に此に存す。

人格と社會

第三章 社會心理

第一節 社會的結合

人は社會の内に生まれ、社會に生存し、社會の影響を受けて進歩發展す。他我を離れて復た自我の意識なるものあることなく、孤獨なる生活に於ては人格の發達を見ること能はず。斯く社會と個人とは密接なる關係を有するを以て、本章に於ては社會心理の中、特に教育上参考とすべきものにつき、二三の簡單なる敘述を試むべし。

群集本能と同類意識

人々相集り社會をなすは、種々の社會的本能、就中、群集本能に基づき、意識の稍發達せる後には、同類意識によりて、己と相似たるものに接觸せんとす。同類意識とは同氣相求むるの根本性向にして、同一種族に屬するもの自ら相接近し、

實際的效果

同一種族の内において思想及び感情の傾向相似たるもの自然に相合して、種々の團體を組織するは、何れも此の意識を背景となす。古人も言へる如く、人は本來社會的動物にして、眞の孤獨は一日も其の堪へ得る所にあらず。

群集本能及び同類意識によりて成立せる社會は、相互の共働によりて生ずる**實際的效果**によりて、一層結合を強めらる。敵の攻撃に對して自己を保護し、及び食物、衣服等の需要品を得るには、目的を同じうするものにして團體を組織し、分業によりて活動するに如くはなし。於是か人々理智の判斷により、自ら社會の利害と自己の利害とを同一視し、社會的結合は次第に強固となり、其の組織は次第に秩序的となるに至る。

言語

社會的結合の最も有力なる方便は**言語**なり。人は言語に

よりにて相互に思想感情を交通し、同時に社會的活動の結果は言語文字によりて後代に傳へらる。言語及び文字の社會的效驗は之を個人に於ける神經組織にも譬ふべく、又記憶及び遺傳の代用をなすものとも見らるべし。教育上國語教育の頗る重要なる所以此に存す。

第二節 暗示模放及び同情

社會を組織する各員は、一方に於て共通の性質を有すると共に、他方に於て、また各特殊の個性を具ふるを以て、個性の相違に應じ、身體上及び精神上の資質に於て自ら優劣あるを免れず。社會萬般の事象は此の優者と劣者との相互關係によりて決定せらるゝものにして、二者の心的關係は、これを自己主張と精神的服従との二方面より考察するを得

べく、後者は更に之を暗示、同情及び模倣の三點より見るを得べし。

暗示

暗示と暗示感性 暗示とは暗示者の與へたる觀念を、何等の論理的根據なく、しかも確信を以て受容するに至らしむる作用にして、幼兒に水を與へて、甘しと暗示するとき、毫も躊躇する所なくして、之を「甘し」と信するが如し、故に暗示は、單に、一の觀念を受容するに止まらず、同時に之を信仰し、且暗示に反抗する心的勢力を打破する作用にして、自ら觀念に相當する行動を誘發するの傾向を有す。

暗示感性

- 暗示感性を大ならしむる原因に大凡左の四種あり。
- 一、催眠状態、ヒステリー、極度の疲勞等によりて腦の異常を來せるとき。
 - 二、暗示せられたる觀念に關係ある知識の缺如せること。

三、暗示を與ふる人の勢力を偉大なりと感ずること。
 四、暗示を受くる人の自信力を缺くこと。
 以上諸種の理由により、女子は一般に男子よりも暗示せられ易く、年少者は年長者に比して暗示せられ易し。實驗によるに七歳の兒童は十五歳の青年に比して二倍以上の暗示感性を有すといふ。又群集は個人よりも暗示感性に富み、動もすれば輕信に陥ることあり。蓋し、群集は知識よりも寧ろ感情によりて動き、暗示觀念は多數の勢力に支へられて一種の魔力を有するに至ればなり。

何等の根據なくして、暗示せられたる觀念に反對する行動を起さんとするを**反對暗示**といふ。右へ向くべしといへば却つて左に向く如きは往々兒童に見るところなり。人によりては反對暗示が一種の習慣となり、衣服、食事作法等に於て一々社會の習慣に反對せずんば措く能はざるものあり。

催眠現象

人為的に暗示感性を昂進する方法として催眠現象あり。催眠術は多くは單調なる刺激を繼續し、被術者の暗示感性の亢進せるを利用して催眠せしむるものにして、若し被術者の暗示性豫め高まり居るときは従つて催眠状態に陥り易し。

催眠状態に於ては被術者の意志作用は全く停止し、其の注意は施術者の發したる命令の方向にのみ固着し、施術者の欲するがまゝに身體の位置を固定し、呼吸、血行、消化等の諸作用を適宜に亢進若しくは減退せしめ、更に進んでは、施術者の暗示に應じて、任意に運動及び錯覺、幻覺等を生起せしむることを得べし。而して是等の感覺的運動的暗示は多く一時的のものなれども、時としては醒覺後に至る迄之を持續せしむることを得。

模倣
同情

模倣及び同情 暗示は觀念の受容によりて行動を誘發するものなるが、若し此の觀念に代ふるに動作を以てし、一が自らにして他の動作を寫さんとするときには特に之を**模倣**と言ひ、一が他の感情を自己に寫すを**同情**といふ。故に或

は同情を感情の内部的模倣と稱することあり模倣と暗示とは密接に相關係し、一般に暗示感性高まり居るときは、模倣亦容易にして、風俗習慣傳説行動信仰等の社會に波及するは、主として二者の共働による、殊に感情的興奮の状態にあるときは、人は、殆ど暗示と模倣とに支配せられ、冷靜なる理智の判斷を容るゝの餘裕なし。一揆暴徒が無謀の擧を遂行して敢へて憚る所なきは之に由る。

模倣の社會的意義此の如く大なるを以て、社會學者中には之を以て社會一般の現象を支配する根本原則となし、人は多種多様の模倣の集合點に過ぎずと迄主張するに至れり。

第三節 自己主張

人は單に他の暗示を受け、之を模倣するに止まらず、又他

干涉の拒斥

に對して自己を主張し、己が行動に對する他人の干涉を一々拒斥せんとするの本能を有す。小兒が己が遊戲を妨ぐるものに對し、強き反感を示し、大人が同輩と競争し、讐敵と争鬪するは何れも此の本能に基づく。自己主張の本能は又自己の能力才幹等を公衆に表現し、公衆の模倣を促さんとの強き欲望となりて發現す。自己表現の高度に發達せるものは或は虚榮となり、或は高慢となり、或は他を統率せんとの大野心となる。

自己の表現

自己主張は、斯く、干涉を排せんとする消極的方面と、自己を表現せんとする積極的方面とを有すれども、何れも其の適度なるに於ては、社會の存續發達に缺くべからざる者にして、一方には暗示模倣等による服従あり、他方には自己主張に起因する統御あり、暗示模倣等によりて社會の風俗習

慣等を萬衆に傳へ、自己主張に基づく競争によりて社會の進歩を來す。服従と支配と、此の二者の適當なる關係を待ちて、社會は始めて整然たる秩序と鞏固なる統一とを保持することを得。

支配者の資質

支配者 社會を支配する資質は、多くは人々の稟賦に基づき、求めて得べきものにあらざること、例へば詩人の如し。有力なる支配者は、自ら一種の魔力を具へ、暗示し、主張し、支配するの力に富み、其の多くは、冷靜にして寡言なり。彼は理智の判斷よりも、寧ろ群集の心理を洞察し、之を左右するの直覺と不動の信念とを有し、嚴正にして犯すべからざる態度を保持す。人を支配する原動力は卓越せる意力にあり、知識は之を助くるものたるに過ぎず。

第四節 社會組織

有機的統一

社會精神 社會は個人の結合より成る、即ち社會とは各個人の思想、感情及び意志が相互に相聯合し、支配者と服従者との關係によりて、有機的統一を保持せるものにして、之を、彼の有機體が、各機關の間に分業を有しながら、しかも整然たる統一を保てるに比するを得べし。謂ふ所の有機的統一とは、個人を單位とせる社會が、個人の結合によりて、新たなる一種の統一を具ふるに至るの義にして、個人の思想、感情、意志が相互の結合一致によりて、個人に見る能はざる特異の精神的傾向を有するに至ること、例へば感覺の結合して知覺となるに當り、感覺には見る能はざる新たなる意義を加ふるが如し。斯く個人の精神を構成要素となし、而も個

社會精神

人の精神とは異なる思想感情及び意志の統一的活動を社會精神と言ふ。個人と社會とを比較すれば、感覺感情等、一々の精神的要素は社會を構成せる個人に、個人の精神は社會精神に、個人の人格は社會の有機的統一に相當すと見られ得べし。

種々の結合

社會的結合の種類 社會的結合は種々の方面より分類することを得、或は之を無意的に自然に起る結合と、有意的結合とに分ち、或は之を一時的結合と永續的結合とに分ち、或は之を各員が一定の空間に於て直接に結合するものと、交通機關文書等によりて間接に結合するものに分ち、例へば同一電車の乗客、演劇の觀覽者に多く見るが如き結合及び一揆の如きは主として一時的無意的の結合、種屬家庭及び國家を基礎とせる結合は永續的無意的結合に

して、國語の一致、興味の合一等より起る結合も無意的なるもの多し。又兒童の競技團體、學者の會合、工場市場等に於ける結合は何れも一定の目的を有する有意的結合なり。されど有意的結合と無意的結合とは其の間に判然たる區劃を立つること難く、其の始め無意的にして、後有意的に移る場合亦少からず。偶、電車に於て一片の言辭を交はせしものが互に盟約して刎頸の交を結ぶに至るが如し。

第五節 社會の進歩と個人

社會的結合の目的は、個人の共働によりて、社會及び個人の進歩發展を圖るにあり。されど社會及び個人の進歩を圖らんには、各個人は先づ、社會に行はるゝ傳説習慣等を身に體し、社會に存續する精神的財産を類化し、之に順應せざる

類化

創造

へからず、中にも國家の法律及び習慣に服従し、國語を收得し、歴史及び國家的傳説を理解するは、最も重要なる事業にして、是が爲には學校・家庭・寺院等種々の團體の共働を要す。一度社會的財産を類化するを得ば、更に進んで、個人の**創造的活動**によりて社會に寄與し、社會の進歩に貢獻せざるべからず。先づ類化あり、然る後に構成あり。故を以て、偉大なる天才は凡て其の始め、偉大なる模倣者たり。カントにあらざれば、彼が如き哲學上の大著述を完成するを得ざれども、反對に又獨逸にあらざれば、カントを生むこと能はざるべし。類化によつて社會より取り、創造によりて社會に與ふ、而して與へたるものは暗示と模倣とによりて、再び社會全般に放射し、社會的財産の一部をなし、習慣・傳説等となりて固定す。取りて而して與ふ、とは社會及び個人の進歩の公式とも

稱すべく、類化と構成との絶えざる交渉により、人類は無限に向上發展す。

輓近心理學終

大正十一年九月二十三日
 大正十三年一月十五日
 大正十三年一月十五日
 訂正再版發行
 訂正再版發行
 訂正再版發行

定價	金五拾八錢
價	大正十三年度臨時 金壹圓四錢



著者 篠原助市
 著者 佐藤熊治郎
 著者 小川正行
 發行者 大葉久吉
 印刷者 東勇治

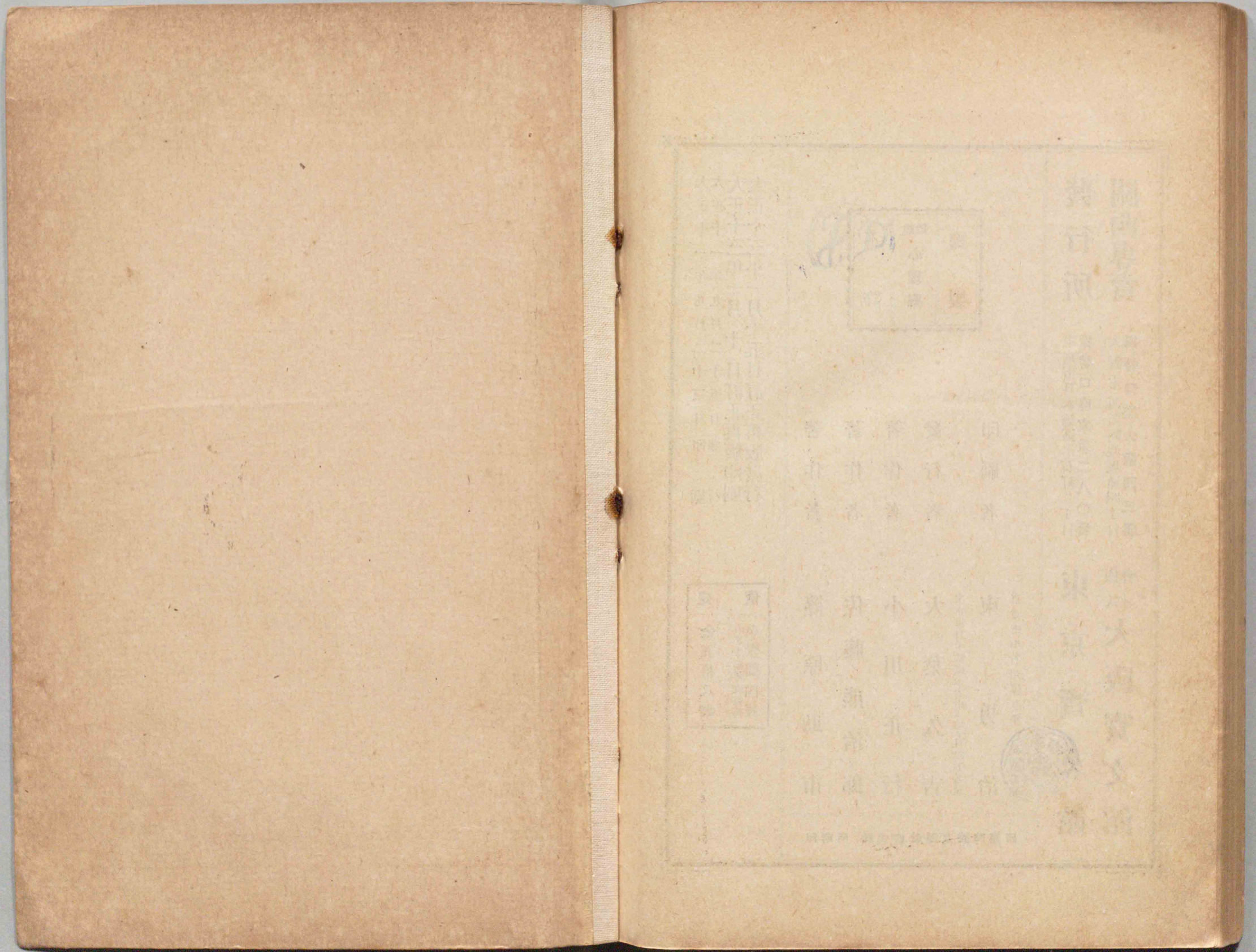
東京市日本橋區本石町二丁目拾五番地
 東京市小石川區久堅町

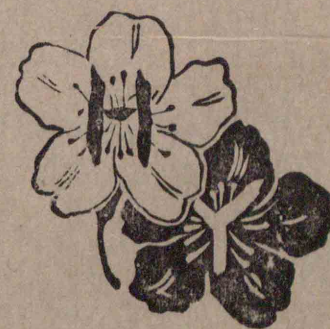
發行所
 關西專賣

東京市日本橋區本石町二丁目
 振替口座東京二八〇番
 大阪市西區阿波堀通四丁目
 振替口座大阪四三番

株式會社
 東京寶文館
 大阪寶文館

印刷所 株式會社寶文館印刷所





広島大学図書

0130449500



庫
23
500